

私のまちがってしまった青春ラブコメはもう取り戻せないのだろう
か

ぶーちゃん☆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

海浜総合高校に通う二宮美耶は、中学時代のトラウマを抱え、ぼつちな高校生活を送る高校二年生。

そんなぼつち生活を満喫していたある日、街で偶然美耶にトラウマを与えるきっかけとなつた同級生と出会う事に……

目 次

【後日談⑥】 元ぼつち達の青春ラブコメはこれからだ！	182	163
【特別編】 メリークリスマス with 元ぼつちーズ☆	155	
ぼつちになつた少女	1	
ぼつちとぼつちは引き寄せ逢う	7	
遠い記憶を夢見るぼつち	14	
ぼつちインザストーキング	20	
ぼつちもリア充も県民御用達オアシスがお好き	25	
ぼつちなのに友達（未満）が出来ました	32	
ぼつち、決意を固める	40	
リア充に囮まれるぼつち	48	
しつこい追及にうんざりぼつち	55	
そしてぼつちとぼつちの邂逅はここに果たされた	62	
震えるぼつち。いろんな意味で	72	
戦慄する二人のぼつちと三人のリア充（笑）	80	
リア充（笑）よりも震え上がるぼつち	87	
私、ぼつちを卒業して普通の女の子に戻ります	94	
【後日談①】 心はまだまだぼつちを卒業できないようです	111	
【後日談②】 元ぼつちは卑猥な目に合わされる	120	
【後日談③】 かしこまられる元ぼつち	130	
【番外編3・5】 元ぼつちにかしこまり【オマケ】	140	
【後日談④】 元ぼつちは残念吸引達人の称号を手に入れた	149	
【後日談⑤】 彼女（元ぼつち）が目指す先（椅子）は遙か彼方……		

ぼつちになつた少女

私、二宮美耶は、現在海浜総合高校に通う高校二年生である。

容姿はまあそこそこ端麗。

我ながら突出した美少女という程でもないけど、今まで男子から何度もか告白された事もあるから、その認識でまあいいだろう。

成績も、県内有数つてわけじやないけど中々の進学校でもある海浜総合で常にベスト50位以内には入つてるし、運動神経も結構いい方だから、文武もまあそこそこ両道つてところかな。

そんななかなか高スペックで、高カーストグループで青春を謳歌してそんな私は、現在絶賛ぼつち人生真っ盛りなのである。

※※※※※

私は、中学の頃までは元々人氣者だった。

明るく可愛く優しいわたしというキャラで生きてきた私は、中二の時のとある事件で人生が一変してしまった。

そう。あれは忘れもしない……いや、ホントはもう顔も名前も忘れちやつたけど、アイツに告白擬いの事をされちやつたのがケチの付き始めなのだ。

私は中学二年に上ると、誰もやりたがらない学級委員に立候補した。

理由は、くじ引きで委員長に決められた男子（アイツ）が女子の委員を決めなければならなくて困っていたから。

ここで明るく元気に、困つてモジモジしている暗そうな男子を助ければ、クラス内のウケが良くなると考えたから。

『これから一年間よろしくね』

と笑顔で挨拶してあげたらあの男子喜んでたつけ。

正直その男子の事は暗くてキモくてどうでもいい存在だと感じていたのだが、一緒に委員の仕事をしていく内、まあクラスの他の娘達が言うほど悪いヤツでも無いかな、と。むしろ結構良いヤツかも、と思えるくらいの認識へと変化していき、言うほど嫌いでは無かつたの

で、可愛いわたしを演じつつフレンドリーに対応していた。

優しい美耶ちゃんを見つめる周りの目だつてあるしね。

でもやつぱりそこがいけなかつたんだよね。私的には全く嬉しくない勘違いをさせてしまつた……

あれはアイツと学級委員を一週間ちよつとやつたある日の放課後、担任に命じられたプリント回収を一人でやつてる時の事だつた。

アイツは急に何言つてんのコイツ？と思うくらいの唐突さで質問を投げ掛けてきた。

『あ、あのさ、好きな奴とか居るの？』

『えー、居ないよー』

『いやその答え方は絶対居るつて！誰？』

『……誰だと思う？』

『わつかんねーつて。ヒントつ！ヒントちようだい！』

『ヒントと言われてもなあ』

『あ、じゃあイニシャル、イニシャル教えて。苗字でも名前でもいいから、頼むつ』

『うーん、それならいつかなあ』

『マジで!? やたつ！で、イニシャルは？』

『……H』

『え……それって……俺？』

『え、何言つてんのそんなわけないじやん、何、え、マジキモい。ちょっとやめてくんない』

『あ、はは。だ、だよなー。ちょっとボケてみた』

『いや、今のないと思う……もう終わつたし、私帰るね』

正直マジで引いた。

ん？てか名前も忘れてるようなヤツなのに、イニシャルはHなんか。

とにかく今まで、どうでもいいんだけどまあ結構良いヤツつて存在だつたのが、一気にキモいヤツつて認識に変わつた瞬間だつた。ま、私が勘違いさせるような態度取つてたのがいけないんだけど

……

でも本当にいけなかつたのはそこからだつた。

この告白モドキ事件は、ここで終わらせておけば良かつたんだ。

※※※※※

『でさー、今日の放課後——に好きな奴とか居るの？』とかつて聞かれてさー』

そう。私は帰宅してから、当時仲の良かつたしーちゃんに、その事件の事を笑い事のように根掘り葉掘り話してしまつたのだ。まさかその翌日、その笑い話がクラス中に広がつてしまふなんて思いもせずに。

最初はまだ良かつた。単なるあの男子の笑い話だつたから。元々クラスで浮いてた奴の弄られる要素が一つ増えただけ。

それだけだつたはずなのに、いつの頃からあの男子が弄られた際に咄嗟に出す苦笑いを見るのが辛くなつていた。

……それはたぶん罪悪感なんだと思う。

こんな大事になるとは思わなかつたから。暗いけど、キモいけど、実は結構良いヤツだと知つてたから。

人の噂も七十五日。

実際には七十五日も掛からず速攻で飽きられたのだが、まあとにかくその話が飽きられた頃には本当に助かつたと安心してた。

ようやくこの罪悪感から解放されるんだ！つて。ようやくあの件で弄られて苦笑いをするアイツの辛そうな顔を見なくとも済むようになるんだ！つて。

でも……それなのにアイツは次から次へとおかしな話題をクラス中に学年中に提供しまくつたのだ。

アニソンのラブソングを告白代わりに女子に渡して、それを校内放送で流されたり、三年に上がってクラスが分かれてからも、今度は私よりも人気があつてトップカーストの女子に告つてクラス中、学年中に噂を広められたり……！

なにが辛いって、アイツがそういう噂を自ら立てる事で、その度に私のあの時の噂までが常に引き合いに出されることだつた。

『そういうえば二年の時、美耶もアイツに告られたよねー！』

『あー！あつたあつたあー！あの時も超笑えたよねー！』

『美耶可哀想だつたあ！だつてアイツ超キモかつたもーん』

『あ、あはははは……』

うん……そ、そうだよねー……』

アイツが弄られという名の笑い者にされる度に、常に私が引き合いに出される毎日に、いつの間にか私は人間関係つて恐い、人間関係つて面倒臭いって感じるようになつてしまつた。

最初はキモいと思つたから单なる出来心で他人に話し、それが次第に罪悪感へと変わり、そしてそれが周りの人間への嫌悪感に変貌した頃には、一人の立派なぼつちの出来上がりでござります。

そう。私はぼつちとは言つても、ただ他人と関わるのが面倒臭くなつちやつたから、自らぼつち道を歩く自立型ぼつちなのだ。

ぶつちやけ、アイツのせいでこんなになつちやつたとかつてムカつく気持ちちはちょっとだけある。

でもそれは自業自得だもんね。ちょっとだけムカつくけど、決して恨んでるわけじゃ無い。

ま、アイツのおかげで上辺ばっかりだつたしょーもない人間関係をリセット出来たんだと思えば、むしろ有難いまであるの、かな？

※※※※※

私は今、学校帰りに千葉駅のパルコに寄つている。

ぼつちというのは、行き着く先は一人でどれほど時間が潰せるか？

一人でどれほど楽しめるか？にあるので、必然的に自分なりの趣味を見付ける事こそが極意となるわけだけど、私はその一人遊びの対象が漫画やらノベやアニメやゲーム。つまりサブカルチャーに向いた。

まあそこまで大した趣味でも無く、人並みに嗜んでいるつて程度なんだけどね。

今日はそんな趣味の買い出しの為に書店に訪れたんだけど、目的のブツを手に入れた後は久しぶりに服なんかを見ていた。

まあぼつちでサブカル好きな寂しい女子高生ではありますが、そこはやっぱり女の子。ちゃんとお洒落は楽しみたい訳なのですよ。

「あつ、スミマセンっ」

ちょうどそんな時、とても見覚えのある制服に身を包んだとしても可愛い女子高生と肩がぶつかつた。

「あ、いえいえ、こちらこそ」

ペコリと頭を下げるその可愛い女子高生に、私も頭を下げて謝った。いくらぼつちとは言え、マナーとかはちゃんとしてなきやダメですよね。

それにも……総武高かあ。

こちら辺の高校生で総武高校の制服を知らない奴は居ない。我が海浜では無く、あっちこそが県内有数の進学校なのである。

かくいう私も、人間関係をリセットしたくておな中からは誰も行かなそうな総武高校を第一志望に挙げて頑張ってはいたんだけど、力及ばず落ちちゃつたんだよねー。

だからこの制服に若干のコンプレックスを持つてたりするのです。くつそう！こんなに可愛くて頭緩そうなビッチが総武に受かるだなんてつ！しかも同じ総武生の彼氏付きかよ！と軽く憎々しげにその可愛い総武生を見ていると、その総武生はその彼氏の腕をグイグイと引っ張っていく。

「ちよつとせんぱーい！早く行きますよー」

「……だから引っ張んなつづてんだろが……」

ちつ、イチャイチャしやがつてバカツップルめが。

そう思っていたら後ろから乳のデカイ美少女が慌てて走ってきた。

「ちよつとヒツキー待つてよー……つてかいろいろはちゃんヒツキーにくつつき過ぎー！ヒツキーマジキモいつ！」

「なんで俺が罵られるんだよ……」

「今日はわたしの買い物に付き合つて貰つてるんですから結衣先輩は邪魔しないでくださいよー！」

「ぐぬぬっ」

お、オイオイ総武生……カツプルかと思つたら三角関係かよつ！こ

のリア充共め爆ぜろつ！

「ちよつと貴方達、いい加減にしなさい……そして一色さん？」

「はっ、はいいつ……」

「バイ菌が移るから、今すぐその男から離れななさい。今すぐによ
まさかの四角関係でした。

ちょっと総武高校どうなつてんの!?ただれまくつてんじやない
……!しかもこの娘たち、みんな超可愛いんですけども!?

こんな美少女を三人も引き連れてる爆ぜてしまえばいいようなり
ア王つてのは一体どんなもんなのか。

俄然興味を持った私は、そのリア王たる総武高校男子生徒に目を向
けるのだつた。

つづく

ぼつちどぼつちは引き寄せ逢う

ある日の放課後に千葉のパルコで出会った四人の総武高校生徒。

その中の一人でもあり、すつごい可愛い娘三人を侍らせている憎むべきリア充のそのまたさらに上におわすリア王たる男子生徒。

私は、一体どんな奴なんだよ、その青春謳歌君は……と、視線をそいつに向けて軽く驚愕した。

……は？ コレがリア王？

いや、確かに良く良く見れば顔の造形は中々に整つてはいる。それでも特に突出したイケメンで風貌では全然ない。

むしろ程よく？ 曲がった猫背やボサつとしたヘアースタイル。そして何よりこの目！ この、まるで世の中の全てを舐めてんのかよ？ と思わせるくらいの腐つた目が、せつかくの中々に整つた顔立ちを台無しにしていて、とてもじやないけどモテ男がオラオラと放ちまくつれるオーラとは真逆の印象しかない。

「もーっ！ だから雪ノ下先輩達に今日のお買い物バレたく無かつたんですねよお……」

「ちよつといろはちゃん!? 今日のお買い物はお仕事のなんじやないの！」

「ひつーそ、 そうなんですけどお……」

「だつたらそもそも私達に内緒でそこの男だけを連れ出すこと自体が論理的におかしいと思うのだけれど……？」

「……はいいつ」

「大体お仕事のお買い物なのに洋服見に来るとか意味わかんないしつ！」

「！」

「……もうつ、だから嫌だつたんですよ……」

「一色さん何か言つたかしら？」

「いろはちゃんなんにブツブツ言つてんのかな……？」

「ひいいつ！ な、なんでも無いですー！」

「……どうでもいいけど早くしてくんね？」

「「……は？」」「

「……」

なにこのハーレム修羅場……

でもやつぱりどう見てもリア王どころかリア充にも一切見えない目の腐った男子を、この美少女三人組が取り合いしているのは間違いないみたいだ。

最近はああいうのがモテるの？今度のはマスメディアさん達は「なに系男子（笑）」とかつて造語を作つて痛々しいくらいに必死で流行らせようとするんですかね。草ボーボーになるんでマジやめてください。

でも…………なんだろう？

私はあのリア王（仮）を知つてる気がする。どつかで会つたことがある気がする。

でも生憎私には目の腐った友達もリア王な友達も居ないはずだ。あ、そもそも私友達が居ませんでしたっ！

おな中の男子かな……

でも残念ながら、私は中学卒業と同時に中学の同級生の顔の記憶なんかどつか飛んでつちやつたんだよね。いや、意識的に消そうとしたままである。今ではあれだけ仲の良かつたはずのしーちゃんの顔でさえ思い出せないし、街で偶然声掛けられても「誰だっけ？」って本気で言える自信さえある。

人の脳つてすごいわ。興味の無い事は勝手に消えていつてくれるんだから。

※※※※※

あのリア充四人組と離れた私はその後もう一度書店に戻り、今まであんまり手を出さなかつたジャンルのラノベを購入した。

女の子に惚れられまくつた主人公が修羅場りまくつて地獄を見るハーレム物。

ふふふつ……これを読んでさつきの総武生達で脳内変換してやるつ。

さて、満足な買い物も終えたしそろそろ帰りますかね、と書店から

足を踏み出したらもう寒い寒い。

「寒つむつ！」

ラノベを吟味してたらいつの間にか結構な時間が経つてたみたいだ。すっかり陽も落ち、あたりは夜の気配に支配されていた。

やべっ！家に連絡も入れずに千葉に長居しそぎちやつたよ。お母さん怒つてるかなあ……タゴ飯抜きとか言われたらキツいなつ！

それでもさすがに二月の夜は寒過ぎる。

私はマフラーをしっかりと巻き直しつつ駅へと向かうのだった。

※※※※※

普段なら乗ることのない時間帯で乗り込んだ満員電車で待つていたのは…………チカンだつた…………

うつわ、最悪。だから満員電車とか嫌なのよ。とつとと声出して擊退してやりましょうかね。

「やめてください。この人チカンです」

そう声を発したつもりだつたのに、意外なことになんにも声が出なかつた。

嘘マジで!? 私つて自分で言うのもなんだけど結構強気だし、良く聞くこういう場面だつて全然余裕で撃退出来る自信を持つてた。

なんなら「いざチカンにあつたら怖くて声が出せませんでした」とか言つてる女性達をあらあら可愛いわね〜とかつて馬鹿にしてたまである。

まさか、ホントに声が出せなくなつちゃうなんて……

やばいどうしよう……なんだこれ怖いつ……次の駅に到着しても開くドアは反対側だし……やばいやばいやばいやばいつ……

そうこうしてるうちにチカンの手はお尻からスカートの裾の方へと移動していく。

ウソつ…………どうしようつ…………これ、スカートたくしあげられちゃつたらつ……

そんな大ピンチなまさにその時、涙目の私は電車のシートの端っこに座る腐つた目の男子学生と目が合つたのだつた。

※※※※※

まさに少女マンガなんかで良くある古典的なシチュエーションだつた。まさか私がこんなファイクションのような場面の登場人物になれるなんて。

あんな腐った目をしてるけどどうやらリア王（仮）らしいし、ここでのリア王（仮）に助けられて私も恋しちやつたりするのかな……？

なんて思つてた時期が私にもありました。次の瞬間リア王（仮）がスッと目を逸らすまでは。その間ほんのコンマ数秒の夢の如し。

「……」

え？ なに？ 気付かなかつたの？ 気付いたけど怖いから逃げたの？
…………ふつ、他人に期待した私が馬鹿だつたね。普段は他人なんか一切興味も無いし信用なんかしないのに、こういう時だけ期待しちやつた自分が情けない。

だつたら自分でなんとかしてやろうじゃないのよ！

とにかくスカート捲られて直接触られる前までにはなんとかしてやるわよつ！

しかし無情にもやつぱり声を発する事が出来ずにはいるとスカートが徐々に捲られていき、たぶんチカンの手がそろそろ下着に触れるんじゃないかと諦め掛けたその矢先、それは電車が次の駅に到着する為に停まりかけたその瞬間だつた。

「うつわ！あのドアンとこに居んのチカンじやね!?」

なんとリア王（仮）が突然叫んだ。それと同時に満員の乗客の目が一斉に各ドアへと向かう。

その瞬間弾かれたように、チカンは今まさに開いたドアへと駆け出し逃げて行き、人ごみの中へと消えていった。
た、助かつた……の？

しかも乗客達の目がダツシユで逃げ出したチカンに向いているから、私はチカン被害者だと好奇の目に晒されずに済んだ。

これでのチカンが現行犯で捕まつてたら、私にもすごい視線が集中したり取り調べとかにも同行させられていたんだろう。

なんか色んな意味で助かつた。そしてまだ乗客達の目が逃げたチカンに集中してる間に、私はコツソリ場所を移動する。この後視線を向けられたら恥ずかしいからね。

と思つていそいそと移動していると、私より先にリア王がとつと隣の車両に移動していた。

……ア、アイツまさか大声あげた自分に視線が集まらないように、チカンが逃げ出せる猶予を与える為に駅に到着するまで待つてたんじや…………さ、最悪だアイツ……パ、パンツの中とかにまで手を入れられて、手遅れになつてたらどうしてくれんのよっ。

……とはいえ、アイツが助けてくれなかつたら私はどこまでされたいたんだろうか。想像しただけで身震いしてしまつた。

※※※※※

チカン騒ぎがあつたものの、逃げちやつたからか何事も無かつたかのように電車は発車した。でも私は隣の車両に移動したアイツからは目を離さない。

いくら最悪な手段とは言え、助けられことには間違いない。ちゃんとお礼はしなくちゃね。でもチカン騒ぎで未だザワついている中でお礼とかちよつと無理。

だからアイツが電車を降りたら私もいつでも降りられる準備をしていた。

何駅か揺られながら、ようやくリア王が降りたその駅は、意外にも私と一緒に駅だつた。

私はリア王をこつそりと追い掛け、改札を出て人目に付かなくなつたあたりで声をかけた。

「あつ、あの……」

…………まさかの無視である。

あ、あれ？ おかしいな。ちゃんと視界に入つてたよね？
「ちよつ、ちよつと！」

仕方ないので私は彼の腕をむんずと掴む。

なにこれ？ なんかまるでこの人がチカンみたいじゃん。
「なんで無視するんですかっ！」

お礼を言う為に呼び止めたのに、なんで私が怒つてゐるの？

「……や、別の人かと思つたんで」

いやいやいや、私アナタの目を見て話し掛けましたよね！？

なんなのこの人……と視線を向けた時、彼は私を見て驚いた表情を浮かべた。

「！…………に、にのつ……」

「二ニノツ？」

私が怪訝な表情で首をコテンッと傾げると、彼は一瞬苦笑いを浮かべて一言。

「…………あ、や、なんでもないです。

で、なんの用ですか」

「なんの用つて…………さつきは…………その…………チカンから助けてくれてあります」とうございましたっ」

昔取つたきねづかつてヤツだ。

最近はめつきり出さなくなつた可愛いわたしを全開にしてペコリつと頭を下げる。

いくらあんな可愛い娘たちを侍らせてるつて言つたつて、私だつて結構可愛いのだつ。そんな可愛いわたしから恥じらつた様子で可愛くお礼を言われたら男の子なら嬉しいはずだ。

お礼なんだから喜ばせなくちゃね！連絡先とか聞かれたらどうしようかな……

「え？…………あ、ああさつきの被害者なのか。別にお礼とかいいんで。じや」

…………まさかのスルーである。

いや嘘でしょ…………？そりやあの娘達に比べればランク落ちは否めないけど、私つてそんなに魅力ないの？

なんか最近はぼつち道に邁進しすぎてて自分の女としての魅力とかに関心薄れてたけど、さすがにここまで総スルーだとちょっぴり傷つくわ。

だつてぼつちになつた今でさえ、たまに告られんのよ私！

「いやいやいや、助けて貰つたのになんのお礼もしないわけには

……

「や、別に礼をされたくてやつたわけじゃねえから。」

「で、でも」

「もし下手にチカン騒ぎで電車が遅れたら帰りが遅くなつちまうからな。

チカンもやめさせられるしチカン騒ぎで電車も遅れない。一番効率が良かつたつてだけだから、にし……アンタに礼をされるいわれは無いんで。じゃ

あんぐりと口を開けて呆然と立ちつくす私をよそに、彼はとつと�行つてしまつた。

マジか……なんのあの人……てか「チカンもやめさせられるとし」って、やつぱり普通に助けてくれたんじやん。

すると少しだけ先に行つた彼が振り返り、少しだけ赤らめた頬をポリポリ搔きながら最後に一言だけ加えて、そして去つていつた。

「ああ、そういうや前になんかで見たんだが、電車の隅とかドア付近はチカンに狙われやすいんだと。

今度からは中央寄りに乗つた方がいいぞ」

…………さんざん無視されてスルーされた挙げ句、まさかの今後の心配をされてしましました。

いやマジでなんなの？あの腐つた目のリア王。

普通こんな可愛い娘を助けてお礼したいつて言われたら、なにからのリターンを期待するもんなんじやないの？意味分かんないしワケ分かんないしムカつくし！

そして私は数年ぶりに自分の頬が熱くなつているのを感じるのだつた。

くつそ…………ちょっと格好良いじゃねえかつ……
つづく

遠い記憶を夢見るぼつち

寒過ぎる冬空の下を、なぜか熱で火照つている頬と心臓で温まりながら自転車を漕いでいく。

あーあ、名前くらい聞いとけば良かつたなあ……

家へと到着した頃はすでに9時過ぎ。もちろんしこたま怒られました。でもなんとか夕飯はゲットだぜ！

部屋へと戻り、ベッドに寝そべり買ってきましたラノベを読みながらも、どうしてもさつきの彼が頭から離れてくれない。まあそりやこのハーレム物ラノベを読みながらじや致し方ないけどさ。

人生初のチカンにあつてメチャクチャ怖い思いをしたはずなのに、もうそんな事は自動的に頭の片隅に追いやられてしまってる。

……なんなんだろ。不覚にも確かにちよつとだけ格好良いとか血迷つちやつたけど、どうしてあの美少女三人組が、取り合いでてあんな奴にご執心なのかをちょっとだけ理解しちゃつたけど、それでもここまで頭の中が一杯になる程なの……？

なにかが、なにかが引っ掛かるんだよなあ。

「そういうえば……」

あの人、私の顔を見た時かなり驚いた表情で「二二ノ」とか言つてたつけ。

あれつてもしかして、「に、二宮？」って言おうとしたのかな……じやあやつぱり知り合い？でもだつたらなんで知らないフリすんのよ……

あー、分からんつ！モヤモヤしまくり！こういう時は、一旦お風呂にでも入つてサッパリしましようかね。

※※※※※

『これから一年間よろしくね！えつと……一企一君つ』

『……あ、えつと、よろしく二宮さん』

／＼＼＼＼＼

『ねえ美耶ー！——谷なんかと良く一緒に委員やつてられるよねー』

『えー？——企一君て結構いい人だよお？』

『まったくホント美耶ちゃんてお人好しなんだから～』

~~~~~

『あ、あのさ二宮、それ俺が持つよつ』

『えつ？比——君ありがとお！比——君て優しいよねー』

『え、や、そ、そんなことねえけどつ』

~~~~~

『美耶美耶～！さつき比企一の奴、美耶の手伝いしてた時、超鼻の下伸ばしてなかつたあ？』

『ええ！そんなこと無いよお』

『美耶モテんだから氣いつけなよー。あんなんに告られたらマジキモ

いつてえ』

『えー？やだあつ！そんなこと無いってえ』

『あ、あのさ、好きな奴とか、いるの？』『えー、いないよー』

『え……それって……俺？』

『何、え、マジキモい。ちよつとやめてくんない』

~~~~~

『ねえねえしーちゃあん……今日の放課後さあ……企谷君にキモい事言われちゃつてさあ……』

『だからあんなキモい奴に優しくすんのなんかやめなつて言つたじやあん！で？で？なんて言われたのつ？』

『誰にも言わないでおお？あ、あのさあ……』

~~~~~

『おつはよー！……え？なになに……？』

『ねえねえ美耶ちゃん！昨日比企谷に告られたつて本当！マジキモくない？』

『え……う、うん……』

『うわ～！みんな～！やつぱマジらしいよ～！』

『うつわマジでえ』

『だから言わんこつちやないよー』

『てかその告り方はねえだろ(笑)もうアイツ今日からナルが谷でいいだろ』

『ナルが谷マジぱないわ〜』

『……』

「…………」

『今日から一年間よろしくね！えつと……比——君』

『今日から一年間よろしくね！えつと……比企——君』

『今日から一年間よろしくね！えつと……比企谷君』

『よろしくね！比企谷君』

「比企谷……君……?…………!?.ごぼあつ!」

と、そこで私は目を覚ました。あつぶね……危うく自宅のお風呂で溺死だつたよ……

「思い……出した……」

なんてネタを挟んでる場合じやなくてホントに思い出した……！

なんで今まで忘れてたんだろ？てかなんで思い出すのが今なの？

そう。私がこうなつたきつかけの男の子の名前は比企谷君。名前だけじゃない。今までずっと霞んでハッキリ思い出せなかつたあの辛そうな苦笑いをしてる時の顔も全部思い出した。

なんか根暗そうで、たまにラノベ読んで一人でニヤニヤしてたりして、キモがられてクラスで浮いてた男の子。

そして……

「まさかあのリア王が……」

でも本当に？本当にそうなの？だつて、私の思い出の中の比企谷君と今日のアイツとじや、決定的に違う所があるじゃん……

さつき見た夢の中の比企谷君は、あんな風に目が腐つて無かつた……そこばかりが余りにも印象的過ぎて、あんなに近くで喋つたのに気が付かなかつたまである。

「そうだつ！なんでこんなこと気付かなかつたよ私つ

私はとつととお風呂から上がり、パジャマに着替えると髪も乾かさずに部屋へと掛け戻る。

まるで強盗にでも入られたかのように部屋中に荷物を撒き散らせながら、押し入れの一番奥から一冊の本を取り出した。

これを目にしたのなんて中学卒業以来だ。本当は棄てるつもりだつたけど、余りにも目立つこんな物を棄てたのが親にバレたら余計な心配させちゃうから棄てるに棄てられなかつた一冊の卒業アルバム。

アイツが三年になつてから何組に入つたかなんて知らないから、一クラス一クラス丁寧に見ていく。

ページを捲れば捲るほど、勝手に消えてくれていたくだらない思い出や人間関係がよみがえつていくのを苦痛に感じながら……

「あつた……やつぱりさつきの、比企谷君だつたんだ……でも」

ようやく発見したそいつの目は、さつき見たアイツの目よりもさらにおかしくなっていた。

※※※※※

私はいつも教室に居る時は、授業中以外は大抵イヤホンを耳に差し込んで、音楽を聞きながら漫画やラノベを読んだりゲームをしたりと、外界からの音をシャットアウトしている。

まあぼつちの中にはイヤホン差し込んで音楽を聞いてるフリをしながらこつそりと人間觀察を楽しむ輩も居るらしいが、別にクラスの人間に一切興味の無い私は前者タイプのぼつちなのである。

単純に興味が無く、クラスメイトの騒音が煩わしいから……つてだけの理由でも無いんだけどね。

私は中学の時の人間関係を断ち切りたくて、お世辞にも勉強が得意そうじや無かつた元友人達が来られないような学校として高いレベルの進学校を選んだ。

残念ながら総武高校には落ちちゃつたけど、滑り止めの進学校である海浜総合には合格したからまあ御の字だと思つていた。

……よりもよつて、同じ学校になんて進学したく無いベスト3の一角でもある彼女が海浜に通うのだという事を知るまでは。

そしてさらによりにもよつて、二年になつたその日から、その彼女とはクラスメイトになつてしまつたというオマケ付き。

まあ中学時代は同じクラスになつたことも無く、同じトップカースト繋がりでほんの少し交流があつた程度の仲ではあったのだが、私が嫌だつたのは彼女本人と言うよりは彼女が一緒に運んできてしまつトラウマが嫌だつた。

まあそんなワケで同じクラスになつちやつた以上、どうしたつて彼女の声は嫌でも耳に入つてくる。しかもその娘はこれまた声が無駄にデカイ。

我がクラスの中心人物たる彼女の、青春を謳歌してますつて明るく楽しげでデカイ声を聞きたくなくて、常にイヤホンで私と外界とを遮断してゐるフシさえあるね。

しかしなんてこつた……昨夜の出来事が衝撃的すぎて、充電忘れのスマホは電池切れ。携帯ゲーム機は主が外出中の我が城を警護中。（厨二的な表現を抜かすと、つまり部屋に忘れちやつた♪）

致し方なく、本日は誠に遺憾ながらクラスメイト達が騒がしく喚く声をBGMにラノベを読まざるをえなかつたのでした……

しかしいかんせんいくら読んでも全く頭に入つてこない。

頭にあるのは比企谷君の事ばかり……なにこれ恋でもしちやつてんの？

……昨夜見た卒業アルバム。クラスの全体写真に写る比企谷君は、昨日会つた腐り目のリア王どころじやないくらいに目が腐つてた。でも、ページを捲つていくと、偶然写りこんでいた一年生の頃の林間学校の彼はまだ目が澄んでいたのだ。

そして二年生の修学旅行。その写真には目が腐り始めた比企谷君が写りこんでいた。

三年生の時に写りこんでいた体育祭の写真では完全に目が腐つてた。昨日会つた彼の目が澄んで見えるくらいに。

だから私は昨日まったく気付けなかつたんだ。私が彼の顔をしつかり見た記憶があるのは、あの告白モドキ事件までなんだから。あの頃の彼は、まだギリギリ目が澄んでたんだね。

それから私が意識的に彼に目を向けなくなつていつた間に、徐々に腐つていつたんだろう。中学生活に悲観して。そしてその一因の大

きな所を私も占めてるんだろう。

でも、だとしたら昨日会った比企谷君は、中学卒業の際の腐り切つてしまつた心から少しづつ解放されてきてるんだろう。

それはあの三人の美少女に寄るものなのかなあ……だとしたら、良かったね！って思う気持ちと同時に、少しだけ胸がぎゅつとなる。

…………ハツ!?って私なに比企谷君の事ばつか考えてんの!?本に集中しようぜっ！

これはきっと普段なら聞こえないクラスの連中の喧騒のせいだ。だから嫌なのよつ……

「マジウケんだけどー」

ほらアイツだよアイツ！彼女の明るく楽しげでデカイ声のおかげで本に集中出来ないで、比企谷君の事ばつか考えちやうんだ。あの声聞いてたら、私のトラウマ抉りまくりだつつうの！

しかしそんな時だつた。

その私のトラウマを抉りまくる聞きたくない声から信じられない一言を聞いたのは。

「ホントにマジウケんだよねー比企谷つて！あいつマジで面白いんだつてつ」

「かおりー……もうその話何回すれば気が済むのー……？」

なんで？なんで折本さんが今さら比企谷君の話なんてしてんの……？

つづく

ぼつちインザストーキング

「ホントにマジウケんだよねー比企谷つて！あいつマジで面白いんだつてつ」

「かおりー……もうその話何回すれば気が済むのー……？」

私は思わず彼女らトップカーストの会話に耳を傾ける。それはもうすごい勢いですんごい集中力で。

「えー、んな事ないつて。まだバレンタインの時の話とか全然してない？」

「いや……バレンタインの話だけで三回目だから。クリスマスの話まで入れたら通算く……うん。分かんないくらい話してつから。アンタどんだけ比企谷君大好きなのよ」

「なにそれマジウケるつ！あたしが面白がつてんのは友達としてだからっ！いやまあまだ友達にはなってないかな？」

「友達ねー。どうだかく。なんにせよクリスマスもバレンタインも、もうその話飽きたから次に新しい話仕入れてくるまでは比企谷トーク禁止ね」

「えー、だつたら千佳も今度比企谷と一緒に遊ぼうよー。アイツ超ウケるからさー」

「私はアンタみたいに図太くないの！あんな事があつた後にアンタみたいにヘラヘラ会えるワケ無いつての。それよりも比企谷トーカ禁止ー」

「……千佳ぜんぜんウケない」

「はいはいウケなくて結構」

と、そこで比企谷トーカとやらは終了した。ちょっと仲町さん余計な事しないでよ……

それでも一体どうなつてんの？だつて折本さんがなんで今さら比企谷君とそんなに仲良くしてんの？

クリスマスとかバレンタインとか、青春さん達にとつての超二大イベントに、折本さんと比企谷君は会つてたつて事なんでしょ……？

だつて……あの折本かおりだよ？

もしかしたら比企谷違ひなのかな。その可能性が高いよね？だつて、折本さんと比企谷君つて組み合わせは一番有利得ないはずだもん。

でも……ぐつ……き、気になるつ……

これは明日からイヤホン付けて音楽聞いてるフリして人間観察を楽しむタイプのぼつちにジヨブチエンジ必至ですね。ついさつきまでそつちのタイプのぼつちを軽く舐めてたばっかりなのに意志弱えーな……私。

※※※※※

自分の意志を曲げてまでも人間観察（折本観察）に勤しんだここ数日の結果、収穫はゼロでしたつ！

マジ仲町ばかやろうこのやろう。

それにしても我がクラスのトップカーストの女子二人が男の話、それどころかその男とのクリスマスやらバレンタインやらの話で盛り上がつてたつてのに、他のクラスメイト達がさして気にした様子も無かつたんだよなあ。特に男子共。

……これつて、私が知らなかつたつてだけで、仲町さんと一緒にクラス中が聞き飽きてるくらいに折本さんが随分と比企谷トークを今まで散々してきたつて事だよね……？

マジで私はかやろうこのやろう。

なに「え？ああ私人間関係とか別に興味ないですから」みたいな顔して孤高のぼつちとか気取つちやつてるかなあ。

くつそお！超聞きたかったあつ！

……こうなつたら直接折本さんに聞きに行つて…………みられるワケがないつ！

いやいやクラスのトップカーストに底辺ぼつちが男の話聞きにくとかどんな拷問なのよ！罰ゲームなの？

あ、罰ゲームをし合える友達居ませんでしたつ☆

でも……そんな拷問を受けてでも、私は折本さんに聞いてみたいと

思っていた。なんであなたが比企谷君と仲良くなんてしていられるのかを。

折本かおり。

ある意味私のトラウマにトドメを差してくれたと言つても過言ではない女。

もちろん比企谷君が所構わぬ色んなトコで悪い噂を立てた事が原因ではあるけれど、三年になつてからこの折本かおりに告白して振られ、それを言い触られた事による比企谷君への嘲笑、それによる私へのとばつちりは最高潮になつた。

『ねえねえ美耶～！聞いたあ？ナルが谷？オタ谷？……まあなんでもいいや。アソシ今度は折本かおりに告白したらしいよー！』

『……え？そ、そなんだ……』

『えー！マジで～？さすがに身の程を知れつて感じだよねーつ』

『だよねーつ！ホント可愛いきや誰でもいいのかよつ！つて感じだよねえ』

『ねつー！だから美耶も去年被害に合つたんだもんねー。美耶も可愛いからさー』

『……そ、そんな事ないよお』

『ぶつちやけ可愛いとか超得だよねーとか思つてたけど、こういう被害者になんなら得とは言えないかもー。良かつたあ、私美耶達ほど顔面良くなくてー』

『ギャハハハつ！マジ言えてるー！』

『まあ美耶も折本かおりもたまには痛い目みなよー！』

『それあるー』

それあるー、じゃねえよ……

思い出しただけでも吐き気がする。なんだよ痛い目つて。なんで比企谷君に告白されるのが痛い目だつたり被害者だつたりすんのよ。单なるあんたらの嫉妬の捌け口じやない。

しかもしつかりと『美耶達ほど』とか言つて、自分たちの可愛さもアピールしようと必死だしさ……

はあ……思い出さなきや良かつた。

おつと、今はそんなどす黒い感情に支配されてる場合では無かつたね。

とにかく折本かおりはアイツら嫉妬組とは違えど、比企谷君からの告白を言い触らして笑い者にした張本人であるはずなのに、なんで今さら仲良くなつてんの？なんで仲良くなれてんの？

トラウマとしてずっと避けてきたけど、かかわり合いなんか持ちたくないけど、でもこの聞きたい気持ちはもう押さえられそうもない。そして私は立ち上がり、折本かおりの席へと向かうように見せ掛けでトイレに直行したのだった。

……だつて無理いい——！

※※※※※

それからさらに一週間ほど過ぎ、私はずつと話掛けられる隙を窺つていた。もうストーカー一步手前だよつ！

それでもなかなか話し掛ける隙がない。さすがトップカースト、全然単独行動しやしない！

でも数日間窺つて気付いた事がある。彼女もチャリ通なのだとう事に。

まあそりや中学一緒つて事は学区が同じワケであつて、私がなんの苦もなくチャリ通してる以上は折本さんだつてチャリ通の可能性が高いつて事くらいすぐ分かるはずなんだけどね。

でも比企谷君の事で頭が一杯で…………つて違う違う！べ、別にそういうワケじやなくつて、気になる事があるからつてだけの話なんだからねつ！

と、とにかくそういつた理由でそんな簡単な事にも頭が回らずに、数日間付け回す結果となつたワケで……

つまり！放課後に駐輪場で待ち伏せしてれば、話し掛けやすい一人つきりの時を狙つて強襲出来るつて寸法なのですよ！

そして意氣揚々と駐輪場で彼女を張ること今日で二日目。（完全に犯罪者の目）

ついに！ようやく折本さんが一人で帰る所に立ち合えた。

なんなの？リア充ってのはそんなに一人でおうちに帰んの嫌なんの
ん？いやまあ私もリア充時代はそうでしたつけねつ！

とにかくこれでようやく話し掛けられる。私は自転車の鍵を用意
している折本かおりに向かつて力強く歩を進めた。

この学校に入学してから、まともに人と会話するのなんていつぶり
くらいなんだろう。てかまともに会話したことあつたつけ？

ドキがムネムネしてるけど、でも大丈夫！

私は元々はトップカーストでリア充だったのだ。折本さんとだつ
て、中学の時は何度か話した事だつてあるし、ぜ、全然緊張らんてし
てらいよ～……？

だつてこないだ久しぶりの家族以外との会話だつてのに、昔の可愛
いわたしを比企谷君に発揮できたもんつ。

まあ比企谷君て知らなかつたし全然効果も無かつたですけどもつ
！

そして全然一切何一つ緊張なんてしてない私は、折本かおりに対し
て冷静かつ慎重に声を掛けるのであつた。

「あああのお～！……お、折本しゃんつ……！」

壮絶に噛みました。もう死にたい。

つづく

ぼつちもリア充も県民御用達オアシスがお好き

我が家クラスのトップカーストである彼女に声を掛けける際、全く緊張などせずに普通に声を掛けようとして嘘ですごめんなさい。

極度に緊張したぼつちな私が壮絶に噛んだことにより、恥ずかしさのあまりに『よし！どうやつて死のうか？』と思考を巡らせていたのだが、そんな私に滅茶苦茶ビックリした顔で彼女が答えてくれた。

「お、おおつ、二宮ちゃんじやんつ……ど、どしたの？超珍しくない

……!?」

そりや驚くに決まつてますよねー。だつて、私は海浜に入つてこのかた、折本さんと会話らしい会話をした事がないんだもん。

おな中のトップカースト同士だつたということで、入学当初は折本さんの方からちよこちよこ話し掛けてきた事もあるんだけど、全くな無表情で「ああ」とか「うん」しか返して無かつたら流石に離れていつた。

他者との壁をとっぱらう事に定評のある彼女からしたらあんまり無い経験だろうし、敢えて避けられてるつて事をすぐに理解したんだろう。

だから二年で同じクラスになつちやつてからも、彼女の方から近付いてくるつて事はなかつた。

そんな私が急に話し掛けたつてのに、こうしてちゃんと応対してくれようとしてること自体がむしろ不思議まである。

「あ、や、そのつ……お、折本さんに、ちょっとお聞きしたい事などありますて……」

安定の敬語でしたお疲れ様でした。

すると当初は驚いていた折本さんが、なぜか敬語の私にドハマリしたらしい。

「……ぶつ……あはははははつ！なつ、なんで敬語なの!?マジウケる

！

くくくつ……いひひひひつ……ひー、ひー……ふーつ」

どうやらラマーズ法で落ち着いてくれたみたいだね。ラマーズさんってやつぱりスゴい！マジパないっす！

「はあ～…………つて、ご、ゴメン！笑いすぎだよねっ！？」

あたしホントこういうとこダメなんだよねー……去年怒られて反省したはずだつたんだけどなあ……」

「あ、いや……きゅ、急に話し掛けた私が悪いんだし」

「いやいや、ホント自分でもこういうとこ治さなきやつて分かってるんだつ……」

だから「ゴメンね」

「うん。だ、大丈夫……です」

本当に大丈夫。ずっと悪意の中に居て人間関係疲れちゃつた私からしたら、なんだか全然悪意を感じなかつた折本さんの笑いは、ホントなんでも無かつた。

「ありがとつ！」

で、聞きたいことつてなに？どうしたの？二宮ちゃん

くつそ……やつぱスゲーな、トップカースト折本……

私がら避けてるつて知つてるくせに、そんな私がら話し掛けられてもこんなに笑顔で対応出来るつて。嫌われてて当然なんだけどなあ。「あ、つと……その……」

それに対してこのぼつちの切なさよ……

話し掛けといて、なんで未だにどもつてんでしょうね？私。

「……二宮ちゃんこのあと暇？ここじゃなんだつたら、どつか移動しよつか？」

「あ、う、うん」

「おつし！んじやどこ行こつか？どつかいいとこある？」

どつかいいとこつて、ぼつちな私にはハードル高すぎますよアナタ。

「……サ、サイゼとか？」

「……サイゼとか？つて……ふ、ふくふくふつ……サ、サイゼとかつて……」

「ぶつ！あはははははつ！ウケる！」

いやいやサイゼ馬鹿にしてんの!?ていうか全然反省とやらをしてないじやん。この女……

結局またしこたま笑われて謝られてから、私達は千葉県民のオアシスへと移動する事となつた。べ、別にサイゼが嫌ならサイゼじやなくたつていいんですけど?

※※※※※

「あたしプチフオツカとティラミスアイスでー。あ、あとドリンクバーも」

な、なん……だと?

入店早々、メニューも見ずに玄人のような注文をする折本さんに、私は驚愕の色を隠せない。

さつきあんだけサイゼ馬鹿にしてた癖に、メニューも見ずに私が頬もうとしてた品を注文するなんてつ……

「わ、私もそれで……」

注文しながらも訝しげな表情で見つめる私を疑問に思つたのか、折本さんが「ん?」と首をかしげた。

「いや……さつきサイゼって言つた時に爆笑してたから、てつきりサイゼが笑える存在なのかと……」

「笑える存在つ!なにそれウケるー!」

んーん?あたしサイゼ結構好きだよ?たださ、どこがいい?つて聞いて『サイゼとか?』つて返つてきたから、あるヤツのこと思い出しちゃつただけつ

なんだ、そういう事かい。てつきり千葉県民の敵なのかと思つちやつたよ。

いやー安心安心。そうですよねー。千葉県民がサイゼを嫌いな訳ないですよねー。

そして二人でドリンクを取つてくると(もちろん無言だよ☆)、ついに折本さんが本題に入った。いや、本来本題に入るのは私の役目なんですけどね?

「で?どしたの二宮ちゃん。あたしがこう言うのもアレだけど、二宮ちゃんがあたしに話しかけてくるなんて超レアだよね」

「……うん。急にゴメン…………えっと、どうしても折本さんに聞きたい事あつて……」

「うん」

しばらくの沈黙。どうやら折本さんは私を急かす事なく、私が話し始めるのを待つてくれるみたいだ。

有難い……折本さんて意外といい人なのかな。

そして私はゴクリとノドを鳴らし、ついに話し始めるのだつた。

※※※※※

「……あの、ひ、比企谷君の事……なんだけど……」

「…………へ？」

「な、なにかと思つたら比企谷のことなのっ？」

比企谷君の名前を出した途端に、私は真っ赤になつて鼓動が激しく鳴り始めたつてのに、折本さんは対称的に一気に緊張を緩めたみたい。

「なーんだ！」一宮ちゃんが急に話し掛けてくるから何事つ!? つて緊張してたのに、比企谷の話かー！」

「う……ん」

「なになに!? どうして比企谷の話聞きたいの!? あたしが知つてる事ならなんだつて話すよー?」

「…………えっと、実は……」

そして私はあの日比企谷君に偶然会つてチカソから助けられたこと。でも比企谷君とは気付かずに、お礼をしようとしたけど断られたこと。家に帰つてからあれが比企谷君だつたと気付いたこと。それから比企谷君のことで悶々としてる時に、教室で比企谷君の名前を聞いたこと。それらを全て折本さんに話した。

「へえー！そつかそつか！比企谷がチカソから助けてくれたとかウケる！しかも助け方が超比企谷！」

超比企谷。なにそれ超凄そう。

「で、それ以来一宮ちゃんは比企谷の事が気になつちやつてる訳だ」

「あ、や、べつ、別に気になるとかじやつ……」

ただ、やっぱりちゃんとお礼くらいはしたかつたなあ……と……」

「したかつた？だつたら今からだつて遅くなくない？」

総武だつて知つてるんだから、校門前とかで待ち伏せしてれば良くない？」

「や、やー……さすがにそれはちよつと難易度が……」

その難易度を攻略するには、もうハードモードくらいならノーダメで突破できるレベル。

「あははっ！そりやそうだよねー！」

実はあたしも比企谷と遊ぼうと思つて何回かそれやりかけたんだけど、ちよつと恥ずかしくてやめちやつたんだ。

だつて逆の立場で考えたらうちの学校の校門で総武生が待つてたとしたら超目立つちやうじやん？まあウケるけど

ちよつとお……折本さんが無理なもんを、私が出来る訳ないじやんよお……

「で比企谷と仲良くしてゐつぽいあたしに連絡先とかでも聞こうと思つたつてワケ？」

でもそれならゴメン。あたし比企谷の連絡先知らなによ？」

「あ、別に連絡先を聞こうとしたワケでは……で、でも」

凄く意外なんですけど。だつて……

「お、折本さんて、比企谷君と仲が良いんじやないの……？
だつて……クリスマスとかバレンタインとか一緒に過ごしたんじゃないの……？」

それでも連絡先も知らない、の？」

「クリスマスとかバレンタイン？」

「ああ、違う違う。それは生徒会の手伝いで行つたイベント先で偶然会つたつてだけつ」

「せ、生徒会のイベント？ひ、比企谷君て生徒会なのつ！」

うつそ！あの比企谷君が生徒会なんかやつてんの!?罰ゲーム!?
あ、でもすつかり忘れてた……そういうえば最近の比企谷君てリア王なんだつけ。

「んー、正しくは生徒会じゃなくて部活の一環で生徒会の助つ人して
るみたいなんだよねー。」

でっさー！確かに助つ人ではあんだけどー、比企谷超ウケんだよねーつー！だつてさあ……」

そしてそれからは永遠とも思える折本さんの比企谷トーグが始まつた……

ドーナツ屋での偶然の出会いから葉山君？とやらとのダブルデート——どうやらその葉山君とやらはここらの女子高生の間ではイケメンとしてかなりの有名人らしい（いや私はここらの女子高生じゃないのかよつ）——から、そのデートでやらかしちやつてその葉山君に怒られて反省したこと。

あ、ちなみにそのデートの時に比企谷君が「サイゼとか？」って発言した事により、さつきの私のサイゼ発言を思い出しちやつてウケちゃつたらしいです。

「一宮ちゃん比企谷かよつーって思っちゃつてさあ」との折本発言で、私がちよつとだけ嬉しくなつてニヤつとしちやつたのは内緒。

それから総武高校との合同で行われたクリスマスイベントでの再会を経て、比企谷君が女の子連れで（しかも二人！くそがつ！リア王爆ぜろつ！）偶然バイト先のカフェに訪れて、そのあと二人で一緒に比企谷君ちの前まで帰つて妹さんとも会つた事、そしてまた生徒会の手伝いで行つたバレンタインイベントまでの事を、それはもう笑いすぎて涙を滲ませながら楽しそうに楽しそうに。

い、いやー……アンタどんだけ比企谷君大好きなのよ……長げーよ。

しかも話の途中で料理運んできてくれたウェイトレスさんとかドン引きですからつ……

こんな話を何回もしてれば、そりや仲町さんから禁止令出されるわ

……

ふむふむ。長すぎて意識失い掛けたけど、どういった事情で比企谷君と折本さんが再会を果たして、どうしてこういう関係性になつたのかは理解しました。

でも…………だからこそ、私はどうしても疑問に思うことがあるの

だ。

だつて……なんであなたは……比企谷君の話をそんなに楽しそうに話せるの？なんで比企谷君の事、そんなに大好きみたいな顔してられるの？なんで……比企谷君と仲良くなんて出来るの……？

だつて……

「……なんで？折本さん……」

折本さんは、比企谷君のこと嫌いだつたんじゃないの？比企谷君の敵だつたんじゃないの……？」

そう。私とおんなじように……

つづく

ぼつちなのに友達（未満）が出来ました

千葉県民御用達オアシスには似付かわしくない空気を漂わせ、私は折本さんに質問を投げ掛けた。だって、私にはどうしても理解出来なかつたから。

面白がつて言い触らして馬鹿にしていた比企谷君となんでそんな風に仲良く出来るの……？

「…………て、敵？あたしが？比企谷の？」

折本さんは驚いた顔で私を見る。え……？自覚とか無いの？この女……

「…………だつて、三年の時……折本さんは……比企谷君に告られたのを言い触らして笑つてたんじゃないの？」

だつたら嫌いなはずじやん……だつたら敵じやん……
なのに、なんでそんな風に楽しそうに話せんの……？」

私も…………最悪だよね。自分のこと棚に上げちゃつてさ。

私だつて他人に話して比企谷君をクラス中の笑い者にさせときながら、今さら気になつちやつて情報集めようなんてしてるクセにつ
……

すると折本さんは、とても困ったような顔をした。困つたというか苦しそうな……？

「…………そつかあ、そうだよねー……やっぱそう思われてるよねえ……」「思われてる？……つて、なに？」

つい聞き返す言葉が低く刺々しくなつてしまつた。

なんで他人事みたいに言つてんの？

「実はさあ……あたし比企谷に告られたつて事、あのとき誰にも話してないんだよね」

…………はつ？

※※※※※

「え？ちよつと待つて？誰にも話していないの!?ど、どゆこと!?」

思いもしなかつた言葉に、リア充相手に緊張してた事なんてすっかり忘れて、身を乗り出してすつごい勢いでまくし立ててしまった。やだちよつと恥ずかしい。

「うわっ！び、ビックリしたあ」

いやホントすみません。わたしもビックリしましたよ。

「（ノ）（ノ）めんにやさいつ……です」

「やー、全然いいんだけどさー、二宮ちゃんがそんな風に詰め寄つてくるなんて意外すぎたからさつ！」

あたし超ビビっちゃつてんの！ウケるつ」

もうウケとか求めてないんで早急に説明を求めます。

そんな視線を向けていると折本さんが苦笑いしながらポリポリと頬を搔く。

「普段たいして物事深く考えないあたしだけどさ、さすがにあの比企谷から告られたなんて誰かに話したらマズいかも……って事くらいは考えたよ」

「だつたらなんで？」

「……実はあんときさ、何人かの男子に言い寄られてたんだよね。あ、比企谷以外のね。

いつも誰かしら一緒に帰ろうとしてあたしを下駄箱とかで待つてたからさ、たぶんそん中の誰かが中々来なかつたあたしを教室まで見に来て廊下で聞いちやつて、翌日に言い触らしたんだと思う。

学校来てビックリしたよ。誰にも話してないのに黒板に書いてあんだもん」

そう……なんだ……朝来て黒板に書かれててビックリしたなんて、私と一緒にやん……

いや、一緒では無いか。私は他人に話したんだから。

「ビックリはしたんだけど、誰が書いたの？とかは思つたんだけどさ、でも書いてあつた事に間違いは無かつたんだよね。

マズいなあ……とは思つたけど、でも、比企谷があたしに告つて、それをあたしが振つた。

どこにも間違いがない事だから、あたしには訂正のしようも無い

じゃん……？

「そう……だね」

確かにそりやそうだ。

間違つてない内容の噂を、当事者がどう訂正すればいいの？って話だもんね。

「たぶんさ、それでもあのとき比企谷が友達だつたとしたら、あたしもあんなつまんない空気をなんとかしようと頑張つたと思うんだよね。例え噂に間違いがなかつたとしたつてさ。

でもあのとき比企谷は別に友達じや無かつたから、正直つまんないヤツくらいにしか見てなかつたから、あたしはあの空気を放置しちやつた……

そういうつた意味では笑い者にしてた子たちと同罪なんだけどね、あたしも……」

でもさ、それは誰にも責められはしないよね。勝手に噂流されたんなら、折本さんだつて被害者な訳だもん。

そんな被害者の折本さんが比企谷君を必死で庇つたりしたら、余計に噂がおかしな方向に向かつちやうのは必然だもんね。

いくらトップカーストで人気がある折本さんでも、やつぱり妬みで嫌つてる娘たちだつて少なからず居た。そういう噂は必ずその娘たちがいいように利用して、あらぬ方向へと進ませるのだ。

友達でもなんでも無い比企谷の為に、そんな危険な橋を渡れる人なんてそうそう居ないだろう。そもそも告白されて振つたのは事実なんだから。

「と、まあそんな訳なんだー。正直偶然見掛けた時はちょっと負い目もあつたんだけどさ、なんかすつごい美人なお姉さんとデートしてたし、もうあの頃の比企谷とは違うのかもつて、思わず声掛けちやつたんだよね」

いやまた女かよ。比企谷君どんだけデートばっかしてんのよ……爆ぜろつ！

「そしたら昔と変わらず話してくれたしさー……：

いや、あたし鈍感だし深く考えないタイプだからホントに変わらず

かどうかは分かんないけど……でも普通に話してくれたから、なんか嬉しくてついあたしも調子に乗っちゃつたつてわけ！」

「私だったら無理ですけどねー。

でもこの女ならそうなつちやうんだろうな。

「で、その勢いのままダブルデートで比企谷をからかつてたら、まんまと怒られちゃいましたつ。

……あたしマジで悪気とか全然無かつたんだけど、でもあの葉山くんがあそこまでしたつて事はよっぽどだつたんだろうなつて反省したんだ。

やつぱ楽しいつてだけで、相手のこと考えないで行動しちやうのつてダメだよねー」

いえいえ、その割にはまだまだ考えなしの行動が絶賛続いてますけどもね？

でも……だから自分を見つめ直してあんなに謝つてくれたのか。

今は折本さんなりに変わろうと努力してる最中なんだろう。

「あ、飲み物無くなつちやつた。あたし取つてくるねー」

「あ、うん」

席を立つた折本さんの背中を見つめながら、氷の溶けて薄まつてしまつた不味いジンジャーエールを一気に飲み干した。

……折本さんは自分を見つめ直して反省して変わろうとしている。成果は一向に見られないですけども。

それに比べて、私は努力なんてなんもしてないな。

ただ、変わろうともせずに人を避けて見下して、逃げてるだけなんだろう。

私も……折本さんみたいに比企谷君とちゃんと話して自分を見つめてみたら、間違つちやつた青春を取り戻せるのだろうか…………？

※※※※※

ドリンクバーから帰ってきた折本さんは、熱湯にダージリンのティーパックを浮かべてゆらゆらせながら私に訊ねてくる。

「でさー、二宮ちゃん」

「……え、 なに？」

「二宮ちゃんは、どうしたいの？」

「……ど、どうしたいって？」

「比企谷の事に決まつてんじやん。

普段ぼつ……一人で居る二宮ちゃんが、わざわざあたしに聞いてきたつて事は、なんかしたいんでしょ？」

いや、言い直さなくともいいんで。

「あ、うん……別にどうしたいって訳では……

ただちよつと気になつたから……」

「……えーっと、二宮ちゃんてさ、いや、二宮ちゃんも中学んとき、比企谷となんかあつたの……？」

「……！」

そつか。折本さんは知らないのか。まああれはクラス内で騒がれたくらいの事だし、そもそも二年の時だから比企谷君の存在も知らないし、興味の無い事なんか知つたこつちやない自由人の折本さんが知るわけもないか。

「えつと……その、実は私も二年のころ……」

そして私は二年の時のトラウマ事件を、そしてそのトラウマを受けて私が一人で居るのを好むようになつた事を、たどたどしいながらもなんとか話しきつた。

自分でも正直驚いた。まさかこんな事まで話しちゃうことになるだなんて。

「……そなうなんだ……だから二宮ちゃん、中学のころ少しずつ変わつてつて、高校では完全にぼつ……一人で居るようになつたんだ……」
いやだから言い直さなくともいいですかあ！

「だからあたしが話し掛けても無視してたんだ。

そりや二宮ちゃんにとつたら、あたしなんて仇みたいなもんだもん

ね

「か、仇つて訳ではつ……」

「いいよいよ。おかげでようやくスッキリしたし！」

「……でも、さつきの折本さんの話聞いたら、私の単なる独り相撲に過ぎなかつたっていうか……その、無視とかしてごめんなさい……」

「だからもういいってばー！」

友達じゃないからって、笑い者になつてた比企谷を見捨てたことに間違はないんだしさあ……」

一瞬だけ苦しげな表情を浮かべた折本さんだつたけど、次の瞬間にはニヤリとした。

「だからさー！あたし今、結構本気で比企谷と友達になりたいと思つてんだよねー」

「はい？」

「あのとき見捨てちゃつたこと、今は謝りたいって思つてんの。

でも友達じゃないからつて見捨てたあたしが、どのツラ下げて謝んの？つて話じやない？

だから友達になんの！こんなあたしでも友達でいいって認めてくれて、初めてあたしに謝る権利が発生するんじやないかと思つてさ。なんか謝つてから友達になつて下さいだなんて卑怯な気がすんのよね。そんなのあつちだつて断り辛いじやん？」

なんだその理論？

あはは！でも、なんかこの人らしいかも！

「ま、最近は友達じゃなくて、ちょっと彼女もアリかも！とか思つてんだけどさー！やっぱいちよつと恥ずかしいんだけど！ウケるっ！」

おいっ！

「…………二宮ちゃんはその時のこと、比企谷に謝りたいとか思つてんの？」

？」

「……私は、よく分からない。ただ、なぜだか比企谷君が気になつちやつたつてだけで……」

「それはLOVE的な？」

「ちちち違うもんつ！断じて違うもんつ！」

「……ふつーくくくつ……あははははつ！」

「ちちち違うもん！だつてー！超どもつちやつてんの二宮ちゃん！

ふくくつ……まじウケるー！……もんつ！とか超可愛いんですけどー！ウケるー！」

ぐうつつ……だから反省したんじゃないのかよつ……！顔熱い

よう……

「ひーつ……ひー……ふくう……

……だつたらさ、やっぱ二宮ちゃん比企谷に会うべきだよ。どうしたいのか分かんないんだつたら、一度会つて話した方が絶対いいって！

モヤモヤしてなんならまず行動！」

「!! でもつ……会うつて言つたつて……」

「あたしが、さつき総武高校の前で待つてるのはさすがに恥ずかしいからやんないけどさつて言つたじやん？」

でも、どうしても必要性を感じたなら迷わざやるよ？あたしは比企谷の家も知つてゐし会おうと思えば家に押し掛けちやうけど、二宮ちゃんは知らないじやない？

さすがに住所教えるのはマズいし」

そもそも急に家になんか押し掛けられませんて……

「だからさ、一回だけ頑張つて校門前で話し掛けみてたら？

そしたらなんか見つかるかもよ？」

比企谷君に、自分から会いに行く……そんなこと、ぼつちな私に出来んのかよ……

軽くパニくつて目がぐるんぐるんしている私に、折本さんは「それあるー！」と親指を立ててウインクしていた。
リア充ウゼエ……

※※※※

ぼつちとリア充の邂逅がようやく終わりを告げようとしていた。
結局先程のそれある案は保留という事にしといたけど、実は結構心が揺れていたりする。

「んじゃねつ！二宮ちゃん！」

「…………うん。今日はありがと」

はあ……疲れた。なんかこの二年分の会話量より多かつた気がすんな。でも……

「あつ、二宮ちゃん！」

「…………え？」

「あたし達さあ、友達になんない!?」

「……えー……」「うつわ！超嫌そう！まじウケる」

「や、あ、その……きゅ、急に友達とか……教室で話し掛けられても困るし……」

「？ そつかー。良く分かんないけど、ま、いつか！」

んじやさ、教室で話し掛けないように気を付けるからさ。んー、と
りあえず友達未満ってどこでどう!?」

「……そ、それならまあ……」

「よつし！んじやあ決まりーつ！明日からよろしくね！にの……美

耶つ」

「よつ……よろしく、です……」

ホント疲れた……

マジでホントどれくらいぶりだよ、こんなに他人と話したの……で
もつ……

手をぶんぶんしながらフラフラと自転車で去っていく折本さんの
背中を見ながら、こういうのも意外と悪くないもんなのかも……なー
んて、らしくない事を考えちやつてるぼつちの風上にも置けないぼつ
ちなのでした。

つづく

ぼつち、決意を固める

ぼつちの朝は常人よりよっぽど遅い。

なぜなら部活動など当然やつてるワケがないし、教室に早く到着しても話し相手も居ないから、ただただ気まずいだけなのだ。

つまりぼつちに取つては朝のS H Rが始まるギリギリに教室に入る事こそが絶対的正義と言える。

ここ最近はある情報を聞き出す為に、私にしては珍しく早めの登校を心掛けていたのだが、昨日その情報を本人から放課後のファミレスにて直接聞き出すという、ぼつちにあるまじき暴挙にて情報入手という目的を達成してしまつたことにより、晴れて無駄に早い通学から解放されたのだ。

とまあそんなワケで、私二宮美耶は本日より無事に平和なぼつち道を邁進する事に相成つたのであーる！

なのにどうしてこうなつた……

「ねえねえ美耶ー。なに一人でブツブツ言つてんの？超ウケるんですけど！あ、それウマそー！いただきーつ！」

「ちょっとかおりー！それ私が目え付けてたのにー。んじゃあ二宮さん！私の玉子焼きとそのハンバーグ交換しようぜー」

……ねえ？なんでの……？

※※※※※

只今一限目の休み時間中。

昨日までは情報収集の為に音楽を聴いてるフリしてある人物をストーキン…………げふんげふん。

ある人物の会話に聞き耳を立ててたんだけど、今日からは今まで通りアニソンをガンガンに聴きながらラノベを読み耽つてている。

はあ、やっぱ教室ではこのスタイルこそ至高よね♪

外界から響いてくる、頭が痛くなるようなバカ騒ぎを完全に遮断して大好きなラノベの世界へと意識を旅立たせる。

この至高の時間はなんぴとたりとも邪魔させねーぜ！

あ、邪魔してくる知り合いなんて居ないんですけどもー！

「つうひいー！」

へ!? なに!? なんか思いつきりイヤホン引っ込抜かれて、この先生き

のこるのが恥ずかしいくらいの声を出しちゃつたんですけど!? —

(注) ちなみに『この先、生きのこる』であつて、決して『この先生、

きのこる』では無い——

「つうひいー！ だつて！ マジウケる！」

はつ!?

「ちよ? お、折本さん!? な、なに!?」

「え? なにって朝の挨拶に来ただけだけど?

だつて美耶つて朝来るの遅いからおはよーつて言えないんだもん

「ちよ、ちよつとアナタ、な、なに言つてるんですか……?」

「だからなんで敬語なの!? ウケるつ」

いやアンタ朝からウケ過ぎでしょ。なんかもう箸が転げるどころ
か微動だにしなくてもウケまくるレベル。

ちなみにここからの会話は、私二宮はヒソヒソで、折本さんは大音
量でお楽しみください。

「折本さん!? なんで普通に話し掛けくんのよ!?

「へ? だつて昨日友達になつたじやん」

「ど、友達未満でしょ!? 折本さんがそう言つたんじやない!」

「そだつけ？ でも似たようなもんだし気にしなくていいんじやん?」

「私が気にすんのよ!!

大体昨日教室で話し掛けないように注意するつて言つてたよね!?

「……あ、そーいえば言つたような。

でももう声掛けちゃつたし別にいいよねつ

「いいわけあるか！ てか声デカイからあ！」

「ヒソヒソ声で叫ぶとかウケるつ

「いやウケねーよ！」

……………つてヤベエエエー!! あまり

の突っ込みドコロ満載感に、思わず普通に大声で突っ込んでやつた

よつ!?

ひいやあああ……視線があ！クラス中の好奇の視線が私に降り注ぐよお……！

「ぶつーやつぱ美耶面白いわ！

んじやまた後でねー」

二限の予鈴と共にその女は去つていった……クラス中の突き刺さる視線を残して。

もうやだ。もう恥ずかしくて死んじやうかもしない。

※※※※※

三限の休み時間にはヤツは来なかつたのだが、あからさまに周りからヒソヒソされてる私が居る。

折本かおり……ヤツを甘く見すぎていたようだ。ヤツの他者との距離の縮めっぷりは並みじやなかつた。

あの良く言えば空気を読まない、悪く言えば考え無しのバカつっぷりで、トップカースト特有の交友関係を広げてきたのだ……あいつは……

あれ？ 良くも悪くも悪口しか言つてないや！

そして運命の昼休み。

私は普段、お昼は何食わぬ顔して教室で一人で食べている。

ぼっちの中には、一人で教室で食べている自分がいたたまれず、自分なりのベストプレイスを見つけたり、最悪『便所メシ』なるものを実行してまでも自らのアイデンティティを守るらしいが、私のような自ら望んでぼっち道を邁進する自立型ぼっちは、教室で一人で食事を摂る気まずさなど児戯に等しいのである。まさに笑止！

しかしこの日ほど自らのこの鋼メンタルを恨んだ事は無い……
「美耶ー。一緒に弁当食べようよー」

「え、えつと一宮さん急にゴメンね……？ かおりが強引でさあ……」
逃がさんとばかりに私をがっちりガードするトップカースト女子二人。

そしてそんな二人と私を含めた三人に、それはもうスンゴイ好奇の

視線を向けてくるクラスメイト達。

なんなの!? アンタたち私を殺す気なの!?

鋼メンタル? ゴメンナサイ嘘ですどうせ豆腐メンタルですしかも
絹豆腐なんです。

意識を失いかけている私に、仲町さんが声を掛けて来た。

「えつと……もう一年近くクラスメイトなのに、接触つてなにげに初めてだよね?」

「ごめんね急に。かおりが聞かなくつてさあ……」

「あ……いや……はい」

卑屈卑屈卑屈ウゥウ! 私カツコ悪いよう!

「ホントかおりつて考え無しだからさあ、言い出したら全然聞かないんだよねえ……」

二宮さんの事はあんまり詳しく述べは聞いてないんだけどさ、かおりが良い娘だからって

「良い娘とか……そんなんじや、無い……ですから」

「あ、あはははは……で、でも、もし良かつたらヨロシクねつ」

「あ、はい……」

仲町千佳、か。折本さんと双璧を成す我がクラスのトップカースト女子だけど、あのバ……お調子者と違つてちゃんとしてそうだし、もしかしたら意外と仲良くなれるのかも……?

なーんて、そんな風に考えてた時期が私にもありました。
そして冒頭へ……

ドراكエ3かよ。

※※※※※

「へえ! 二宮さんも比企谷君の知り合いなんだー」

「あ、うん……まあ知り合いと言つても、つい最近まで顔も名前も忘れてたんだけど……」

「ねー! 比企谷つて意識しないとマジで影薄いからねー」

「ちよつとかおり! もうそういうのはやめたんじゃ無いの!」

「あ……やばいやばい! ハア~……ホント悪気とか全然無いのに

なあ

「悪気無いのに影薄いつてケラケラ笑えるあんたが凄いよ……」

あんたのおかげで私だつてあの日やらかしちゃつたんだからねつ

「ホントごめんつて！」

「ま、まあ私が調子乗っちゃつたのが悪いんだけどね」

「だよねー！ホントそれあるつ！」

「……は？……」

「あ……すいません」

あの……もうわたくしめを解放しては頂けないでしようか……？

マジでトップカーストの距離の縮め方は、ぼつちには毒なんですよ

……

でももう、一度こんな目に合つたら、クラス中の視線が痛すぎて明日からは教室で食べられませんけどね。どうしてくれんのよ……

「あ、で美耶ー、今日の放課後辺り、総武高校行つてくんのー？」

「……ひやい？」

てか急に話振つてこないでよ！変な汗かいちゃうじやない！

「ひやいだつて！ウケるー」

「……かおり」

「うひやつ！ゴメンつ！」

あー、あたしもうダメだあ……

もういいから机に突つ伏して頭抱えてないで早く話進めてよ……

そんな目で見るとガバツと起き上がる折本さん。

「んで？比企谷に会いに行くんでしょ!?」

ねえねえ、なんでそんなに楽しそうなの？この人……

「いや……だから昨日も言つたように……その件は保留中だから

……

「もーーんなこと言つてたら永遠に行動に移せないよー？」

「……だから、私は……折本さんみたいに……積極的には行動出来ないから……」

「ねえねえ？一人してなんの話してんのー？」

「あ、えーっと……」

昨日の話つて、千佳に話しちゃって大丈夫?

千佳は信用出来る子だよ」

「別に……いいけど」

ま、まあ仮にそんな話が広められたとしても、誰も私の噂なんかしないだろうし、相手もうちの学校じやないしね。それになんとなく仲町さんは信用出来そうな気もするし。折本さんの親友やつてるくらいだしね。

そして私達は場所を移動した。

だつて……折本さん、声デカ過ぎて駄々洩れなんだもん。

「……へえ、そつかあ。そんな事があつたんだあ……」

「……うん」

「えつと……そんな話を聞かせてくれてありがとね、二宮さん」

「あ、うん……」

「だからさーー! そうやつて悩んでんなら、早め早めに行動した方がいいつて!」

「かおりはうつさい。誰もかれもがあんたみたいに考え無しの行動取れるほど、心臓に毛え生えてないから」

「心臓に毛つ! ヤバいウケ「うつさい!」る……」

「なんだよー……」の二人漫才でもしてんのかよー……

「んー……かおりの意見はどうでもいいとしても、確かに私も会つた方がいいと思うなー」

「……え?」

「私が偉うことえた立場じやないけどさ、私も出来ることなら比企谷君に謝りたいなあつて思つてるんだ」

「そう……なんだ」

「うん。」

……でもさ、私は比企谷君には全くの無関係の人間だから、今更私が謝つても「は? お前だれだつけ?」って感じになつちやうと思うんだ。すぐに謝つとけば良かつたのにさ。

こういうのつて、後から後悔してももう遅いんだよね」

「……そう、だね」

「でも二宮さんは、すつごい偶然の出会いとかおりの話で、今がようやく出来たチャンスなワケじゃない？」

だったらこのチャンスは生かしといた方が、後々モヤモヤしないで済むと思うんだ」

後から後悔してももう遅い、か……それは自分が痛いくらいに一番理解してる。

確かに……今ならチカンから助けて貰つたって大義名分もあるし、比企谷君に会いに行くつていう最大のチャンスなんだよね。

「まあ私の場合は、このずっとモヤモヤした気持ちも調子に乗つちゃつた罰なんだつて受け入れてるけどさ、二宮さんには話が出来るつてチャンスが与えられてるんだから、どうしたらいいか分からないんなら、やっぱ一度会つとくべきじゃないかな？」

「…………うん。だよね」

……仲町さんと話せて良かつた。ちょっと……覚悟が出来たかも……！

「私……会いに行つてみようかな」

「おー！二宮さん男前ー！」

私は全面的に応援するよ」

「…………ありがとう、仲町さん」

「あ、あのお……あたし蚊帳の外過ぎてウケるんですけどー……」

どうやら真剣な話は折本さんが居ないとスムーズに進行するようですね！

話も終わり、私達は教室へと帰つてきた。うぐつ……やはり視線がツライ！

トップと最底辺が交わるのはここまで注目を集めるというのか……つー！

で、でも……ようやくこの地獄のお昼休みも終わりを告げようとしている。もうこんな事は金輪際起きないので！明日からは平和な

ぼっち生活がつ！

「んじゃねー、美耶ー。

明日からも一緒に弁当食べるからヨロシクー」

「よろしくねー、二宮さんつ」

…………どうやら平和なぼっち昼休みはもう過ごせないらしいです……

※※※※※

寒風吹き荒ぶ三月の夕方。

私は今、総武高校の校門前に立っています。

いやいや私行動早すぎじやね？まさかの即日行動だよつ！

だつて……気持ちが固まつた今まさに行動に移らないと、もう無理
そなんですもの……

先ほどから帰宅中の総武生の目が痛いよママン……私、無駄にお顔
立ちがそこそこ整つてるから、こういう時つて無駄に目立つちゃうん
ですよ……後から後悔しても遅いですつて？すでに後悔しつぱなし
だよ！

たぶん私はかなりキヨドつていたのだろう。そんな私に、心配する
かのようについてお声が掛かかるのだった。

「やあ、うちの学校になにか用かい？」

なんか金髪のえらいイケメンさんに声を掛けられました。
つづく

リア充に囮まれるぼつち

前回までのあらすじっ！

私、二宮美耶が今とても気になつてゐる人、比企谷八幡君に会うために総武高校にやつてきたライケメンさんに声を掛けられちゃつたの☆

おつといけない。急にイケメンさんに声なんて掛けられたものだから、頭の中にはあらすじが広がっちゃつたじゃない。しかも雑すぎでしょこのあらすじ。

う、うーん……それにしてもホントどうしよう。いきなりこんな爽やかイケメンさんに話し掛けられちゃつたら、私に気があんのかと思つて告白して振られちゃうじゃない！

「あんれー？ 隼人君どしたん？

ん？ この子ウチの学校じゃないじやん。お！ もしかして別の学校から隼人君の出待ちに来たん？

やつぱ隼人君まじぱないわー」

「ははは、戸部。なにバカなこと言つてるんだよ。ただこの子が校門前でキヨロキヨロしてたから、声を掛けただけさ」

「いやだから隼人君出待ちしてたんじやね？」

かーー！ やつぱ隼人君だわー」

「で、どうしたんだい？ 何か用かな？ なにか困り事とかなら話聞くよ？」

やつぱい。なにこの爽やか王子。これこそまさにリア王じやない！ お付きの家来はホントうざいけど。

こんな超イケメンにこんなに爽やかに接しられたら、私みたいな恋に恋する乙女は一発でメロメロになつちやう！

そして私はこの王子様にこう答えた。

「あ、別にそういうのいいんで」

スママセン嘘ついてました。

こんなリア王な爽やかイケメンには、寧ろ警戒心しか働かなかつたです。

「うわー、なにこの爽やか全開の微笑み！恐つ！その薄そうなマスク取つてから喋つてよ。

「別にただ人を待つてるだけなんでお気になさらずに」

「いや、でも他校の女子が校門前に立つてると目立つちゃつて大変だろうから、よければ俺が呼んできてあげようか？」

「お構い無く」

なんなの？しつこいわね。

イケメン様の優しい行為に乗らなかつたから気に食わないのかしら。

正直初見からかなりの嫌悪感。なにが無理つて、あのお付きのウザイのが、私がイケメンの出待ちなんじゃ？つて発言した時に、はははつて笑つた後に特にその件について否定も何もしなかつた辺り。

ま、そういうのに慣れてるんでしようね。はいはい俺カツケー カツケー。

しかしこのやり取りで分かつた事がある。

昨日今日の折本さん達に対する態度を思い出してみると、このイケメンに対しても、まだ誰だか思い出して無かつたりア王に進化したとおぼしき比企谷君に対する態度を鑑みるに、どうやら私つて、自分に関わりの無い人間に対しては、どんなにイケメンだろうとどんなにリア充だらうと全然普通に素で接しられるみたい。

逆説的に言えば、あれだけクラスの人間になんて興味が無い・関係無いと思つてたのに、折本さん達クラスメイトの事はしつかりと意識しちやつてたらしいよ私つて！つて事になる。

なんだよちよつとカツコ悪いじやない、自称自立型ぼっちゃん。

ま、まあこの件についてはあんまり深く考えると、ぼつちとしてのアイデンティティークライシスを引き起こしちやうから、ウチに帰つてからベッドで悶えながらゆつくりと考へることにしよう。

そんな思考は一旦凍結し、ふとイケメンに視線をやると「はは……」と困ったように苦笑を浮かべてる。

たぶん女子からこんな風にぞんざいに扱われる事に慣れてないんだろうな。

ゴメンね？ イケメンさん。私、あなたに興味無いので。

でもまあ単純にこの人はいい人なのだろう。自分がモテる事を理解していて、それに見合うような行動を取るように心掛けている事とは別にして。

普通に他校の私が自分の学校の前でオドオドしてたから、心配して声を掛けてくれただけなんだろうね。

初めはぼっち特有のリア充に対しての嫌悪感からぞんざいに扱つちやつたけど、そう考えるとちよつと申し訳ない気持ちになつてしまい、昔とつたきねづかの猫被りをしてやんわりとお断わりする事にした。

「あ……あの、ごめんなさい。やつぱり他校の前で人を待つてるとかつて、思つてたよりも緊張しちやつて……！」

で、でも大丈夫なんで、お気になさらずにっ」

うひやつ！ 昔の私つて誰に対してもこんなんだつたのかと思うと寒気がしちやうわ！

すると苦笑していたイケメンは、ようやく爽やかな笑顔に戻つた。うん。さつきまでの苦笑のままの方が、あなたは魅力的よ？なんか本心が出てる感じで。

つまり今の私とイケメンさんは、さながら仮面舞踏会で舞い踊る主役とヒロインみたいなものよね。

ふう……やつぱ早く厨二は卒業しなきや……

「そつか。でも緊張してるんなら俺に気を遣わなくともいいよ。

知つてる人なら呼んでくるから遠慮しないで」

オウ……思つてたよりもお節介焼きなようで。

でもなあ……男に男を呼んできてもう為に名前を教えるとか、ちよつと恥ずかしいんだよなあ……、心の準備だつて出来てない

しつ……

でもこのイケメンは、もう意地にでもなつてゐるのか引き下がつてくれそもそも無いし、お言葉に甘えちゃおうかなあ。

「そうですか……？じや、じやあ、その……ひ、比企」

「あつ！葉山先輩お疲れさまでーす！アレ？どうかしたんですかー？」

？」

せつかく覚悟を決めたのに邪魔が入つてしましました。

突然の乱入者は、どこか聞き覚えのある甘つたるい声を出しつつ、私とイケメンの方へと駆け寄つてきた。

※※※※※

「やあいろは。今日はもう帰りかい？」

「あ、は、はい……その、今日は生徒会が早く終わりまして……」

「おんやー？やつべー！いろはすやつぱ生徒会理由にマネージャーさぼつてんじやね!?ばないわー」

「……戸部先輩うつさいです」

「い、いろはすマジ恐いわー……」

「はは、いいじやないか戸部。

こつちだつて今日はグラウンド調節で早く上がつたわけだし、いろはにだつて負けたくない事とか色々とあるんだよ。なつ、いろは

「あ、あはははー……」

私おいてけぼりで何やら盛り上がつてますが、えつと、この子つて
…………どつかで……

『ちよつとせんぱーい！早く行きますよー』

あつ!!こ、この子つて、あの日千葉パルコで比企谷君と一緒に居た、比企谷ハーレムの一人の女の子じやんつ！

これはマズい。女が会いに来ている事がハーレム要員にバレると面倒だぞ？

「んん！……で、どうしたんですか？葉山先輩、こんなところで……

つて、あ、お客さんですか？もしかして、葉山先輩のファンの人？」いや、この人アイドルかなんかなのん？それにしても葉山……？葉山葉山。

あつ！折本さんが話してた、こちらの女子高生のアイドル葉山君つてこの人の事なのか。

……え？てことはこの人も思いつきり比企谷君の知り合いつて事じやん……なにこのめんどくさい展開は……

するとこのハーレム要員美少女が、私を凝視したかと思うと途端に嫌つそうな顔をした。なんで!?

「あ、あれ……？海浜の生徒さんですよね……」

ま、まさか生徒会のお仕事関係で来たわけじゃ……
と、辺りをキヨロキヨロ見渡す。

「あ、別に私は生徒会とはなんの関係もないけど

「ほつ……そうですか、良かつたー。」

またろくろ回し会長の相手しなきやいけないのかとゲンナリしちゃいましたよー」

あ、ああ……うちの玉繩とかいう意識高い系のアイツか。アイツ……他校生徒にまでアレやつてんのかよ。

ホントご迷惑お掛け致します。それにしても、見かけに寄らず、このビツチそうな女の子が生徒会役員なのかあ。さつきから生徒会生徒会言つてるし。

「えつと……じゃあやつぱり葉山先輩のファン？」

「あー、違うんだいろは。どうやらウチの生徒に用があるらしくて校門で待つてただけらしいんだ」

「あつ、そなんですねー。んー、でも他校の生徒さんがここでつ立つてると目立つちやつてアレンで、その人呼んできますよ。戸部先輩が」

「いろはすまじ無いわー……」

「戸部先輩はうつさいです♪ではではあなたのお名前とお相手のお名前をどーぞ」

「ん……んー。まじばないわー。この人達に名前言わなきやダメ……？」

「あ、いや、別に私待つてるんで、気にしないでいいよ?」

「いえいえ、そういう訳にはいかないですよー。」

風紀的に、生徒会長がこのまま見過ごす訳には行かないじゃないですかー?

どうせ呼びに行くのは戸部先輩ですし」

……………はっ!?

せ、生徒会長!?)この子がつ!?)、こんな頭軽そうで明らかに一年生のビッチが!?

え? 大丈夫なの? 総武高校。

いやでも待てよ? そういえば折本さんが言つてた……確か総武の生徒会長は比企谷君にもんのすごく頼りまくつてるみたいだつたつて。

うつわー……こんなビッチ美少女生徒会長がハーレム要員とか、マジで比企谷君てどんだけリア王なのよ……

「ホラホラ、私早く帰りたいんで、早く名前教えて下さいよー。

戸部先輩が呼びに走つた所を確認したら帰りますんで」

ずっと間を詰めてくるビッチ会長。てか戸部つて人の扱い酷すぎませんかね会長。

「で?」

やはりリア充感丸出しのビッチ会長。ただの頭が軽そなだけのバカ女では有り得ないような圧を感じる。

なんでそんなに可愛らしい笑顔なのに、そんなに声が冷たいの?ダメだ。言いたくない。言いたくないけど、これ以上ゴネてると、この生徒会長は私を不審者扱いして教師とか呼んでくるかも知んないつ……いや、呼びに行くのは戸部だけど。

えーいつ! ままよつ!

「くつ……え、えつと……に、二年生の……ひ、比企谷八幡君をお願いします……」

「……………は?」

その時、この空間は私の想像を遥かに超えて凍り付きました。

う
る
べ

しつこい追及にうんざりぼつち

『は』

そのたつた一文字で凍り付くこの場。

えーっと……いくらなんでも比企谷君の名前を出しただけでそれって、さすがに過剰反応ではないでしょうかねいろはすさんとやら。

てか良く見たら葉山君とやらからも笑顔が消えて、一気に私を観察するような視線を向けてきた。

え？ なに？ まさかあなたも比企谷ハーレム要員なのん？

唯一、酷い扱いに定評のある戸部君とやらが「つべー！ まさかヒキタニ君の彼女なん？ 他校に彼女とかやつぱヒキタニ君ばないわー」とかなんとか騒いでるけど、まあウザイから割愛の方向で。

なんかヒキタニ君の彼女という単語が出てきた時に、いろはすがギンツ！ と睨んでおとなしくなつたしまあいつか。

そして尊敬すべき先輩を視線で瞬殺したいろはすが、ニコニコ笑顔で私に訊ねてきた。

嘘でしょ!? 私の知ってる笑顔と違うよソレっ!?

「えっとお、先輩にどのようなご用件でしょうかー（先輩になんの用だこの女）」

「え？ 要件まで教えるなきやダメなの……？」

「まあ一応生徒会長なんでー（あたりまえだろこの女。理由次第では会わせる訳ないつづーの）」

「あ、でもあなたには関係無いし……」

「いえいえだからわたし生徒会長なんで、ちゃんと理由を教えて頂かないとウチの大事な生徒を呼んでくるわけにはいかなくなりますしー（理由も言わないこんな怪しい女に先輩会わせるわけねーだろ）」「いやだからー、私はただここで待ってるだけでいいし、別に呼んでもらう必要性ないから……」

「えー？ いいじゃないですかー？ やましい理由があるんなら、お帰り

いたぐり事にもなりますしー（早く言えよ。強制撤去すんぞコラ）
あつれー？本音と建前つて、こんなに分かりやすいものだつたつけ
？

なんで終始可愛らしいニコニコ笑顔のままなのに、本音がこんなにはつきり聞こえるのぉ……？

あー、めんどくせー……だからハーレム要員にバレたく無かつたの
よ。

すると、横からそんないろはすちゃんを諫める声が割つて入つた。
「まあまあ いろは。ここは俺が事情を聞くから落ち着け」

「えー？わたし全然落ち着いてますけどー」

どこがつ！？

どうやら私と同じくいろはすの本音の方が聞こえていたらしき葉
山君が私に訊ねてきた。

「すまないね。実はいろはと比企谷は仲が良くてね。見ず知らずの他
校生が急に訪ねてきた事にちょっと驚いたみたいなんだ」

「はあ……」

「もし良かつたらなんだけど、いろはが安心出来るように事情を教え
てくれると助かるな」

はあ？ そここのいろはすちゃんが比企谷君と仲良しなのと、私の事
情つてなんの関係も無いじやん。なんで私に一切関係も無きやメ
リットもない、むしろデメリットしかないのに、プライベートな話を
他人の為に要求されんの？

つたく……これだからリア充は……常に自分たちが世界の中心だ
とか思つてやがる。

「それに」

そして葉山君の視線が若干鋭く光つた気がした。

「俺もちよつと興味あるんだよね。比企谷を訪ねてくる女性つて
あ、葉山君のその発言で折本さんとの会話を思い出した。そういえ
ば折本さんと仲町さんて、比企谷君に対して失礼な態度を取つた事に
よつて、他でもないこの葉山君によつて痛い目に合わされたんだつけ
な。

てことは、いろはすちゃんとは関係無く、この葉山君自身が比企谷ガードをしてるつて事なのか。

なにそれやっぱ比企谷ハーレム要員なの？LOVEなの？キキキマシタワアアアー！

これ腐女子が近くに居たらヤバいヤツや！

とまあ冗談はさておき（冗談だよね!?ホントに冗談だよね!?）、この人も普通に比企谷君のこと心配してんのかな？

……すつごい美少女に囮まれてたり、こんな超イケメンリア王に心配されたり、ウザリニア充にはないわーぱないわー言われたり、ホーント比企谷君の周りってあの頃とはえらい違いなのね。まあ最後の（戸部）は要らなかつたですけど。

もう、私なんかじや住む世界が違うのがもね……

面倒くさいし違う世界感じちゃつたし……もう帰ろつかなあ

……

と、言うわけにもイカンのですよ！

今日でさえ勢いに任せてなんとか無理やりここまで来たのに、たぶん今日を逃したら二度とここには来れない、比企谷君に会えない気がする。

『あとから後悔しても、もう遅いんだよね』

仲町さんの言う通りだもん。モヤモヤを払うチャンスは今しか無いんだもん。

ふう……仕方ないなあ。

仕方ないけど、この人たちに話すか。なんで比企谷君に会いに来たのかを。

※※※※※

「仕方ないなあ……じゃあ言うわよ。言えばいいんでしょ……」

もう完全に素になっちゃつてますね私。緊張でカミカミでもなければ昔取つた杵柄な猫つかぶりでもない、完全にやさぐれた私。

「えつとですね、私、比企谷君とは中学の同級生なんですよ」

中学の同級生と聞いた途端に葉山君の視線が突き刺さる。ふむふむ。やっぱ折本さん効果なのか警戒心剥き出しだなあ。

いろはすちゃんは……うん。ブーストとしてますね。

「で、そんな同級生の比企谷君ですね……？ その……先日……あの

……

ち、チカソから助けて貰つたんですよ……」

はあ……なにが悲しくて初対面のイケメンにチカソ被害報告しなきやなんないのよ……普通男の子に「私チカソされちゃいました」なんてカミングアウトすんのなんて嫌なものなのに、よりによつて初対面のイケメンに報告するとか……だから嫌だつたんだつつの。

「ち、チカソ……！……先輩に助けられた……？」

なにそのベタな展開……超マズいヤツじやん……」

すつごいボソボソ独り言言つてるけど、もう丸聞こえよ？ いろはすちゃん。そしてそのベタさとマズさは私も良く分かってるよ。

少女漫画とかなら完全に惚れちやつて告白しちゃうコースだもんね。

「でも……助けて貰つたのに、残念ながらその時は比企谷君だつて分からなくて……」

ていうか比企谷君のこと忘れてて、ろくなお礼も出来なかつたんですよ……」

いろはすちゃんの敵を見るかのような警戒心剥き出しの表情とは真逆に、葉山君の表情は段々と警戒心が取れて行くのを感じる。

「でも……帰つてから……アレは比企谷君だつたんだあ、つて思い出して、

そ、その……あの……会いたくなつちや……いやいやいや違くて違くて！

ちや、ちゃんとお礼したいなつ……て、思つちやつて、ですね……？」

あれ？ おつかしいな……緊張も猫つかぶりも無い、単なるやさぐれた私が説明してたハズなのに、な、なんかこれじやまるで……一目惚れしちやつた王子様を訪ねに来た乙女みたいじやん……！

くつそ……顔が熱いじゃないのよ……！

でも、そんな私の態度が功を奏したのか、完全に葉山君は私に対する警戒を解いてくれたみたいだ。

どうやら私の比企谷君に会いに来た事情は、葉山君のお眼鏡に適つたみたいだねつ。

てかお眼鏡に適うつてなんだよ。あんたどんだけ比企谷君大好きなんだよ。やはりこいつ、ハーレム要員か…………キキキキマシタワーアアアア！！

……いや私サブカル女子ですけどそっち方面には疎いんで。ホントだよ？

しかしそんなおホモ達な腐山君をよそに、いろはすちゃんは完全戦闘モード。

たぶんこの娘は、普段は昔の私に似たようなキャラ設定をしてるんだろうけど、今はもう猫の皮を剥いだ单なる一人の女と化していた。

頭の中では私をどう追い払つたもんか、そのキャラ設定を己に課している以上は絶対に必須な能力『T H E 計算高さ☆』を駆使して策を練つてていることだろう。

そしていろはすちゃんは私の前に仁王立ちすると、その計算高さを目一杯駆使した答えを投げ掛けた。

「せせせ先輩ならとっくの昔に帰宅しちゃいましたよ？そして、あ、明日から自分探しの旅に出るといきましてたので明日以降に会いに来たつて無駄なんでしゅからね……!?」

それだけ言い切ると、バツチリ目を逸らしてピーピーと口笛を吹いていた。

「…………」

け、計算高くねえええ…………この娘、どうやら全然計算高く無かつたみたいです。てか突然の新たな女の出現に頭の中の電卓が壊れちゃつた感じ？

「あんれー？ヒキタニ君ならさつき特別棟の便所で会つたばつか「だまれ戸部先輩……」だけどお……」

ヤバいよ戸部君泣いちゃいそうだよ。

「どーーとにかく他校の生徒にいつまでも校門前につつ立つてられると迷惑なので早く帰つ……つてちょっと葉山先輩!？」

「すまないね。ちょっと俺達は用事が出来たから比企谷を呼びに行けなくなつたよ。

「ここに居づらいところ申し訳ないんだけど、もう少し待つて貰えるかな?」

私を追い払おうとするいろはすちゃんを、葉山君がそう言いながら腕を引っ張つて無理やり連れて行つてくれた。

「ちよつと葉山先輩!わ、わたしまだこの女……この人に用事がつ」「まあまたまにはいいじゃないか。ああいう子が比企谷に会いに来る分にはいいことじやないか」

「で、でもおおお……っ」

……ありがとうイケメンさん!どうやら最後の最後で私の味方になつてくれたんだね。私のどいうよりは、やっぱり比企谷君の味方なんだろう。でも……

「ちよちよ隼人くーん!行つちやうん!?

「あのさ、やつぱ俺がヒキタニ君迎えに行つた方がいいん!?」

「…………あ、お、お構い無く」

お付きのウザイのも一緒に連れてつてくれた完璧だつただけどねつ。

※※※※※

そんなわけでようやくなんかよく分からん嵐が過ぎ去り、この場に残されたのはぼつちが一人と、そんな嵐を奇異の目で眺めていた総武生達の視線だけ。

いやいや見世物じやないですから。お前らも早くお家にお帰りよ。ホントあいつらのお陰様で、ここで一人待つ気まずさが八割増しなつちやつたんですけどどうしてくれるんですかね。

ヤバいよこの視線の中で、ぼつち女が緊張でリバースしちやつたら伝説作つちやうよ。

そして伝説へ…………ドラクエ3かよ。

などと軽く現実を逃避しつつ待ち人を待つこと数分？数十分？

現実を逃避しすぎて意識を保つことさえも逃避してた故に、もう時間の感覚がマヒしかけていたそんな時、ついに！ついに待ち人来たる！

私の待ち焦がれた待ち人は、あの日と変わらず腐ったその目をさらにどんよりと曇らせ、全てが面倒くさそうな物腰はその背筋をだらしなく曲げ、しかしその足腰だけは待ちわびた帰宅に希望を乗せて軽やかに、チャリで颯爽と私の前を通り過ぎて去つて行つたのでした。うつそーん……

つづく

そしてぼつちとぼつちの邂逅はここに果たされた

あまりの事態に頭が真っ白に。

私、あなたが学校から出てくるのを、珍獣を見るような視線とか、予定外の変テコな嵐に巻き込まれながらも、なんとか耐えぬいて待つてたんだよ!?

そんな哀れに頑張った私の前をスイーツと通りすぎちゃうの!?この人でなしつ!

私は……力なくその場に崩れ落ち……

てる場合ではなーいっ!

もうここまで恥を晒して来たんなら、今更あと一つ二つ恥が増えた所でどうということはないっ!

まだ帰宅中の総武生が周りにたくさん居る事など一切構わずに、私はヤツの背中に大声を投げつけるツ。

「ちよつ！ちよつと待つてええ～？」

すると、私からは比企谷君の後ろ姿しか見えないけど、確かにピクリとその声に反応したのが伺えた。よーしつ！と思つた…………がつ!!

なんとヤツはそのまま振り向きもせずに行つてしまいやがつた。
いやいやいやっ……今あんた反応したよね!?一応振り向くだけ振り向けよ!?

やだなにこの公衆の面前での恥曝しつぶり。

急に大声で叫んだ上に、誰も止まつてくれずに一人ポツンと佇む女がそこに居た。もう死にたい。

しかし今日ばかりはこのまま死を覚悟している場合ではないのだ。
だつてこれだけ注目されてこれだけ恥かいて、もうここに来るなんて無理だもん、絶対。

ふふふ……逃がしはしないぜ比企谷君。なぜなら私もチャリなの

だからっ！

私は横に停めておいた愛機に通常の三倍早い速度で跨り、ヤツの背をロツクオンする。

三倍のスピード出すんじゃなくて、三倍のスピードで跨んのかよ。

「美耶、行つきまーす」

誰にも聞こえないくらいの小声でボソリと呟き、なんか一人ニヤニヤしてる私つてちょっとヤバい人ですよね！

そして……ここから私と比企谷君の長い長い追跡劇が始まるのだつた……

のかと思つたら、比企谷君は学校から一つ目の信号に捕まつて停車してました。

赤い彗星の情熱を返して！連邦の白いやツも混ざつてたけどねつ。

※※※※※

さてと、予想に反してあつさり捕まえられたけど、いざこうやつて話し掛けるとなると超緊張してきた。てか、私は大丈夫なんだろうか……？

先ほど判明したばつかの真実だけど、私は自分には関わりの無いリア充にはかなり強いらしい。例え相手が近所のアイドル（腐）であろうとビツチ生徒会長であろうと。

それはつい先日、リア王と思われた比企谷君相手でも普通に猫つかぶりが出来た事からも判明している。

でも…………今はどうなんだろう。私はあの時と違つてあのリア王を比企谷君と認識してしまつていて。

しかも……曲がりなりにも私はそんな比企谷君の事を……その……か、格好良いとか会つてみたいとかつて思つてしまつた事がほんの一瞬とはいえるのだ。そう、ほんの一瞬だけ。ええ、一瞬ですよ一瞬。

そんな私が、比企谷君に対して普通に話し掛けられるんでしようかね。

つい先日、折本さんに話し掛けた際の噛みつぶりと、折本＆仲町リア充ガールズへの卑屈な対応を思い出してみた。ゼロタイムで死に

たくなりました。

「どどどどうしましょ！私、すっかり油断してました。こないだ比企谷君と普通に話せたから。

よくよく考えたら全つ然状況がちつがうじやないのよおうつ！いやいやいや無理無理無理いっ！

あんな醜態、リア充時代を知ってる人に、しかも比企谷君になんか見せられるワケ無いじやないですか！

ここにきてのまさかの失速っぷりが酷い。でも、早くしないと信号変わっちゃう。

くつ……ここでこのチャンスを逃してしまえば一生モヤモヤしつぱなしなんだよ？美耶！

女は度胸だ女は愛嬌だ！えーい、ままで！

私はいつでも自害出来るように、清水の舞台上で喉元に懐刀を当てる程の覚悟で、ついについに比企谷君に声を掛けてみた。それにしてもちよつと覚悟が重すぎではないでしょうかね。

「あつーあのおくくく……！」

綺麗に裏返つた声は、冬の澄み渡つた空気に静かに溶け込んでいた。

なんなら私も空氣に溶け込んで無くなつてしまひたかつたです。

※※※※※

突然後ろからひつくり返つた声を掛けられた比企谷君は、あからさまにビクウツとしてキヨドリながら振り向くと、私の顔を確認してそれはもう嫌そうな顔をした。

えつと……さすがの私でも傷ついたらやう事もあるのよ？

「……なんか用？」

うおお……なんて拒絶的な返事だよ。いやまあ比企谷君からしたら私なんてこういう態度とられて当然つちや当然なんだけども、第一声がソレってあまりにも酷くないですかね。ちょっとカチンと来てしましたよ？

「てゆーか、さつき大声で引き止めた時、明らかに聞こえてましたよね

?

なんで振り向きもせずに無視して行っちゃうかな～……」

「あ、別の人かと思つたんで……」

なにこれデジヤヴ?

そういうやチカン騒ぎの時もこんなんだったわこの人。

初めっからチャリの進行方向を塞いで轢かれるくらいの覚悟で臨まなきやダメだつたな。いや轢かれちゃうのかよ。

「ま、まあそれは良しとしておきましよう……」

そんな事より、今日は用事があつて会いに来ました」

「……はあ」

「……や、やっぱり、あんな風に助けて貰つといて、なんのお礼もしないなんて私の沽券に関わるワケなんですよ、ええ」

不満げに目を瞑り、右手の人差し指をピンと張つて左手を腰に充て、恩着せがまし説明会を執り行う。恩があるのは私の方なんですけどね?

でも、なんだろう?思つてたのとちよつと違う気がするぞ?なんか、結構普通に話せてる気がするな。出だしでカチンと来たのが功を奏したのかな。

「は?あの時ちゃんとありがとうございましたつて言われたよね?」

「あ、あんのはお礼とは言えません!お礼とは、もつとこう誠心誠意を込めて贈るものです」

「……いや、だから前にも言つたよね。別にお前の為にしたワケでもなんでもないから。

單に早く帰りたかつたから、大事になる前にやつただけだつて。だからお前に誠心誠意お礼をされるいわれはねえんだよ。

まあそういうこつたから、俺はもう行くわ」

押し問答の末、比企谷君はそのまま自転車を漕ぎだそうとする。せつかく普通に話せたのに、これで終わりなんて嫌だ。

だから、そんな彼を止める手段はもうこの方法しかないだろう。

「待つてよ……話、聞いてよ……比企谷君……」

すると漕ぎだそうとする足を止めてもう一度私に振り返る。

「…………んだよ……俺のこと覚えてたのかよ、二宮」

振り返り私を見つめたその目は、卒業アルバムに載っていたソレと同じように……ゆっくりと深く仄暗く淀んでいった……

※※※※※

私達は、地元のカフェでお茶をしている。せめてお茶くらい奢らせてよと懇願したところ、黙つてついてくれたのだ。

ここまで辿り着く道すがら、どちらもお互に黙つて、自転車にも乗らずただ押しながらゆっくりとゆっくりと歩いてきた。

先ほどまでの変なテンションなどどこへやら、今は重く息苦しい空氣の中、緊張でまったく味の感じないコーヒーをただ啜つている。

そんな重苦しさに耐えかねた私は、とりあえずちゃんとお礼だけは言わなきやと、言葉が詰まらないようゆっくりと話始める。

「今日はいきなり押し掛けちやつてゴメン……やつぱり、どうしてもちゃんにお礼言いたかったからさ……

比企谷君はお礼を言われる筋合いなんか無いって言うけど、あの時助けて貰えなかつたら、私、あのままどうなつちやつてたか分からないうからさ、だから……本当にありがとう……」

「…………おう」

返事はたつたの二文字だつたけど、今度こそはチカンの件に対しだけはきちんとお礼を受け取つて貰えたみたいだ。

すると比企谷君は、遠慮がちに私に問い合わせてきた。

「…………なに？今日の用件はそれだけなのか？……つうか二宮は、あの時、俺だつて気付いてたのか？」

「…………ごめん。あの時は気付かなかつたんだ。てか比企谷君の事……忘れてた」

「だよな。まあ忘れられてる事なんて慣れてるから気にすんな。

むしろよく思い出したなど感心するくらいだ」

「…………まあ、うちらには忘れたくても忘れられない出来事もあつたワケじやん？」

「…………それ言つちやうの？……まあ、その、なんだ……」

キモくて記憶から消したいくらいの事だもんな」

「あ……そ、そういうんじゃないんだ。別に比企谷君だから忘れてたつて事じやないんだよ……」

実はつい最近まで……いや、ぶつちやけちゃうと、比企谷君のこと思い出すまで、中学の思い出出自体を忘れてたんだよね。いや、消してた……？っていうのかな」

「……は？なんか……あつたのか？」

「……実は私さ……今、ぼつちなんだよね」

私の突然のカミングアウトに、比企谷君は驚いた表情で見つめてきた。そりや驚くよね。私だって驚いてんだから。

私自身、なんのためにここまでして比企谷君に会いに来たのかイマイチ良く分かつてないけど、まさか自分でも急にこんな話をしちゃうとか思わなかつたから。

むしろこんな話はしたくないハズなんだけどなあ……リア充だった頃を知ってる人に、現在ぼつちだよつてカミングアウトをするのつて、普通よりもずっと惨めで恥ずかしいし、しかもそれがちよつといいな……とか思つてる人なら尚更に決まつてる。

でも、それでも敢えてこんなにも早くコレを口にしちやつたのは、やつぱり私は心の奥底で、比企谷君にちゃんとアレを打ち明けたからからここまで来ちやつたんだろうなつて思う。

「は？あの二宮が？なんで？……だつてお前つてリア充代表みたいなヤツだつたじやねえかよ」

「えつとね……それよりも、まずはどうしても言わなきやなんない事があるんだ……」

やつぱ、まずはコレ言わなきや何にも始まんないよね。だから私はおもむろに頭を下げた。

「比企谷君、今更だけど、中学の時は本当にごめんなさい」

「…………は？なんでいきなり謝られなきやなんねえの？」

「……比企谷君からの告白擬い事件の事、私、人に喋つちやつたから

……」

突然のぼつちカミングアウトからのさらに突然の謝罪に、比企谷君はワケ分からんとあたふたしてるけど、私は気にせずにある日あつた

事を、そして翌日から起こつた思いもしなかつた事態を説明した。

「謝つてんのに、こんな風に言い訳がましくてゴメンね……？」

確かにクラス中に言い触らしたのは私じゃないんだけど、でも、ま

ずは私がネタ的に人に話しかやつたのが全ての原因だから……

そしてクラス中から比企谷君が笑われてるのを見ても、それを止めなかつたのも、やっぱり私の責任だから……」

すると比企谷君は頭をがしがしと搔きながらも私に言葉を掛けてくれた。

「マジで今更だな。別にもうそんなこと気にしてねえから気にすんな。

それに、そんなん普通じやね？ああいう事あつたら、周りの人間に話しちまうのなんて当たり前だろ。

それで俺が笑い者になつたつて、それは俺があのクラスでそういうポジションだつたつてだけの話だ。だつたら笑い者になつた原因は俺にあるだろ？

てかあのリア充な二宮がそんな事を気に病んでたつて事の方がよっぽどビックリだわ」

うー…………なんだよー…………この大人な比企谷君はさー…………ずっと思ひ悩んでた事をようやく謝れたのに、こんなにもあつさり返されちやうなんてさあ……

なーんか謝るんじやなかつたなあ…………なんて、下げてた頭を上げてみると、そこにあつた比企谷君の目は随分と腐りが取れていた。

さつき私が声を掛けた時は卒業アルバムに写つていた時と同じ腐りきつた目を向けてきたけど、いま私に向けられている目は元の目に戻つていた。どつちにしてもまだまだ腐つてはいるんだけどね。でも、腐つた中にも、なんていうか暖かさが感じられるような、そんな目をしていた。

そんな目を私に向けてくれたから、私は心から思った。

「いやいや、その最後の一言は余計じゃない？」

私のこと、どんだけデリカシーの無い女だと思つてたのよつ

「へつ。リア充様つてのはそういう生き物だろ？」

なーにが！自分が一番リア充なくせしてさつ！

…………うん。ちゃんと謝る事が出来て、本当に良かつたなつ……
※※※※※

軽口を言い合えるようになつて、ようやくこの場に穏やかな空気が流れだした。

緊張で喉が渴いてたようで、もう冷めてしまったコーヒーに口を付けると、さつきまで味なんか全然感じなかつたこのコーヒーがこんなにも美味しかつたのかという事に驚いた。

チラリと視線を向けると、比企谷君も口を付けたコーヒーの味に驚いていたみたい。

ふふつ、私と一緒に比企谷君も緊張が取れたんだーって思うと、自然と笑みがこぼれてしまう。

んー。それにしても……今更ながらなーんでこんなにも普通に喋れるんだろ？

私にとつてみたら、折本さん達よりもさらに難易度が高いはずの相手なのに、なんだかとつても話しやすい。

どれくらいぶりだろ？家族以外か完全無関係な人間以外と、こんなに自然な自分で話せるなんて。

もちろん今だに緊張もしてるしドキドキもするんだけど、なんか嫌な緊張じゃないんだよね。どつちかというと心地いいまである。

しばらくそんな心地よさの中で二人して無言でコーヒーを啜つていると、「あつ……」つと不意に比企谷君が口を開いた。

「そういうや、いきなりの謝罪に驚いてすっかり忘れてたが、なんかお前、ぼつち発言してなかつたつけ」

「あ」

一大イベントを無事クリア出来て、私もそんな事すっかり忘れてたよ。

「なんつうか、やっぱあの二宮がぼつちとか全然想像できないんだが。 そういや昔と全然キャラも違つちまつてるし、それも関係あつたり

すんの？」

「え……？ キ、キャラ……？」

「昔はもつと、みんなに愛される私ー！ つてキャラ作つてたる？」

「まあもつともこないだ会つた時はそのキャラのままだつたが」

「…………え？ なに？ ……アレがキャラ設定だつて気付いてたの……？」

「気付いてたつづうか、アレのおかげで勉強になつたみたいな？」

おかげで毎日のあざとい攻撃に騙されずに済んでるな」

「あ、あはははは……お役に立てているようでなによりですー……」

心当たりがありすぎて思わず棒読みで返してしまつた。あざとい

攻撃……いろはすちゃんの事ね……

てか可愛い私キャラを言い当てられてデイスられるとか、それなんて拷問？

「それにそのぼつち発言と、さつきの突然の謝罪も全然繋がんねえしうん。まあここまで話したなんらもういつか。

そもそもいきなり謝罪したのは、この話に繋げるためのものだつたワケだしね。

「んー。それはね？ 私がぼつちになつたのは、さつき話したあの事件と関わりがあるからなんだよね」

「…………」

「私さ、あれ以来、ちょっと人間不信氣味になつちやつたんだよね」

「…………は？ いやいや、俺に告……その、なんだ、あんなこと言われたのが、人間不信になるほどキモかつたつて事なんですかね……？」

愕然となつた比企谷君の目がまたドヨつとし始めたから慌てて否定した。

「ち、違う違うっ！ そつちじやなくつてえ……

んー……勝手に言い触らされていつまでもネタにされたつてトコ

……私のことも……比企谷君のことも……

「…………」

「ああ……人つて一度面白いと思つたら、それによつて傷つく相手の

気持ちなんてどうでもいいんだなあ……つてさ」

「…………そうか」

まあこうやつて比企谷君と話してみたり折本さん達と話してみたり、比企谷ハーレムの娘やイケメン（腐）と話してみたら、みんながみんなそういうのばつかじや無いんだなあつて、最近になつてようやく分かつてきただけね。

だから、この気持ちも正直に言おうと思う。

「でもさ……」

「あれー！もしかして美耶ちゃん!? うわー！ウケる！やっぱ美耶ちゃんじやーん！」

「えー？ マジでー！？」

「うわヤバいホントだー！ 超懐かしくねー？」

突然飛び込んできたその不快な声に、私は全身が総毛立つた。

たぶんほんの数週間前だつたら、こんな声は記憶になかったんだろう。

でも今の私は、無理やり消していた古い記憶を引っ張りだしてしまっていたのだ。比企谷君の事を思い出す為に、封印していた卒業アルバムを引っ張りだしてしまつたのだ。

嫌なオーラをビシバシ感じるそちらに視線を向けると、そこには、もう本名なんかは覚えてないけど、間違いなく私が中学時代に仲良くしていたクラスメイトのしーちゃん達が、私と比企谷君を交互に見ながら下卑た笑いを浮かべていた。

つづく

震えるぼつち。いろんな意味で

油断してた……比企谷君との邂逅に集中するあまり、ココが私達の地元のカフェだつて事を忘れてた……

普段なら絶対に立ち寄る事なんかない地元の店に、比企谷君とだから、つて理由で深く考えずに入つてしまつていたのだ。

しーちゃん……

本名はなんてつたつけかな……？まあどうでもいいけど。
もちろん原因は私。悪いのは私だつて分かつてはいるけども、どうしたつてコイツに対してはもう好感なんか持てるわけ無い。

あの事件をクラス中に言い触らして、比企谷君を笑い者にする中心に居たのがコイツなんだから。たぶんそこには当時クラスでは一番人気だつた私へのやつかみも多分に含まれてたんだろう。

コイツの後ろにも当時上辺の私が仲良くしてた娘達がニヤニヤと下卑た顔を浮かべてるけど、私の意識はその中でも特に酷い笑顔を浮かべるしーちゃんに向いていた。

身体が震え始める。心も震え始める。なんかもう恐いよ……人の悪意つて……

堪らずに逸らした視線の先では、比企谷君も脂汗を浮かべて表情を歪ませていた。

※※※※※

「えー？ 美耶ちゃんさあ、うちらと連絡途絶えたと思つてたら、こういう事だつたのお？」

「いやー！ キンモー☆まさかまさかのカツプルはつけーんつ！」

「あははははー！ そりやあたしらからの連絡無視するはずだよねー！」

！」

うふつ……気持ち悪い……吐き気がする……今の私には、コイツ等のこの笑顔がグロいモンスターにしか見えない。

頭ん中はぐらんぐらん揺れてるし、涙が溢れそうになつてきた。
ち、ちがつ……わ、わたし……べ、別に比企谷君とカツプルなわけ

じゃつ……」

せめて、せめてこの醜いモンスター達から比企谷君だけでも守らなくちゃいけない。今のコイツ等の標的は昔と違つて明らかに私なんだから。

「はあ？ なに言つてつか全然聞こえないんだけどお？」

「ふつ、なんかコミュ障なキモいやつと話してみたーい」

「ウケる！ 美耶ちゃんてそんなんだつたつけー！」

「てかなんで涙ぐんじやつてんのお？ なーんかうちらが虐めちやつてるみたいなんですけどー！ つか美耶ちゃん震えてね？ ギヤハハハ」

「だつ……だから私と比企ー！」

「聞こえねえつづつてんだろお、みーやーちゃーん♪どーしちやつたんできゅかー？」

——なんで？ なんで私は人に興味なんかないはずなのに、人なんかどうでもいいはずなのに、こんなにもムカついてるのにこんなヤツ等相手に声が出ないの？

……本当は気付いてしまつている。それはただの方便なのだと。それに気付いてしまつたのはついさつき。葉山君達と話していた時。

私はあの時、なんで折本さん達と喋るのはあんなに緊張するのに、なんでさらにコースト上位な王子様率いるこの人達とは普通に喋られるんだろうつて疑問に思つていた。

私は……人に興味が無いだなんてただの嘘。人がどうでもいいだなんてただの嘘つぱち。

自立型ぼっちだなんだと自分を誤魔化してきたけれど、本当はこんな風になつてしまつた事を後悔してゐるんだ。本当は人と仲良くしたいのにとか思つちやつてるんだ。

だからこそ、自分と関わりのある人間と話すのは緊張しちやうけど、関わりのない人とは平氣で居られるんだ。

なんてことはない。こんなになつちやつた今でも……他人なんかどうでもいいとか言つて誤魔化して格好付けてても……

「私は周りからの目を人一倍氣にしている」

みつともないけど、これが答えなんだろう。

だから…………コイツ等が、こんなヤツ等が恐くて恐くて仕方ないんだ。昔の私を知ってるから。華やかだつた頃の私を見てたから。

だから今のが悔めな私を見られる事がたまらなく恥ずかしい。今のみつともない私を笑い者にされてると思うと震えが止まらない。

くそつ……せつかく、せつかくもう一度素直に人が好きだと認められそうだったのに、なんでだよつ！……なんでお前等なんかが出て来ちやうんだよつ……！

「マジでどしたのー？ 美耶ちゃん。なんかキモいんだけどー？」

「あ！ 私知つてんだけどお！ 海浜に行つてる友達から聞いたんだけどさー、なんか美耶ちゃんてえ、今さあ」

やだ！ やめてよつ……

私は拳を握り締めて俯く。

「ぼつちらしいよー？」

※※※※※

「うつそー！ マジでー？ 『あの』 美耶ちゃんがー？」

「マジマジー！ なんか一人も友達居ないんだつてよ！ 休み時間も昼休みも、一人ぼつちなんだつてえ」

「うつわ、悲惨！ 『あの』 美耶ちゃんがねー」

「しかも二年になつてから、なんとあの折本かおりと同じクラスになつちやつたらしくつてー、ホラ中学んトキは美耶ちゃんか折本かおりかつて空氣あつたじyan？」

そんな二人が同じ教室で月とスッポンになつちやつてるから、すつごい悲壮感漂つてんだつてさあ！」

「ウケる超ヒサーンつ！」

ああ……なんかもう嫌だ……もうどうでもいいや。

そして、それからは永遠とも言える、ぼつちへと墜ちた私への嘲笑が続く…………のかと思われたのだが、彼が、比企谷君がそれを許さなかつた。

「はあ～……マジでうつせえわ……なんなの？ジャングルなの？」
ずっと黙っていた比企谷君が急に口を開いた事により、モンスター達の目は比企谷君へと向いた。

「は？」

「ぶつ、なにこいつ喋れんの？」

「ナル谷は黙つてろよキメエから。お呼びじやねーつつの、あはは

」

俯いてしまった顔を比企谷君に向けると、その目は腐つてゐる……といふよりは仄暗い光をたたえてる様にも思えた。

「まず勘違いをどうにかしろ。俺と二宮はさつきそこで数年ぶりに偶然会つたばかりだ。

あまりにも懐かしかつたし、俺にもまあ未練とか？そういうのもあつたから、どうしてもつて頭下げて、お茶だけ付き合つて貰つてたつてだけだ」

……はへ？なにそれ初耳なんですけども。

……私の様子を見て庇つてくれようとしてるのかな。比企谷君

……

やばいつ……つい一瞬前まで心が冷えきつてたのに、比企谷君の声を聞いただけで、なんだかポカポカしてきちゃつたよ……なぜだか、すつごく安心する。

しかしそんな安心してポカポカになつた心を、比企谷君自身が冷え冷えさせてくれたのだつた。

「つうかさ、さつきから馴れ馴れしいんだが、お前らつて誰？もしかして知り合いだつけ？二宮。

なんかあまりにも頭の悪いその他大勢にしか見えなくて、全然思い出せないわ」

比企谷君！？さつきコイツ等の顔見て引きつってたよね！？絶対覚えてるよね？

「は、はあ？あんたなに言つてんのお？キモオタのモブオのクセによお！」

「その他大勢にも入れない最底辺カーストの癖に、なに調子乗つ

ちやつてんのお!？」

「マジでムカつくわオタ谷！高校デビューでもしちゃつて勘違いしてんじゃね!?モブの癖にさあ」

キレイだした三人をよそに、涼しい顔をして挑発を続ける比企谷君。ちよ、ちよつと!?

「いや、スマン。マジで思い出せないわ。てかお前らは俺のこと覚えてんのな。俺は知らんのに。」

モブ勝負で言えばお前らの圧勝じやね？おめでとさん

私のさつきまでの怯えはどこえやら、比企谷君のあまりの煽りっぷりに心配になる。やばいって！コイツら顔真っ赤にして爆発寸前だよ！？

「てかお前らつてどこの高校通つてんの？なんか見たこと無い制服着てんな。ああ、底辺過ぎて知りないだけか。」

なんかアレじやね？将来の為にもこんなトコで油売つてないで、早く帰つて勉強でもした方がいいんじやね？」

カースト順列付けの煽りに対し、ま、まさかの学校カースト返しつ！そりやコイツ等の学校じや総武高校の制服着たヤツに学校カースト制度で相手になるワケがないよつ！

その時コイツらは初めて比企谷君が着ている制服に気付いて、これでもかつてくらいに引きつった。

たぶん比企谷君は普段なら学校の優劣で人を馬鹿にしたりはしないんだろう。人そのものの質では大いに馬鹿にしてそうだけど。

これは……比企谷君が相当怒つてるつて事なんだろうか？それとも……わざと挑発してんの……？

「ぎつけんなよ比企谷あ！ちよつといい学校行つてつからつて調子に乗りやがつてよお！」

「比企谷ごときが私らより上になつたつもりなの!?マジでキモいわ！」

これは……もう勝負有りだわ。

完全に涙目になつて逆上してヒスつてる女三人に対し、終始冷静に煽つてる比企谷君。ちよつと煽りすぎな気がしないでもないけど。

これはもう尻尾巻いて惨めに逃げ出すか、口じや相手になんないから暴力に訴えるかくらいしかコイツ等に選択肢がないもん。やつぱり、比企谷君はスゴいんだ……もう、あの頃の比企谷君じゃないんだね……

——ん？ 暴力に訴える？

え？ ま、まさか！？

なんか必要以上にすつごい煽つてるかと思ったら、もしかしたら比企谷君はコイツ等に暴力を振るわそうとしてるんじやつ……

た、確かにこんな公共の場所で口論の末に手なんか出しちゃつたら、学校的に問題行動になつてしまふ。

目撃者もたくさん居るし、その件で脅しを掛ければコイツ等はもう二度と比企谷君にも私にも近付かなくなる。

だから！？だからそんなに煽つてたの！？

ダメだよ比企谷君っ！ そんな事の為に、こんな奴らに比企谷君が殴られる事なんてない！

止めなきや！……と思つた時にはもう遅かつた……

怒りで真っ赤に染まつたしーちゃんが、酷い暴言を吐きながら比企谷君に向かつていった。

「比企谷あ！ あんたみたいな生きてる価値も無いような気持ち悪いぼつち野郎の分際で、上位カーストの私らに生意気言つてんじやねえよ！」

「ひ、比企谷君っ！」

バーンッ!!! と、それはもうものつ凄い音が4つくらい店内に響いた。

え？ 4つ？ 前方で3つ、後方で1つのもの凄い音が聞こえたんだけど……？

私は引つ張たかれそうになつた比企谷君を庇おうと抱き付いたん

だけど、どうやら比企谷君はまだ叩かれてはいないみたい。

叩こうとしてたしーちゃんも、叩かれようとしてた比企谷君も、そのものつ凄い音に驚いて固まっていたから。

しかし次の瞬間、比企谷君の顔がみるみる青くなつていった。前方から発せられたその声を聞いてしまつたから。てか気温が5°Cくらい下がりましたけど……

「あら、あまりにも騒がしくてここは動物園かなにかなのかと思つたら、動物園ではなくて細菌のラボだつたようね。

この騒ぎはついにパンデミックでも引き起こしてしまつたのかしら? 比企谷菌」

「ヒツキーマジうるさいしつ!」

「ちよつと先輩! せつかくの女子会をバカ騒ぎで邪魔しないでもらえませんかねー!」

「……え? なんで……?」

そして後方から聞こえてきた声に、今度は私が引きつる番だつたんですのよ?

「あれー!?なんかうるさいわあたしの名前が出るわで何事!?とか思つてたら比企谷と美耶ちゃんじやーん! ウケるつ

いやいやなんで居んのよアンタ!? 笑顔なのにすげー青筋浮かんでんだけど!? なんかヤツの後ろでは、この中で唯一の常識人ぽい仲町さんが、申し訳なさそうに苦笑いしてペコペコ謝つてるしつ!

これ完全に折本さん主導で尾行してきたでしょ!?

前門の虎、後門の狼は、徐々にその差を詰めてくる。

やばいっしょ! どちらのグループも青筋浮かびまくりんぐつしょ

!

ひいいつ! 恐いー! 私、今比企谷君に抱き付いたらつてますけどもおお!?

でもそんな2つのグループの視線は、話し掛けてきた比企谷君と私

では無く、しーちゃん達に向けられていた。

あ、やつべー……これ完全にオーバーキルでしょ……

そして私は彼女達の視線が他に向いている隙に、そつと比企谷君から離れるのであつた……

あ、あれ？なんかその瞬間だけ黒髪ロングの美少女の視線がギラ

ンツと私を射ぬいた気がしたんですけど、私、大丈夫でしょうかね

……?

つづく

戦慄する二人のぼつちと三人のリア充（笑）

突如現れたお怒りオーラを放ちまくっている四人の少女+ゞ迷惑お掛けしますとペコペコしている一人の少女の登場に、場の空気がピリツと刺激的になつた。主に比企谷君が。

ま、まあ確かに比企谷君が一番引きついた顔はしてるけど——実際は私もえらい顔してるんだろうけど——もちろんしーちゃん達だって物凄い困惑気味。

そりやそうだろう。総武の制服着た明らかに自分達より遙かに高カーストそうな美少女三人に加え、今まさに話題についていた中学時代のカーストトップの折本かおりが、自分達に敵意を向けてくるんだから。

「え……？ なに……？」と、迫つて来る四人に縮こまつっていた。

このまま一方的な蹂躪が行われちゃうのかと緊張して見ていると、事態は思わぬ方向へ。

「ん？ あれー？ えっと確か……雪ノ下さんと……由比ヶ浜さん、だよね。お！ 一色ちゃんもいんじゃん」

「あら、こんにちは。確かに折本さん……と言つたかしらね」

「や、 やつはろー、 バレンタインぶりだねえ……」

「あ、あれ？……なんで折本先輩まで……？」

おつとまさかの世間話が始まつてしましました。

比企谷君も私もしーちゃん達も緊張感のなか「待て！」された状態で取り残されちゃつてますね、コレ。

※※※※※

「久しぶりー。え？ なに？ どしたの？」

「折本先輩こそ、 なんでここに居るんですか？」

「へ？ なんでっていうか……」

するとチラツと気まずそうにこちらに視線を向け、私と目が合うとあからさまに視線を逸らした。おいつ……

「いやー、なんでも何も、ココあたしの地元のカフェだし……、学校帰

りにたまたま寄つただけだよ？ねー、千佳」

「そ、そうだねー……」

ヤツラは嘘を吐いている……

「そ、そういう一色ちゃん達はなにしてんの？地元違うよね。総武の学校帰りに寄る店でもなくない？」

雪ノ下さんて確かにあたしがバイトしてるカフェの近くに住んでるとかつて聞いたし、クリスマスに聞いた限りじゃ一色ちゃんも全然違うよね？」

もしかして由比ヶ浜さんが地元近いとか？」

「や、やー……あ、あたしはここから二駅くらい先の駅かなー……？」困ったように笑いながら目を逸らすお団子美少女（由比ヶ浜さん？）を見てから、同じくスッと目を逸らす黒髪美少女（雪ノ下さん？）といろはすちゃんを一瞥してから、ヤツはニヤリと笑つた。

「あー、やっぱ一色ちゃん達も面白そうだから比企谷を尾けて来たクチでしょー。ヤバいウケる！痛つ！」

『も』!?あんた今『も』つて言つたからね！

折本さんはすぐさま仲町さんに頭をはたかれました。

「貴女はなにを言つているのかしら私達が比企谷君ごときを尾行するはずが無いでしようおかしな言い掛けりをするのであれば名誉棄損で訴えることも辞さないけれどよろしいかしら」

「そそそそんなワケ無いし！ヒツキー尾けるとかキモいし！」

「わ、わたしたち、先輩なんかを尾けるとかそんな暇人じやないですけどっ!?」

…………尾けて來たんですね分かります。

私が驚愕の視線を向けていると、いろはすちゃんがそつとおつきい乳の後ろに隠れた。

やはりアイツか……

あの娘……葉山君に連行されながらも、こつそりハーレム仲間に連絡着けて尾行させやがったな……

「「あ、あはははは……」」

顔を真っ赤にさせて俯く黒髪美少女と、乾いた笑いでその場を乗り

切ろうとする三人のトップカースト。

そんな中、登場から引きつった笑顔のまま終始ペコペコして仲町さんだけが、やけに私の心を和ませてくれました……。

こうして誰一人得をしないまま、強襲してきたメンバーの自己紹介？が終わつた頃に、ようやく我に返つて息を吹き返した集団が居た。もちろん私達じゃないよ？ だつて私も比企谷君も聞きたくもなかつた真実にグツタリしてゐるもの。

だつてこの人達、ずつと尾けて来たつて事は、私達の話、始めから全部聞いてたんでしょ……？ うん。もういつでも死ねる。

「ね、ねえ！ なんなの！」

「意味分かんねえんだけど！」

「いきなり入ってきて勝手に話進めないでくんない？」

ああ……やめときやいいのに……あんたら空氣読めないの？ この人達と自分達の格の違いが分かんないの？ なんでわざわざ死地に赴くのかね……

すると、黒髪美少女の雪ノ下さんが、あまりにも美麗な動作で一ちゃん達の方へと振り返り、そしてあまりにも美麗な微笑で優しく語り掛けた。

その絶対零度の一言にて虐殺ショーや始まりがここに高らかに宣言されたのであつた。

※※※※※
「あら、まだ居たのね。あまりの存在感の無さに気が付かなかつたわ、ごめんなさい。

そういえば先ほどモブがどうこうと言つていたけれど、m o b……集団や群れと言つた意味ね。

つまり十把一絡げのその他大勢のキャラクターに対して、よくアニメーションやインターネットなどで用いられる用語、及びその意味合いから陰の薄い個人に対しても使われる蔑称ね。

ふふつ、成る程、存在感の無さに気が付かない程度の存在。言い得て妙ね」

女の私でさえ惚れ惚れするような美しい微笑みで恐ろしい言葉を

しーちゃん達へと放つ。

あんな綺麗な笑顔なのに見てるだけでちびっちゃいそうなんですけど。

私があのグループの一員だつたら心臓発作を起こしちゃう自信があります。

「ところで確かカースト制度とは古くはヒンドゥー教における上級身分から奴隸などまでを分類する身分制度の事よね。

その意味合いを使って、最近では学生社会などで一つのコミュニティー内における人間関係を、容姿や人望で区分して上下関係を実際に持っている言葉だと記憶しているわ。

見たところ、お世辞にも飛び抜けて容姿が優れているという訳でも無さそうなのだけれど、それで貴女達はカースト制度の上位に位置するのかしら？」

オ、オウ……

私、すでに白目を剥きそうんですけど、同じように白目を剥きそ
うなしーちゃん達を、今度はいろはすちゃんが上から下へと舐め回す
ように観察してからとつてもいい笑顔をした。

「ぶつー！上位カーストっ」

嘘……でしょ……？雪ノ下さんといい、いろはすちゃんといい、そ
んな素敵な笑顔でなんでこんなに恐いの？

「カースト？車で音楽聴ける機械？」

「結衣先輩は喋らない方がいいです」

「ウケるっ」

今の会話の流れでカーステは無いだろ。あの娘、総武高校にどう
やつて受かつたの？てか私、あの娘が受かつた同じ年に落ちちゃつた
んですけど。

「もしくはとても素晴らしい人望を持ち合わせているのかしら。

それにしてはこのような公共の場所でヒステリックに獣のように
喚き散らしたり暴力を振るおうとしているその獣のような人格を見
る限り、とてもそうは見えないのだけれど。

もしくは学業が飛び抜けていい……………ごめんなさい。それ

は無いわね」

ひ、酷いつ……しーちゃん達の制服をわざと一瞥してから、少し申し訳なさそうな憐れむような顔で首を振り即座にその意見に否を付けた。

「容姿は、まあ良くて並、人格は獸並、学業は……。申し訳ないのだけれど、私には貴女達がカーストの上位に位置していられるという理由がどこにも見受けられないわ？」

もしよければ、どういった理由で、どのようにして、身分制度の上位に居られるのかを後学の為にもご教授頂けないかしら？」

私は残念ながらそのカースト制度という物から外れてしまつて、いる存在みたいだから、貴女達の貴重な意見がとても興味深いのだけれど」

心底キヨトンと首をかしげ、とても素敵なお水の微笑を向ける。

たぶん同じような事を他の誰かに言われたのだとしたら、コイツ等はまた激昂して喚き散らしたんだろうけど、総武高校の制服を着ているわ、どんな美女だわ、そして尋常では無く冷たい視線に晒されているわのこの状況では、この程度の女達ではガクガクと震える身体と涙を堪えて口を噤ぐ以外にはどうする事も出来ないんだろう。もちろん私だつたらすでに昇天してるまでありますっ！

すると雪ノ下さんは、さらに冷たい眼差しになつた。

うつそん!? そこからさらに寯たくなる物なの?

「……そこにいる男は、貴女達よりはよっぽどその他大勢と言えないわね。

寧ろその他大勢よりも遙かに劣る程に目も心も腐っているわ」

ここへ来てまさかの比企谷君へイトに回る……だと……?

「でもね、少なくともこの男は、どうでもいい十把一絡げの存在の貴女方と違つて、他に替えが無い存在なのよ。

貴女達なんかよりも、よっぽど存在価値のある人間だわ。

……貴女達ごときが、比企谷君に存在価値が無い人間だなんて言わないで貰えるかしら」

……凄い。コレが言いたかつたんだ、この人は……。

コレの為にここまで物凄い罵倒……あなたどんだけ怒つてたのよ……それに、どんだけ愛されてんのよ、比企谷君。

ふと見ると、由比ヶ浜さんもいろはすちゃんも、優しい笑顔で雪ノ下さんと比企谷君を見つめている。

こんなの、私なんかが入る余地なくない……？なんか、私だけ場違いな気がしてきた。

この場で一番のその他大勢つて、私じゃん……私だけじゃん……「あのさー」

その時、雪ノ下さんの言葉を黙つて聞いていた折本さんが口を開いた。

「さつきあんたら、あたしの名前出してたけどさ、えーと……どこの誰子ちゃん達だっけ？」

比企谷と同じで、あたしもあんたらの事なんて全つ然記憶に無いんだけどさー」

すると折本さんは私の肩をいきなり抱き寄せた。

え!? な、なに!?

「なんか上位カーストがどうとかワケ分かないこと言つてたけどさ、少なくともあたしはあんたらの事なんか知んないし興味も無い。でも言つとくけど美耶はあたしの友達だから。雪ノ下さんじや無いけど、あんたらが名前出してたあたしには、あんたらより美耶の方が遙かに価値があんだよね。

あんたらがどんだけ自分の世界で価値があるか知んないけど、あたしからしたらあんたらはその他大勢なんだよ。

だからその他大勢のあんたらがさ、あたしの友達の美耶に友達居ないとかぼつちとかつて勝手に馬鹿にしないでくんない?」

——やばい……ちょっと泣きそう……てかちょっと泣いちゃつてんだけど私。

ありがとう折本さんつ……

でもこれだけは言つとかなきやね。

「……ぐすつ……まだ友達未満だからつ……！」

「美耶手厳しいつ、ウケる! へつへー、でも『まだ』つて聞いちゃつ

たー」

うう……うつさい……！

※※※※※

あまりにも美しい氷の女王に蔑まれ、自分達の中でも上位カーストとして知られている折本さんにも罵倒されたしーちゃん達は、もはや一言も発する事も出来ずにただ震えて泣きながら逃げ去るのみ。だからやめとけって言つたのに……

でも雪ノ下さんはまだ言い足りなかつたみたい。あれだけ言つといてまだ!?

そして黙つて逃げ去ろうとしたコイツらにトドメを刺した。

「あら、モブだつて言葉くらいは発する物だと思うのだけれど。

言葉も発さない集団や群れは、そのうちmobどころか『aback ground』、背景になつてしまふかも知れないから、十分に気を付けなさい』

やめてっ!もう死んじやう!

そしてアソツ等が去つた後の事を考えると私が死んじやう!

「さて」

雪ノ下さんのその一言と共に、比企谷ハーレムの皆さん是一斉にこちらを向いた。そして私は白目を剥いた。

もうダメボ……なんか折本さんのおかげでこれから優しく生きていけるかと思つたのに、どうやら私の寿命はすぐに来ちゃつたみたいです。

しかし、雪ノ下さんは私を一瞥するとあまりにも意外な言葉を放つたのだつた。

「由比ヶ浜さん、一色さん。あの騒がしい人達のお陰で興も削がれた事だし、私達もそろそろ帰りましょうか」

あ……れ?

つづく

リア充（笑）よりも震え上がるぼつち

おかしいな……

私てつきりこの氷の女王様こそが先輩に立つて、私をしーちゃん達路傍の石ころの如く、蹴り飛ばし踏みつけてゴミのようにそこら辺のドブにでも蹴り捨てられるのものかとばかり思つてたのに、まさかその雪ノ下さんから撤収の提案がなされるとは。

しかし想像してた末路が酷いなつ。

でもその提案に意外だつたのは私だけでは無いようで……
「そうですねー、帰りますかー…………って雪ノ下先輩!?か、帰つちやうんですか!?

だ、だつてだつて、先輩とこの泥棒猫を置いてつちやうんですか!?
誰が泥棒猫だよ……私こう見えてあなたより先輩なんで、せめて本人が居ない所で言つてもらえませんかね。

「一色さん…………？」

「は、はいいつ…………」

すると雪ノ下さんはそんないろはすちゃんに今にも襲い掛からんばかりの厳しい目を向けてお説教を始める。

おお……さすが先輩。雪ノ下さん！きつちりと言つてやつて！

「猫を泥棒の代名詞のように言うのはやめなさい。私、猫に対して偏見に満ちたその言葉を使う人間がどうしようもなく許せないの」

そつちかつ！マジギレして猫の擁護をする前に少しでも私に優しさをください。

「まあまあゆきのん！いろはちゃんも悪氣があつたわけじや無いんだしさー」

私に対する悪気とかは気にしないんですね分かります。

「泥棒猫つて……あのなあお前ら」

「黙りなさい」

「ヒツキーは黙つてて」

「先輩うつさいです」

「……はいすみません」

「ウケる！」

なんなのこのカオス！

とりあえず恐いので、比企谷君は黙っている事にしたみたいですが。
もちろん私は始めから口を開く気なんかありません。

「こほん！と、とにかくですね？先輩とその人を残して帰っちゃうん
ですか……？」

じやあなんのために尾け……偶然会ったのか分かんなくないです
かね」

……もう言い直さなくてもいいよ、ソレ……「なんのために偶然
会つたのか」って意味の方が分からないよお姉さんは……

するとお団子乳の由比ヶ浜さんがいろはすちゃんに優しく語りかけた。

「いいじゃんいろはちゃん！あたしはゆきのんの提案いいと思うよ？
たぶん……ヒツキーとこの娘が会つて話すのって大事なことなん
だと思う」

「結衣先輩……」

「この娘はさ、さつきまでの人たちとは全然違うじゃん。ちゃんと
ヒツキーのこと分かつてるし。

その上でヒツキーに大事な話があつて会いに来たんだから、それは
もうあたし達が邪魔しちゃダメなんだよ。ねつ」

「ふふっ、由比ヶ浜さんの言う通りね。先ほどの騒がしい人たちとは
全然違うもの。

見つかってしまった以上は、もう私たちは帰るべきなのよ？一色さん

それ逆説的に言うと見つからなかつたら尾行も盗み聞きもOKで
事ですよ！雪ノ下さん！

——でも、頭はちょっと悪そ……ぽわつとしてそうだけど、やつ
ぱりお姉さんなんだなあ、由比ヶ浜さんて人も。可愛い後輩をちゃん
と宥めてる。それに……

「むー……先輩のこと分かつてるからこそじゃないですかー……」

いろはすちゃんは口を尖らせながらも渋々納得してくれたみたいだ。

「さあ、ではそろそろ帰りましょうか」

そして雪ノ下さんはお供の二人を引きつれて私たちに背を向けた。
……この人たち——約一名の後輩ちゃんを除く——は、私を少しだけ認めてくれたんだろうか？

こんなにも目立つ美少女達が、こそこそと尾行してまでも比企谷君の事が心配で着いてきたくせに、こんな見ず知らずの女と大切な比企谷君が二人で居るのを置いて帰ろうっていうんだもん。しーちゃん達が来る前までの盗み聞きで、私なら大丈夫って、認めてくれたってことだよね……？

いやそれはそれで死ぬほど恥ずかしいんだけども。
さつきの葉山君と同じで、やっぱ本物のリア充ってのはすごいな。
しーちゃん達みたいな充実してるつもりになつてバカみたいに騒いでるだけの偽物とは全然違うんだな。

そして私のリア充時代なんて、まさにそんな程度のモノだつたんだろうね。

はあ～……あんなモノに満足してただなんてなあ……

そして比企谷君は、正にそつち側の本物のリア充なんだろう。

こんな素敵な人たちが比企谷君を変えてくれたのかな？

それともこんなに素敵な比企谷君が、この人たちを引き寄せたのかな？

そんな彼が、そんな関係が羨ましいような嫉ましいような、でも少なくとも悪い気分ではない。

私だつて今こうしてこんなにも素敵の人たちに少しでも認められたりことは、今までの挫折だつて苦悩だつて、決して無駄ではなかつたんだろう。

私は…………そんな羨ましいような嫉ましいような、でもなんだかポカポカする不思議な気持ちで、この素敵の人たちが去つていく背中を、自然と微笑んでしまつてゐるだらしのない顔で優しく見つめてい

た。

しかし……世界は私にそんなには優しく無かつた……

「ああ、それはそうと比企谷くん」

「……へ？」

黙つてろと言われて小さくなつていた所に急に声を掛けられたものだから、比企谷君はとつても間抜けな声で返事をした。

なんだろうか私にまで襲い掛かつてくるこの悪寒は。

すると雪ノ下さんはくるりと振り返り、とてもいい笑顔でニッコリと微笑む。

「明日は聞きたい事が山のようになりそうだから、授業が終わつたらダッシユで部室に来るよう。部長命令よ」

「き、聞きたいこと？」

「ええ、私達が居なくなつたこの後の事が最重要事項になつてくるとは思うのだけれど、あとは主に先ほどあの騒がしい人たちに啖呵を切つていた際に口走つていた未練がどうとかいう辺りの話も重点的に聞くことにはなりそうね」

「…………」

「あ、それあたしもすつゞい気になつたし！それに頭下げてどうしてもお茶だけでも！とかも言つてたよね」
微笑ましかつた空気が一瞬でブチ壊れた瞬間でした。

その美しく笑う少女達の瞳には光が宿つてはいなかつたのです。
ごめんね？比企谷君！私を助ける為にあなたの寿命を短くしてしまつたわっ……

でも、比企谷君だけを犠牲にしたわけじやなかつたんですね。すぐに私の番が回つて來たんですもの。

「あと……確か美耶さん……と言つたかしら？」

「は、はひ……！」

「もし良かつたら、明日貴女も学校が終わつてからいかがかしら？」

貴女にもお話をしたい事があるから歓迎するわ」

「わ、わたくしめに話でございまひゆか……？」

なんで私へりくだつてんだよ。しかも噛んでるし。

だつて、人生で初めての恐怖なんですもの。

「ええ。貴女には……そうね。主に先ほどそこの男に抱きついていた件かしらね。」

…………やつぱ気にしてたかあああ！

あ、これはヤバイな……とは常々思つてたんですよね。

「貴女は分かつてはいない事かも知れないけれど、その男はとても危険な菌まみれなの。

その危険性と今後の除菌計画などについてもお話したい事が山ほどあるのよ。

無理にとは言わなけれど、必ず来なさい？」

『無理にとは』と『必ず』という相反する言葉が私の首を優しく締めあげております。

これたぶん、除菌されちゃう菌は私の方なんですね？

「…………あ、やー、で、でもですね？……学外の生徒に入校許可をおろすのつて、中々大変なんじやないんですかねー……？」

なんだかちよつと申し訳ないんで、ざ、残念ですけど今回はー……」

「あー、わたし生徒会長なんで大丈夫ですよー？そんな許可バンバン出しちゃいますよバンバン。

心配しないで安心して来てくださいねー」

安心できねーよ。心配しかねーよ。

ていうかそんなにバンバンバンバン入校許可ばっかりいらねーよ。

「それでは。比企谷くん、また明日」

「じゃーねー、ヒツキー」

「ではではさよならでーす」

こうして、とてつもない嵐はようやく過ぎ去つていった……明日、その嵐に自ら突つ込まないといけないという素敵なプレゼントを残して。

そうだ。帰宅したら遺書を残しておきましょう。お母さん。先に旅立つ不幸をお許しください。

「いやー……すつゞいねー……ウケ……るよりは軽く引くくらい恐すごいなんだけどー」

あ、まだいらつしやつたんですね折本さん。

箸が転げなくとも笑える年頃の折本さんがウケないとか、よっぽどの事態じやないですかやだー。

そんな恨みがましい涙目でチロリと折本さんを見ると……超
ぶるぶるして笑いを堪えていた。

んだよウケてんじやんかよ。ちょっと安心しちゃつたよ。安心しちゃうのかよ。

仲町さんは顔面蒼白でブルブル震えますけどね。

「んじゃねー、美耶、比企谷ー。あたしらも帰るわー」

「じゃ、じゃあね、二宮さん……あと……比企谷君」

「あ……お、おう」

「う、うん」

立ち去つていく折本さん達を呆然と見送つていると、「あー」つとニヤニヤしながら小走りで引き返ってきて、私に耳打ちした。

「美耶美耶ー、明日昼休みにこのあとの事たっぷり聞かせてよねー！」

ヤバい今からすでに腹がよじれそうつ

もう好きにしてください……

「はいはい……」

「へへっ！じゃーねー！」

「あ！比企谷ー、今度どつか遊びに行こうよー」

「なんでだよ行かねえよ」

「いいじやん、ケチー！んじや約束ね！」

「あ、とりあえず明日生き残れたらだけねー、ウケる」

「いやウケねえから……そして勝手に約束取り付けんな」

ひひっ！と笑いながら手をヒラヒラさせて去つていく折本さんを見送りその場に残された私達は、店内の他のお客様や店員さんにはでもない好奇の眼差しを向けられていた事に今気付いた……これ動物園のパンダよりも注目集めてんだけど。

むしろここまで騒ぎ起こしてたんだから、その前に止めに来いよ店

員!!

「ひ、比企谷……君……」、出ようかつ……」

「……だな」

そして私達は二度と入店しないであろう、もとい二度と入店出来ないであろうカフエをあとにし、自転車をカラカラと押しながら並んで夜の街を歩く。

現在18：30ちよいか。ここからなら近いし、あそこ……行つてみようかな。

——あ、なんか私が今日どうしてもしたかつた事が分かつちゃつたかも。

「比企谷君。私、ちょっと行きたいトコがあるんだ。いいかな……」「ああ……まあ別にかまわんぞ」

そして私は、間違つてしまつた青春ラブコメに決着をつけに行くのだ。今までの私にも。

……そしてこれから私の為にも。

つづく

私、ぼつちを卒業して普通の女の子に戻ります

カフエを出て、並んで目的地へと向かう道すがら、私はずつと言いたかった事を比企谷君に聞いてみた。あの日偶然遭遇してからずつと気になっていた事を。

「それにしても中学の頃と比べて、ホント比企谷君て変わったよねー」「は？俺が？どこが」

「いやいやどこがって……全部が全部変わったじゃん。

いや、まあ私も変わっちゃったけどさ」

「まあ、確かに二宮は随分と変わったよな。まさかあのリア充がぼつちになつちまうとはな」

「あはは、ホントだよねー。でもそれを言うなら比企谷君の方がよっぽどまさかの変化じやん！」

ふふつ、まさかあのぼつちだった比企谷君が、こんなにリア充になつちやうだなんてねー」

クスクスと笑いながら比企谷君に視線を向けると、なんだか馬鹿を見るような視線を向けてきた。

「は？なに言つてんの？俺がリア充とか意味が分からんのだが。

俺みたいなぼつちのプロを舐めんなよ？」

え……？なに言つてんの？この人。

超真顔でそんなこと言われましてもですねえ……

「いやいやなに言つてんのはこつちのセリフだから。

あんな素敵で可愛い娘たちを侍らせといて、リア充の意味が分からんとか自分はぼつちだと、あなたちよつと世のぼつち達を敵に回すわよ？

てかすでに世のぼつち達の敵だけどね」

「侍らせてるつてお前な……」

あいつらはそんなんじゃねえよ。単なる部活仲間つてだけの話で、友達でさえないから」

嘘……でしょ……？この人本気で言つてんの！？

「は……はあ？ んなワケ無いじゃん！ マジで言つてんの!?

じ、じゃあいろはすちゃんはどうなの!? あの娘は生徒会長だしサッカー部のマネージャーつて話じゃん！

全然比企谷君と関わりないじゃないつ

「いろいろはすちゃんて……てかなんでそんなに色々と知つてんだよお前。

総武高校事情に詳しすぎじゃね？」

「ま、まあ今日は色々とあつたのよ……」

うん……ホント色々あつたなあ……すでに走馬灯が頭に浮かび過ぎて意識失いそうなレベル。

「ほーん。まあ一色に生徒会長を押し付けたのは俺だからな。

その責任を取らされて、いいように利用されてるってだけだ」「…………」

うつわあ……この人、本気で気付いてないの？ 自分がいかにリア充なのかって。

んー。でも……ちょっとわからなくも無いかも。

たぶん比企谷君は、気付かないんじや無くて無意識に気付かないようにしてるんだろう。

ぼつちにとつて、儂い希望つてヤツは虚しさを増幅させるだけの甘い毒みたいなもの。

下手に期待して希望して夢見ちゃつて、そしてその上で裏切られたら、元々あつた傷が余計に深く痛くなるだけ。

だから比企谷君は、自分がもうリア充どころかリア王になつている事にも気が付かないんだろう。

「……あ、だからかー！」

「へ？ な、なにが？」

「あ、ごめんごめん！ こつちの話一つ

「？」

そつかそつか！ そういうことかー。だから私は比企谷君と普通に話が出来てたんだ。

自分と関わりのあるリア充つてだけで、今の私には緊張の対象のハ

ズの比企谷君なのに、なんで普通に話せるのか今まで全然分からなかつた。

なんの事はない。それは比企谷君が私と同じぼつちだつたからなんだ。

例え実際はどんなにリア充だと、比企谷君自身が自分をぼつちだと信じて疑わない以上は、やっぱり比企谷君はぼつちなんだろう。ぼつちとぼつちは通じ合う。それはもうニユータイプばかりに。

だから頭ではこの人はリア充なんだと考えながらも、心ではこの人は仲間なんだと感じとつてたんだろうね。だから緊張しないで話が出来たんだろう。

ま！今となつては別の意味でちよつと緊張しちやつてるんですけどねーっ……

そんなこんなでしばらくテケテケと歩き、もう目的地に到着しようかとする頃、私が目指している場所に比企谷君がようやく気付いた。

「なあ、二宮……お前が向かってるのつて……」

「……そつ」

「マジかよ……」

そして到着した目的地。

そこは、私と比企谷君が以前通つていた学校。

そう。私が間違えてしまつたこの中学校こそが、私の目的の場所。

「わー……懐かしいなあ……」

「……だな」

校門の外から覗き込む中学校は、時が止まつているかのように、あの頃となんにも変わつていなかつた。

胸がムカムカする。卒業してからは意図して近づこうとはしなかつた場所だから。

ゴメンね比企谷君。ホントはあなただけてこんな所に来たくないよね。

「私ちよつと職員室行つて、知つてる先生がいないか見てくるね。で、許可貰つて校内に入つてみたいんだよねー！」

「は？入んの？いやいや無理だろ……最近は卒業生つつつても早々入っちゃいけないようになつてんじやねーの？」

大体さつきお前が雪ノ下に言つてたんじやねーかよ」

いやまあそりやあの時は必死にもなるでしょ。命懸かつてましたから？

ふふふ、でもね？比企谷君は忘れてるかも知んないけどっ……

「だーいじょーぶ！だつて私は今はこんなになつちやつたけど、ココに通つてた頃は優等生で人気者の二宮美耶ちゃんだったんだよっ？」

そんな私が久しぶりに訪ねてきて、『懐かしいからちよつと中を周りたいんですけどお』つて甘えれば一発だつて

そう本性丸出しの台詞を放つてニヤリとしてみせると……

「……お前つて、なかなかいい性格してんのな」

同じような悪顔でニヤリと返してくれた。

「お褒めのお言葉ありがとっ」

パチリとウインクをかまして、私は一人校内へと足を踏み入れたのだった。

※※※※※

昔お世話になつた担任が居たから調子よく会話をし、もちろん余裕でOKが出たので比企谷君を呼びに行つてから私達は一人で校内へと入つて行く。

もう完全下校時刻を過ぎた校内はとても静まり返つていて、借りた来客用スリッパが廊下をペタペタと鳴らす以外の音は一切しない。なんだか無言になつてしまふ。

しんと静まり返つていて声を出し辛いというのもあるんだろうけど、たぶんそれ以上に二人の胸が苦しいから。この景色とこの匂い。嫌でもあの頃の記憶が呼び起こされる。

そして向かつた先は、もちろんあの教室。私と比企谷君が二年生の時に一年間過ごした場所。

電気を点けて広がつた光景に息をのむ。

その光景を見た瞬間に、あれだけ記憶から抹消していたここで毎日が、まるで昨日の出来事みたいに脳裏を駆け巡つたから。

比企谷君も……とても歪んだ顔をしてた。私なんかよりも、よっぽどここには来たくなんてなかつたよね……

「比企谷君……ホントにゴメンね。来て貰つちゃつて……」

「まあ気にすんな。もう昔の事だし大して気にしてねえよ。さつき言つたる」

『比企谷君……わざわざ着いてきて貰つといて今更だけどさ、やつぱやめとく？比企谷君は入りましたくんなかないよね』

『まあそりや好き好んで入りたいとは思わんけどな。

でもそれほど嫌つてワケでもない。そもそもそんなに嫌なら、二宮が一人で職員室行つてる間にこつそり帰つちゃつてるしな』

入校の許可を貰つて職員室から帰つてきた時、比企谷君にはきちんとお断わりはしておいた。

さつきは笑つてあんな風に言つて着いてくれたけど、やつぱりいざこんな表情を見てしまうと、どうしようもない罪悪感に駆られてしまう。

本当は來たくなんかないはずなのに、私の近況や、さつきしーちゃん達に取つた私の情けない態度を気にしてくれてるんだろうな。

でも……ここに来るのは比企谷君が居なければ意味はないんだ。だから、着いて来てくれた比企谷君に贈る言葉はゴメンじゃなくつて……

「うん。ありがと」

「おう」

※※※※※

心を落ち着ける為に教室内を色々と見て回つてみた。

あの頃に付けた机の落書きとか傷とか残つてないかな？なんて探してみたんだけど、さすがにそんなのあるわけないよね。

私達が使つてた頃よりも幾分新しくなつてゐるっぽい机や椅子に優

しく触れながら、話し始めるのをただ待つてくれている比企谷君に私は語り始めた。

「さつきさ、しーちゃん達が乱入してくる前に言い掛けた事あつたじやん？」

「ん？ああ」

「……私さ、ホント毎日がつまんなかったんだあ。

学校行つても一言も喋んないし、周りのリア充共が騒がしいから音楽かゲームの音で遮断して、いつも一人の世界に浸つててさ。

毎日の楽しみつて行つたら、アニメ見て漫画見てラノベ読んでゲームする事くらい」

「……は？マジで？

……はあ、あの二宮がオタクになるとはなあ……」

「……せめてサブカル女子とか言ってくんない……？」

いや、実際サブカル女子つて結構蔑称なトコもあるから是非にとオススメはしないけど。

でもなんか面と向かつてオタクつて言われちゃうのもちよつとねえ……

「んだよ、そのなんでもかんでも男子とか女子とか付けとけばいいつて風潮……

そんなのに騒いでんのはマスコミだけだろ……」

ぶつ！やっぱ考えることは一緒があ。

「ま、まあそれはともかくとしてよ、私はそんな毎日を面白可笑しく過ごしてきたワケなのでありますよ」

「はあ」

「でもさ、」

そして私は比企谷君を真っ直ぐに見つめる。

ちゃんと目を見て、ちゃんと私を見て貫つて話したかつたから。

「あの日、偶然比企谷君を見かけてから、ぜーんぶ変わっちゃつたんだあ」

そう言いながらニコリと微笑んだら、比企谷君は少しだけ赤くなつた。

ん？ そんなに魅力的な笑顔だったのかしらっ？

「あの日、超が付くくらいのリア充に進化しちやつた比企谷君を発見して、その帰り道に人生で初めての痴漢に遭遇して、そして助けて貰つた……」

「だからリア充じやねえって言つてんだろ…………。え？ 痴漢に合う前に俺のこと見たのか？」

「へへっ、そーだよお？ 美女三人に囲まれてデレデレしてるムカつく男を発見して、なにこのリア充、爆ぜちまえばいいのに！ って思ったんだよ？」

「デレデレしてねえし……」

「でさ、家帰つてからアレは比企谷君だつたんだ！ つて気付いてね、次の日悶々としたまま学校行つたら、なんと教室で折本さんが超楽しそうに比企谷君の話をしてたわけよ」

「は？ アイツ教室で俺の話なんてしてんの!?」

「そうだよ？ 比企谷つて超面白いんだよねー！ つておつきな声でねつ。

あ、でも決して馬鹿にしてるとかそういうんじゃなくて、褒めてるつて意味でね？」

「なにしてんだよ……あの馬鹿……」

あはは、超嫌そう！ ちょっと赤くなってるし。

……友達になりたがつてるとか、あわよくば彼女に……なーんて事は言つてやんないけどねつ。

「だから私さ、どうしても比企谷情報が気になつちやつてね、そつからは毎日ストーカーの如く折本さんを付け回したりしちやつてねつ！ ふふつ」

「ふふつじやねえよ。そしてなんで俺情報なんて気になんだよ……」「……そ、そりや気になるに決まつてんじやん……助けてくれたのが……あの比企谷君なんだからさ……

……つ！ そ、そんな事よりつ！」

くうつ……顔が熱いつ！

誰も居ない冬の夜の教室なんてメチャクチャ寒くて凍えてんのに、

なんだか身体の奥からカツカしてきちゃつたじやないっ……！

「と、とにかくねつ？……まあそんなこんなで、ずっと学校でぼつち道を邁進してきたこの私がですよ？」

なんと折本さんに話しかけちゃつたワケなんですよ！」

「……で、あんなに仲良くなんて無いしつ！」

「いやいや、別に仲良くなんて無いしつ！」

折本さんは单なる友達未満なんだからつ……」

……なんか私つて、ここら辺が比企谷君が自分はリア充じやないつて言つてるのと同じような匂いがしますね……

「で、まあ今まで散々小馬鹿にしてたりア充つてヤツとちゃんと真正面から話してみて、色々と思う所があつて、そして今日こうして比企谷君に会いに来たワケなんだつ……」

「…………よく分からんが、そうか……」

「うんつ……」

そつと瞳を閉じる。今日の出来事を思い浮かべるようだ。

「ふふつ、会いに来たら來たで、これまた色んな事があつたなあ。

校門ではハイパーリア充軍団に絡まれてウザイわ比企谷君に無視されるわ、ようやく比企谷君とお話出来たかと思つたら、最悪な連中に絡まれて泣きそうになつて…………んで、比企谷君にまた助けられてつ……

つたくう、結構きゅんつ！ときちやつたんだからね！……乙女心なんて無くしたものかとばかり思つてたのに、まさか数年ぶりのトキメキがあの比企谷君にだなんて、一生の不覚だわつ？」

「…………へ？」

あわわつ……つ、つい余計な事までペラペラとおつ！

ま、まだそこまで言うのは早いんだつての！

「や、やー！そそそそれはともかくとしましてねつ!?」

「お、おおおうつ……」

ぐうつ……し、しくじつた……

とにかく落ち着くように、私はすーはーすーはーと深呼吸をした。

そしたら比企谷君も顔を赤くして深く息を吐いていたのを見て
ちょっとだけ微笑んでしまった。

「そ、そういう事がありましてですね？」

……そしたら今度は尾行してきた美少女達にしーちゃん達が始末
されるわ私も始末されかけるわ、さらに折本さんに落ち掛けた気持ち
を掬い上げてもらうわと色々あつてさ……

そんなこんなで私は思つたワケなのですよ」

今から大事な事を言いますよ?と、コホンと咳払い。

「人間不信とかなんとか言って、一人で孤高のぼっちは気取つてきた
けどさ、結局悪いのは自分なんじやん!つてさ。

私を人間不信してくれた人達は、単に上つ面で皆に笑顔を振りま
いてた私に寄つてきただけの偽物だつたんだなつて。

不信もなにも、最初から信用なんて一つもしてないし信用されても
いない薄っぺらい間柄で、不信もなにもあつたもんじやないよね。

人と関わる事を拒否してきた私が、比企谷君に偶然再会してからの
たつた一週間やそこらで関わつた人達は、私が勝手に裏切られたと
思つてた人達とはなにもかもが違つてた。

折本さんも仲町さんも、葉山君もいろはすちゃんも、雪ノ下さんも
由比ヶ浜さんも…………そして、比企谷君もつ……

「…………」

「だからさ、もう一度、私は人と関わつてみようかな?つて思つたの。
思えたの。

全部、比企谷君のおかげっ

にひつと笑顔を見せると、比企谷君は予想通りのことを言う。

「なに言つてんだ。俺はなんもしてねえよ」

「言うと思つたー。でもいいのつ!

比企谷君はなんもしてなくたつて、私が勝手にそう思つて、勝手に
感謝して勝手に満足してんだからつ

「……へつ、そとかよ」

「うん!そうだよ」

照れくさそうに頭をガシガシと搔いている比企谷君のお腹に、と

りやつとパンチを入れてやつた。

素直じゃない比企谷君に對してのお仕置きね。

痛くもないくせに「痛てーなあ」とお腹をさする比企谷君に、もう一度しつかりと向き直る。

「で、でね? もう一度やり直してみようと思ったから……」ここに来たのつ……

ここは私が間違えちゃつたスタートの場所だから……ここから新しくスタートしたかつたの。だから……

——比企谷君……今から言うこと、聞いて欲しい……

心臓が破裂しそうな程の激しい鼓動。

真つ赤に燃え上がつてるであろう、熱い熱い顔。

息が苦しくて苦しくて、今にも過呼吸になつちやいそう。でも……たぶん私はこれがしたかつたからここまで來たんだ。なんでここまでして比企谷君に会いたかつたのか分からなかつたけど、たぶん今の為に私らしく無い事までして比企谷君に会いにきたんだろう。だから……あともうちよつとだけ頑張れ私!

※※※※※

今から言うこと、聞いて欲しい——そう宣言したくせに、私は極度の緊張で何も言いだせない今までいた。

思えば、私つて今まで告白とかしたことあつたつけ……?

現実逃避をするように過去の記憶を手繰りよせたけど、やつぱりそんな記憶はどこにも無かつた。

うひく……、こんなに緊張するもんなんだなあ……今からする告白は普通の告白とは違うから、まだ気持ち的には楽なハズなのにね。今まで告白してくれた男子の皆様、軽くあしらつちやつてごめんなさい。

聞いて欲しいと宣言してからどんくらい経つたのかな。なんかもう極度の緊張で時間感覚が麻痺しちゃつてるから、イマイチよく分からない。情けなさすぎるから、実はあんまり時間経つてないといいんだけど……

よし！覚悟を決めるぞ！私！比企谷君は私の言葉を待ってくれてるんだ。

私は居住まいを正し、ずっと俯いていた顔を比企谷君に向けた。うう……格好悪いな……絶対に真っ赤だよお……涙がたまつてんのもバレバレだよね……？

でもつ……スカートをギュウツと握り締め、そんな情けない目を、情けない顔を比企谷君から逸らさないように踏ん張つて深く深く息を吐き、そして私はついに言葉を絞りだした。

※※※※※

「あ、あのさ、比企谷君つて、好きな人とか居るの？」

「……………は？」

心底唖然とした様子で聞き返してくる比企谷君……いや、そうなるのは分かつてましたけども……

一発目から心が折れそうになっちゃつたけど、でも負けるか！

「ん！んん！……あ、あのさ、比企谷君つて、好きな人とか居るの？」

「…………いやだからなんでだよ」

「あのさ、比企谷君つて、好きな人とか居るの？」

「え？なに？壊れちゃつたの？」

「…………あのさ」

「わあつたよ…………べ、別にそんなん居ねえけど」

ようやく進めたあ…………何回恥ずかしいこと聞かせんのよつ……

「いやその答え方は絶対居るつて！誰？」

「…………は？いや、どちら辺にそんな要素あつたの？」

「いやその答え方は絶対居るつて！誰？」

「なんなの？ローラ姫なの…………居るつて言わないと先に進めないの？」

「…………いやその答え……」

「くつ…………い、居なきけど…………居る」

「じゃ、じゃあ誰か教えてよ…………！ヒントだけでもいいからつ……じやあイニシャル、イニシャル教えて。苗字でも名前でもいいから、

お願いつ……

——そこまで言うと比企谷君はハツとした。

「二宮……これって……」

ふう……ようやく気付いてくれたかあ……

そう。これは……あの日のやり直し……

私が間違ったやり方で比企谷君を勘違いさせてしまい、恥ずかしい思いをさせてまで告白擬いみたいな事をさせてしまい、そして私が間違つたやり方で振つてしまつたあの日のやり直し。

私のせいで間違えてしまつた私の青春ラブコメを取り戻すのならば、ここをキチンと精算しなければなんにも始まらないんだ。

だから……今度は私が今この場所で、今度は私が好きになつちやつた比企谷君にバツサリと振られる番なんだよ。

「イ、イニシャルでもいいからつ……」

「……そうか。分かつた。…………ふう。」

うーん、それならいいか

「マジで!? やたつ！ で、イニシャルは？」

「……くつ……！ わ、YかI……？」

「…………ええー……？」

いやいやちょっと比企谷君!? な、流れからしてそこはMとかじや無いの!?

「え、いや、だつてMじや無いし」

「信つじらんない！ そこでMつて言つてくんつきや次に進めらんないじやんつ！」

もー！ 最初つからやり直しー！」

「マジかよ……」

それになにちやつかりと好きな人の候補を複数にしちやつてるんですかねこの人は……

つたく……！ 明らかにYは雪ノ下か由比ヶ浜、そしてIはいろはすじやないのよつ……

そ、そりやその好きな人つてのが私の可能性なんて元々ゼロだけどさつ!?

だだだだからって、先に違うイニシャル聞いたやつてから、もう一回今のはやり直しつて、それなんて拷問？

ちくしょーーーこうなりやヤケよヤケ！見事に散つてやるわよつ！
「はあああああ～…………あ、あのさ、好きな人とか居るの？」

「そんな深い溜め息吐かれても……居ないけど」

「いやその答え方は絶対居るつて！誰？」

「……誰だと思うんだ？」

「わかんないよー。ヒントつ！ヒントちようだい！」

「ヒントと言われてもな……」

「あ、じゃあイニシャル、イニシャル教えて。苗字でも名前でもいいから、お願いつ

「うーん、それならいいか」

「マジで!? やたつ！で、イニシャルは？」

「…………え、M…………？」

「え……それつて……私？」

「え、何言つてんだそんなわけねえだろ、何、え、マジキモいわ。ちょっとやめてくんね？」

「………………ちょ、ちょっと比企谷君!! い、いくらなんでもそこまで再現するとか酷くない!?

さすがに乙女に対してもキモいは言い過ぎでしょお!?」

「…………お前がやれつたんだろ…………」

「…………」

「…………ふつ…………くくくくく！あはははは！」

アホな茶番劇をやり終えて、言い合いながらお互いに顔を見合わせてたら、なんだか二人して笑いが込み上げてきちゃつて、それからはしばらく机叩いたり床叩いたりして笑い転げてしまつた。

「…………ひいいくつ…………ふくくつ…………わ、私達なにしてんの…………つ？」

「くくつ…………お、俺が聞きてえわつ…………」

散々笑い倒してようやく落ち着いてきた。

私は笑いすぎて流れてきてしまった涙を指で拭いながら溜め息を

吐いた。

「あ～あ！人生初めての告白だつたのに振られちゃつたあ！」

「……へ？今のつてただの芝居なんじやねえの？」

「……はあ？んなワケ無いじやん！本気に決まつてんでしょっ！」

あの日を精算したくてこんな恥ずかしいマネしたのに、ただの芝居なんかじや意味ないじやない！」

「……あのな、良く分からんけど、そんなのただの勘ち…」

「ちよつと比企谷君!?二年もぼつちしてきた私をナメないでよね。

なんでもかんでも勘違いで誤魔化そうとするのは期待したくない
ぼつちの悪い癖つて分かつてんだからね？」

それを踏まえた上での私の告白を、勘違いだなんて言わせてやんな
いよ？」

「そ、そとか……いや、その、なんだ……了解した」

ちよつとお！……せつかくバツサリ振られてスッキリしてたから
こそ、恥ずかしい台詞をガンガン言つてられたつてのに、そんな風に
照れられたら……わ、私だつてまた恥ずかしくなつてきちゃうじやん
かよおつ……

「こほんつ……！じ、じゃあ晴れて私もキチンと振られたつてことで、
比企谷君に改めてお願ひがありますつ」

「……は？まだなんかあんの……？」

んー、まだあるというよりは、100パー振られるつて分かつてた
事だからこそ、寧ろこつちが本命かもね。

私はまた顔を真つ赤に染め上げスカートをギュッと握りながら、比
企谷君にペコリと頭を下げると右手を差し出す。

「比企谷君つ！せめて、まずは友達になつてくださいつ！」

うひや！せめて、まずはとかつい本音が出ちやつた！

「え、嫌だけど」

ええええ……

「ええええ……な、なんで!?」

「いやだつてほら、俺、友達とか居ねえし」

「だ、だから私ととりあえず友達になろうよつ！」

「とりあえずなるもんでもねえだろ……てか友達付き合いとか面倒臭えし」

そんなに面倒くさがらなくたって良くない!?

くつそうつ!私、今へタしたらさつきの茶番告白の時よりも恥ずかしいつていうのにい!

こ、こうなつたら最後の手段つ!

「比企谷君つ!お願い……」「宮美耶復帰第一号の友達は絶対比企谷君に!つて決めてたんだよーっ……」

瞳を潤ませて上目遣いでのお願いつ。

「……おい……あざといキャラに戻つてんぞ」

「……はつ!」

「はつ!……じやねえよ。

つたく、大体お前あれじやねえの?折本とかなんとか町さんとかと友達なんじやねえのかよ」

「違うつてば!折本さん達はまだ未満だから未満! てかなんとか町さんつて酷くない!」

するとチツと舌打ちしながら面倒くさそうに頭をガシガシと搔く。でもちよつと恥ずかしそうに頬を染めながらそっぽを向くと、とつてもどつても遠慮がちに、恐る恐る私の右手を握つて握手をしてくれた。

「しゃあねえな……言つとくけど友達なんて他に居ねえから、友達付き合いとか良く分からんからな」

そんな超熱くなつちやつてる遠慮がちな右手を見て、私はなんだか嬉しくてふつと笑顔がこぼれてしまった。

だから私は遠慮がちなその右手をギュッと握り返して、嘘偽りの無い今の想いを比企谷君に告げたのだつた

「えへへ、やつたあ!

えつと、今後ともよろしくお願ひしますつ!」

こうして私、二宮美耶は、晴れてぼっちを卒業したのでした!

比企谷君も、もう自分をぼっちだなんて思ってないといいなつ。

——本当は分かってる。こんなのは、私の単なる独り善がりに過ぎない行動なんだつて。

私は比企谷君が好き?
うん。それは間違いない。

ずっとずっと心の奥底でモヤモヤしてた、あの辛そうな苦笑いをする比企谷君の、実は結構格好良いこととか、実は優しいこととか、実は笑顔が意外と素敵なことか一杯見せられたり、心が本当にヤバい所を二度も助けてもらっちゃつたら、いつの間にか好きになっちゃつてた。

でも、それはまだ大好きとか愛とかつて呼べる程のモノでは無くて、惹かれ始めてるつてレベルの物だろう。

あの日を精算?

まだまだ惹かれ始めてるつてレベルの状況なのに、あんな予定調和で振られただけつて程度で精算なんて出来るはず無いじやない。
アレで精算出来るつていうんなら、私のこの黒歴史な四年間はなんだつたの? つてお話だよね。

そして私なんかよりも遙かに苦しんだ比企谷君に失礼だ。

でも…………だからと言つて悔やんだまま足踏みしてたつて仕方ないじやん!

だつたら、まだまだ私の独り善がりな欺瞞でしかない行動かも知れないけど、それでも私はゆつくりでもいいからここから始めて行きたい。

もちろん比企谷君だけの話つてだけじゃ無くて、明日からの学校生活にも、折本さん達との関係ともちゃんと向き合つて行こうつて思つ

てる。

今はまだ私のワガママによる嫌々な友達関係かも知れないけど、それが嫌々じや無くなつて本当の友達になれた時は、独り善がりでも欺瞞でも無くなるんだから結果オーライだよね。

まあホントは友達以上の関係になれたりなんかしちゃつたら、より結果オーライなんですけどもつ。

でもまあそれはまた別のお話！

そんな先の未来の話じやなくつて、今思う事はもっと単純な事。目の前で握手している照れくさそうな顔してる男の子を、同じく照れくさそうな笑顔で見つめながら、私、二宮美耶は思うのです！

まちがつてしまつた青春ラブコメを取り戻すのに手遅れなんて事は無い！

寧ろここからバンバン取り戻しちゃうまであるんだぞ！って、ねつ。

終わり

【後日談①】心はまだまだぼつちを卒業できないようです

ぼつちの朝は常人よりよっぽど遅い。

なぜなら部活動など当然やつてるワケがないし、教室に早く到着しても話し相手も居ないから、ただただ気まずいだけなのだ。つまりぼつちにとつては朝のS H Rが始まるギリギリに教室に入る事こそが絶対的正義と言える。

……などと冒頭から捻ねた態度を取つてゐる時期が私にもありました。

私力コイイ！とでも思つてたのかしらね、あの頃の私。

あ、時間軸的に言えば昨日でしたソレ。嘘でしょ昨日なの！？

たつたの1日——なんか数ヶ月前の出来事みたいな氣もするけどそれは間違いなく氣のせいのはず☆——で、昨日の自分を過去の黒歴史とバツサリ切り捨てられるのはなぜかつて？

それは…………ふつ、私がついに昨日ぼつちを卒業したからに他ならない！

さよならぼつちな美耶ちゃん。ここにちはリア充美耶ちゃん。

そう！私はこれから青春を、友達の比企谷君と一緒に、手と手を取り合つて素敵なリア充生活を送つていくことをここに宣言するのである！

※※※※※

そんなリア充な私は、なんと今日、この二年近く通つてきた我が高校の、これまた一年近く通つてきた我が教室に、いつもよりも30分も早く到着しちゃつたのだ。

やつぱりア充つつたら、朝のS H Rまでの貴重な時間を友達とうえいうえい面白可笑しく過ごすつてのがデフォオじやない？

私知つてるよ？だつて昔経験済みだもの！経験済みとかちよつぴ

り卑猥つ。

そして私は扉を開く。教室の……そしてリア充な未来の扉をつ！
おはようみんな！リア充美耶ちゃんの到着だよつ？

扉を開けた私に、何人かのクラスメイト達からの視線が集中する。
ふふつ、普段こんな時間に居るはずの無い私の登場にみんな驚いて
いるのね分かります。

…………えつと…………その…………べ、別にそこまで注目しなくなつてい
いのよ？みんな。

た、たかだか私ごときがちよつと早めに登校してきただけじやない
……！

…………やめてっ！見ないでっ！？ぼつちにとつて大勢からの視線
の集中つてのは何よりの拷問なのよ！ああ……顔が火照つていく
……なにこれもう帰りたいつ！

ぼつち卒業したんじやないのかよ。さつきまでの無駄なリア充自
慢の尺返せよ。

いやいやそりや無理つてもんですよ。だつて卒業したつて言つ
たつて、つい昨日卒業したばかりのペーペーなんですもの。若葉マー
クだよ、仮免だよ。

仮免じやまだ卒業してないね。てへつ。

そもそもなんで私つてばリア充気取つて早く登校とかしちやつて
んの？よくよく考えたら、私つて友達比企谷君だけじやん。

しかも比企谷君はうちの生徒じやないんだし、…………あ、あれ？
結果的に私つてぼつちのままじやね？

やべーわ……昨日の比企谷君とのやりとりで浮かれすぎて自分を
見失つてたわ。

なんか無駄に張り切つて早く来ちゃつたけど、私ここではぼつちな
ままだつたわ（白目）

大体浮かれすぎてって言つても、昨日のアレ（恥ずかしすぎる告白↓即玉碎↓泣き落としでギリギリ友達おつけー）で浮かれてる私もどうなのよ……

ああ……なんかもう昨夜みたいにベッドに飛び込んで悶えたくなつてきちゃつた。やっぱり昨夜は悶えちやつてたのね。

クラスメイトからの視線に我に返つた私は、その好奇の視線から逃れる為にすぐさま机に突つ伏すのでした。

やめてもう見ちゃいやん！

おつと！

あまりの無慈悲なクラスメイトからの視線に動搖して、この場所にも友達（未満）が二名ほど居たことをすっかり失念しちやつてましたよ。

まあその友達（未満）な二名は、きのう面白半分悪ふざけ半分でコツソリ私をストーキングしてきた困つたちやん達ではあります。

面白さと悪ふざけが半分ずつって、それもう百パー遊びじゃないですか。なんなの？ 実は私つていじめられてるのん？

まああの人達……というには常識人の方に失礼か。

あえて名前は出さないから誰のことか分からぬかもしれないけど、あつちのウケる人の方はいじめとかに無縁の自由人。それありますよ！

だから、ウケまくりそれある娘にとつての私は、わざわざストーキング行為を行つてまでも気になる存在と言つても過言ではないはず。よし！ せつかくこれから青春を取り戻そうと張り切つている私は、こんな風に人の目をしてうずくまつている暇などないのでありますよ！

であるならば私は今日…………！ 友達未満も卒業してさらなる友達作つちゃおう！

世に言う友達ツクールである。世に言わないね。ツクールのはRGくらいのほうがいいね。

そして私は立ち上がる。美耶、大地に立つ！

あ、ここ二階なんで厳密に言うと大地では無いんですけども。まあガンダムが初めて立つちしたのもコロニー内だし、そこら辺はノーカンてことでオナシャス。

……つておい！クラスメイトの方々、すでに私なんて見てねーじやん。飽きるの早すぎイイ！

でもこれから私の行為で、また確実に注目集めちゃうんだろうなあ……

でもまあしゃーない！青春を取り戻す為ならば、いくらでも恥くらいかいてやんよ！

私は、もう誰一人として私を見てないのをいい事に、コツソリとてとて友達（未満）へと歩み寄る。

思えば、この学校に通い始めて、私から挨拶に赴くのなんて初めてのことでは無いだろうか？

い、いや、ベベベ別にさ？きつ、緊張なんてしてないのよ？そつ、それはもう全つ然！超冷静、超クール。

そして私は大人で優雅なレディの如く、余裕すら感じさせる程の落ち着き払つた所作で、海浜総合人生初の朝のご挨拶を敢行するのであつた。

「…………おおお折本さん仲町しやんおはようごぜーましゅつ…………」

……さあ、どうやつて死のうか……

※※※※※

「…………くくくくくく…………ぶつ！…………ふ、ふひひつ…………」

「ちよつとかおり！あんたいい加減許してあげなよー…………」

「…………だ、だつてつ…………ぶひゅつ…………、ごぜーましゅつて…………ぐつ…………ぐふつ…………！」

私は今、即座に引き返したマイティリトリーにて、制服の裾を涙に濡らしながらぷるぷると突つ伏している。
もうやだもうやだもうやだよう……！

そんないつ命を絶つてもおかしくない私の横で、折本さんは噴き出すのを堪えて悶え苦しみながら私の背中をバンバン叩いてる。痛い。痛い。

もう5分近く爆笑してからのこれだよ？

「ふ……ごめん……ね？ 美耶つ……も、もうちよいでのな、なんとかぶつーた、立ち直るつ、からつ」

あんたが立ち直る頃には私はもう二度と立ち上がりれないわよ。

もう立ち直らなくてもいいから、いつそ私を楽にしてください。

それからしばらくののち、ひーひーふーつ、と呼吸を整え始めた折本さん。相変わらずラマーズ法最強説である。

お産の激痛＝折本さんのウケ

と考えると、やっぱ折本さんのウケってすごいわ。世界中が折本さんで出来ていたなら、ホント世界は平和そうよね。

……あー、でもうん。ちょっとウザくて五月蠅くて、私は生きづらい世の中かもね。

「ふー……おはよ！ 美耶」

あんたに挨拶してからもう10分くらい経つんですけど、今更おはようなのん？

今日び宇宙空間と地上の交信だつて時差はほんの僅かなのよ？ソースはいつこく堂。

あんたと私の心の距離はどんだけ離れてんのよ。

ちなみに仲町さんは私の席に来てくれたと同時に挨拶してくれました。ウケる人の爆笑に搔き消されてましたけどね。

「へへ～つ」

なによ……まだ笑うの……？

「美耶から朝の挨拶してきてくれたなんて初めてだよねー！」

あたし嬉しくって超ウケちゃった

あんたがウケてたのは違うところだろ。

で、でもまあ？ ちょっと声掛けたくらいで嬉しいとか言われちゃうのは、私だつてまんざらじやなくつてよ？ 悔しいから突つ伏したまま動いてやりませんけどね。

「あつ、見て見てかおり！二宮さんの耳がまた赤くなつたよー」

「なによ美耶ー。うずくまつたままの癖して、ちょっと喜んじやつてんじやーん！ウケる！」

ぐぬう……！ちょっと仲町さん余計なこと言わないでよ！なんの？二宮検定でも狙つてんの？

私、そんなに簡単な女じやないわよ！……やべー、我ながら超チョロそう……

「う、うつさいなー……もうほつといてよお」

このままじゃ埒が開かないと悟つた私はのそりと起き上がり、涙目で恨みがましく二人を睨めあげる。

「あ、やつとこつち見た。へへ、美耶おはよう」

「おはよー！二宮さんつ。ホントばかおりが朝からごめんねー」「ばかおり！なにそれウケるんですけど！」

「いやマジでうつさいからあんた」

「千佳手厳しー」

くう……やつぱ朝から挨拶なんて慣れないことするもんじやないわね。

朝イチのリア充とのやりとりのライフの削られ具合はホント半端ないわ……

で、でもまあ、さつきの挨拶は緊張で近年稀に見るほどのグダグタになつちゃつたし、もつかい挨拶してあげようかな……？

「……お、おはよ

「つ!?……きやー二宮さん、口尖らせて真つ赤な顔して「お、おはよ」だなんて超可愛い！」

「美耶つてば可愛いじやーん」

ふええ……もう恥ずか死くつてライフが持たねーよう……

——とても優しいニコニコ笑顔で照れ具合を覗き込んでくる二人に辱められながら、私はまたばつたんと机に突つ伏すのでした。

※※※※※

そして時は流れお昼時。

四时限目終了のチャイムと共に私は二人に取り囲まれた。

私の席は廊下側だから、横にマークが着いてしまつたら逃げ道がないのだ。

やだなー……こいつら超ニヤニヤしてゐるし、絶対目的は昨日の話だよー……

「おっし、お腹減つたし昼^ひはん食べようぜー」

「かおりー……だから男子も居るんだし、お腹“空いた”にしどきなつてばー」

「なんでー? 女同士で居る時は減つたつて言うのに、男の前だけ空いたとか言う方がよっぽどダメくない?」

「いやまあそれはそうだけさー……

前に葉山君達と遊び行つた時だつて、あんたの減つた発言で葉山君苦笑いしてたじやんよ」

「そうだつけ? でもそれは葉山君に器量が無いつてもんだつて。

男の前だけでも上品な言葉遣いを求めるなんて、それ完全なる男のエゴじやん。

まだまだ女つてもんを分かつてないよねー。

むしろわざとらしく女を飾らないあたしを見ろよつて感じ

お?なんか話逸れまくつていい感じじゃない?このまま逸れててくれれば、昨日のことに触れられずに済むかも?

……にしても。やっぱり折本さんてこういうトコ好感持てるかも。あのリア充王子の前でもこんな碎けた態度がとれる女子つて、なかなか居ないんじゃない?

私も、まだ友達(偽)に囮まれて“可愛い私”を演じてた時代は、あたりまえのように可愛らしい言葉遣いを選んでたけど、今となつてはそういうのつて薄ら寒く思えるもん。

男の前でだけクスクス笑つて、女同士だとギヤハハと笑う女を散々見てきたもんな。

……あれ?意外と私つて折本さんのこと好きじゃね?

「あ……私は結構その気持ち分かるかも……」

「お!まさかの美耶が参戦!」

「意外ー!二宮さんて、どつちかつて言うとかおりの逆タイプかと

思つてたあ

「……う、うつさいなあ……いや、ホラ、私も昔はそうやつて自分を飾つてた頃があつたからさ……」

なんか、男子の前だからつて飾らない女の子の方が、ずっと信頼できるかも」

「だよねー！やばい、美耶に肯定されちゃつたよあたし！マジウケんだけどー！」

「いや……でもさすがに折本さんは碎けすぎでしょ……」最早碎け散つちやつてるレベル。あなたの場合はもうちよつとだけ飾ろうよ……

「だよねー」

「ヤバいいきなり裏切られた！ウケるつ」

ホント五月蠅くてかなわんなく、この人たち。

でもまつ、なーんかこういう飾らないガールズトークもたまにはいつか。

ふふつ、なんかいいな、こういうのつて！リア充生活つてのも悪くないかもつ！

——そんな気持ちが、私を油断させてたのかも知れません……

「……あ、あれだよね。確かにあのなんかキラキラした人なら女子にそういうの求めそうだけど、比企谷君なら飾らない女の子を求めるそうだよね。

でも実は「こういうところで恥じらいを見せる女の子つてのもおじさん的に好みだけどなつ」とかニヤニヤしながら思つてそう

「ウケる！ホントそれつ」

「あ、わたしもちょっと分かるかもー」

……お、おおつ……！なんか私つてばリア充のガールズトークに馴染めちやつてる上に、なんか話題を提供しちやう大活躍を見せちやつたよ！

でも……あれ？なんか失策があつたような……

「ひひっ、にしても……なあに？ 美耶ー。美耶の頭ん中には比企谷のことしか無いのー？」

まさかこの会話の流れからわざわざ比企谷出してくるとは思わなかつたよ」

……あ、し、しまつたあ！！

せつかく話が逸れてたのに、気付かないうちにわざわざ比企谷トーグをセルフプロデュースしちゃつてた……！

「ち、違くて……だつて！……その葉山君と遊びに行つた時つてのは、ひ、比企谷君も一緒だつたつて聞いたから…」

「まあまあかおりー、そうやつて二宮さんをからかわないので！」

ホントは二宮さん、あれからの話したくつて堪らなかつたんだよねー？」

「それあるー！」

ねーよ。

ぐぎぎぎ……二人して超ニヤニヤ見てくるんですけどつ……

「じゃあ仕方ないなー。わたし達がちゃんと聞いてあげるからあ……」

「あのあとのこと洗いざらい話しちゃいなよー、美耶ー」

「ほれほれー」「……う、うー……」

「そんなこと無いのにつ！ 恥ずかしいから話したくなんか無いのにつ！」

「…………でも、ホントはちょっと誰かに話したかったのかもしれないな。自慢にもならないようなあんな情けないお話を誰かに自慢しだくつて。

も、もちろん告つちゃつたことは、こいつらなんかに絶対言えませんけどね！」

つづく

【後日談②】元ぼつちは卑猥な目に合わされる

「と、と……ちに……た」

「……へ？」

「だから……もだち……なつたのつ……」

「二宮さん？全つ然聞こえないよ!?」

「ちよつと美耶？もうちよいボリューム上げてくんない？」

「……だーかーらー！と、友達になつたんだつてばつ！」

「……はい？」

「友達になつたの！私と比企谷君！」

たぶんこれから二人の激しい追求があるであろうことを見越した私は、によによする二人に開口一番メインディッシュを食らわせてやつたのだ。

いや、それは本当のメインディッシュを隠すための大盛りオードブル。おいおい、こんなに前菜ばつか持つてこられちゃメインまでお腹が持ちませんよシエフ。ってな具合の為の撒き餌。

だつてさ、いくらなんでも告つちやつたことなんて言えるわけないですもの。無理ゲー無理ゲー。

「ホントにー!? 良かつたじやん二宮さん！」

上手い具合に食い付いてくれた仲町さんは、私の発言に手放しで喜んでくれた、のだが……

「……うつそマジで……？」

ちょ、ちょーウケる……」

と、折本さんはウケるつて台詞とは裏腹に全然ウケてはいらつしやらぬいご様子。

あれ？絶対に、ウケるそれあるウケるそれある祭りになるかと思つてたんだけどな。

「あ……れ？かおり？あんた珍しくウケないの？」

「……え？……は？」

い、いやいやいや、ちょ、超ウケてますけども？」

どのへんがだよ。なんか笑顔が引きつりますけど？あなた。

「…………くつ…………」

くつ?

折本さんはその引きつつた笑顔を俯かせ、ふるふると震えだしたかと思つたら、次の瞬間には急にガバアツつと凄い勢いで詰め寄つてき
た。

ホント忙しい人だなあ。

「嘘嘘嘘！全つ然ウケない！」

くつそお！美耶に先越されたあ！」

ああ、悔しかつたんですね……ふふふ。

※※※※※

うがーつ！と全身全靈で悔しがる折本さん。あらあら、そんなに悔
しいのん？

「ちよつとかおりー……。せつかく二宮さんが大好きな比企谷君と友
達になれたつて喜んでんだからさー」

ちよつと待つて？大好きなどか余計な一文入れなくたつてよくな
い？

「ぐぬぬつ……そ、その点に關しては嬉しいんだよ？嬉しいし良かつ
たじやんて言つてあげたいんだけどー……

ぐう……でもまさかたつた1日で先越されちゃうとは思わなかつ
たあ！」

……てかさ？あんた悔しがつたり友達になられちゃうとは……と
か言つてつけどさ？

あんたが私を比企谷君の元に行かせたんすよね？私、あんたに言わ
れなかつたら行つてないかんね？

「……あ、あのさ折本さん……？目えキラキラさせて行つてこい行つ
てこいと自分で言つといて、友達になれると思つてなかつたつてヒド
くない……？」

マジ最悪だなこんにやろめ……と、半目になつて睨んでやると、こ

いつはあつけらかんとこう宣う。

「だつてさ、比企谷だよ？比企谷。

あたしてつきりさー、もし美耶が「仲良くして欲しい」みたいなこと言つても「いやなんでだよ。やだよ面倒くせえ」とか言つて断るもんかと思つてたからさー」

ひ、ひでえ……あれだけ押せ押せムードで私をけしかけといて、断られる前提だつたのかよ。

「でもそれは比企谷のことだからどうせ単なる捻くれじやない？」

ホントは自分だつて仲良くしたい癖に意固地になつちやうつてヤツ？

だからそこを利用して、ホントは仲良くしたいとか思つてる比企谷を美耶で釣つて遊びに連れてつたりして、そのままあたしも一緒に友達になつちやえればいいんじやん？とかつて思つてたのにさー」

こ、このアマ……！私を捨て駒にしてから、尚且つ餌にする気だつたのかよこんちくしようつ！

……ま、そうでもしないとあの捻くれ者の比企谷君は、自分どころか私とも仲良くなんてしてくれないつて思つたんだろうけどね。

それからも腕を組んでんーん一唸つてた折本さんだつたんだけど、なぜかふつと笑つたかと思うと急にニカツと私を見てきた。

「んー、ま、いつかー！めでたいことはめでたいもんねー。やっぱちよつと悔しいけどさつ。

ひひつ、美耶おめでとさん！」

つたくこの女はマジ自由人だな。

ふふつ。ま、こんなんだから私を受け入れてくれたんだろうけどさつ。

でもね？あなたはひとつ大きな勘違いをしてますよ。

だから私はその勘違いを訂正すべく、まるで鼻で笑うかのようなどても冷めた態度でこう言つてやるのだった。

「……べつ……別に大しておめでたいことなんてないしつ……」

「真つ赤な顔でニヤニヤしてなに言つてんの？やばいこれがツンデレつてやつ！ウケる」

うるせーよつ。

※※※※※

「でさでさ！」

なんだよ……折本さんの楽しそうな表情つて、不安感しか生まれないから凄い。

「あの比企谷をどうやって口説き落としたの？」

「……口説つ!？」

ちよつとまるで私が交際を申し込んでOK貰つたみたいな言い方やめてもらえませんかね。

交際申し込んで振られてますんで私（白目）

「だつてさー、あいつ確かに中学の時より超ウケる奴になつてていい感じだけどさ、それ以上にめんどくさい奴になつちやつてんじやん？どうすればあいつと友達になれたのか後学の為に教えてよー」

い、いやー……あれは参考にならないっすよマジで。

「絶対に並大抵じや折れないだろうと思つてたから、美耶が断られんの織り込み済みの上で、二人がかりで落としてやろうと昨日遊ぶ約束取り付けたのになあ」

……ん？約束なんか取り付けてたつけこの人？

と思つたんだけど、そういうや昨日……

『じゃーねー！』

あ！比企谷ー、今度どつか遊びに行こうよー』

『なんでだよ行かねえよ』

『いいじやん、ケチー！んじや約束ね！』

『勝手に約束取り付けんな』

……いやいや、どう解釈しても有無を言わさず断られてたでしょ。

うつそ？リア充の中ではアレで約束のOKサインと取られちゃうの？

やつぱリア充つですげーわ。

「……かおり、あんた超嫌がられて断られてたじやん……」

「え？あれって断られてたの!?ウケる」

すげーのはリア充じやなくて折本さんだけでした。

「あははー、どんまいどんまーい！」

どこにも D o n , t M i n d の要素がねーよ。あんた少しばかりしろよ。

「ま、それはそれとしてさー、どうやつたの!?」

「……え、い、言わなきやダメなの？」

「まあもちろん強制はしないけど、ここまで来たら言つちやいなつて！」

「言わないんなら言わないで、今度本人に直接聞いてみるけどさー」「やめてっ!!」

「あんたそれを強制つて言うのよ？ 知らなかつた？」

アレ（告白）を抜いたとしても、とてもじゃないけど本人に問いただされるとかあり得ない。それなんて拷問？

ぐつ……ならば言うほか無いというのか……まあ比企谷君も答えないとは思うけどもつ……

「な……」

「な？」

「……な、泣き落とし……的な……カ、カンジ？」

「……は？」

「だ、だから……泣き落とし……たのよ。

……もちろん最初は「なんでだよやだよ」つてバツサリ断わられたけど……

そのお……な、涙目になつて上目遣いで……、「お願ひ、二宮美耶復帰第一号の友達は比企谷君がいいの」……つて……

ぐおお……こ、これは想像を遥かに超える恥辱つ……！

比企谷君本人に問いただされたら嫌だなつて思つたから仕方なく答えたけど、どつちにしろ地獄でした。これはマジやばいい！

私は顔の……全身の熱さに耐えきれなくなつて、再度ばつたんと大好きな机ちゃんへとダイブする。もう私の味方はお前だけだよ机く！ご主人様を慰めておくれよう！

そして、昼休みが終わるまでの間は決して顔を上げるまいと心に決めていた私の頭上で、ガツカリとした折本さんが仲町さんと言葉を交

わす声が聞こえたのだつた。

「……あたしがソレやつても無理だよねー……どう考えても」「かおりがソレやつたら最早ギャグにしかなんないもんね」

「それある！」

「……あんたちよつとは心折れなよ……」

すいませんね、最早ギャグにしかならないような事を全力でやつた上に心がバキバキに折れちやつて。

あー……早く昼休み終わんないかなー……制服の袖が水分過多になつちやうよ。

※※※※※

その日の放課後。私はまたもや取り囲まれていた。

てかさ?なんでHR終わつた瞬間にはすでにがつちりガードされてるのん?

あなたたち、HRの最中からほふく前進とかで誰にも気付かれないよう私との距離を縮めてきてるのん?

スネークだつて気付かれる程の高難度ミッショント?あなたたちはきえさり草も無しにエジンベア城に潜入出来ちやうくらいの潜入者なの?

「ねえねえ美耶ー」

「……な、なんでしようか」

「今日つてさ、これからどーすんの?」

「こ、これから……?」

な、なんのことでしようかね。

「トボけないトボけないつ。だつて美耶さ……
やだやめてつ!」

「今日、雪ノ下さん達から呼び出し食らつてんじやーん」

「」

折本さんの口から放たれた、良く聞き取れなかつた謎の言語を聞いた私は、そつと視線を逸らす。

「あ、超目え逸らした、ウケる!美耶ー、現実見たほうがいいよー」

やめて現実を直視させないで!ずつと現実を見ないようにしてた

「……や、やつぱり行かなきゃダメかな……」

そもそも行く義務とか一切無いんですね、この案件。

べつに雪ノ下さん達とか、私と一切関係ないしー？

ピーと口笛でも吹き出しそうなくらい現実から逃避していると、折本さんが核心を突いてきやがりました。

「まあ実際行く行かないは美耶の自由だけど、行けば今日も友達の比企谷に会えるんだよ？」 友達の

そう友達を強調する折本さんは、やつぱりまだ悔しいんですね。悔しいのう悔しいのう！

にしても……実際そうなのよね。

今日の半強制呼び出しには応じたくない私なんだけど、その一方で今日も比企谷君に会えるのかと思うとワクテカになっちゃってる私も居るのだ。

てかもうコレはぶっちゃけ友な情じやなくてLOVE入っちゃってますよね私。振られましたけど、テヘッ。

これで今日もし私バツクレたら、比企谷君が一人で針のムシロになるわけじゃない？

だつたら二人でくんずほぐれつムシロになつた方が、もしかしたら比企谷君も私に対して友な情とは違う情が生まれちゃうかも。テヘッ。

「ちよ、ちよつと二宮さん……？ 悲壮な顔とニヤニヤ顔が交互に出てきてちよつと気持ち悪いよ……？」

「ふつー・やつぱこういうトコなんか似てるよね、比企谷と美耶って。ウケる！」

比企谷君と似てるつて言われるのは万更じやないけど、顔見てウケるとか気持ち悪いとか言われるのは花の女子高生としてどうなんですかね。

「し、仕方ないなあ……ホント行きたくないけど……い、行つてこようかな……」

「おー、美耶やる気じやーん」

「やつぱ二宮さんて比企谷君大好きだよね」

「だつ、大好きとかそういうんじゃ無いしつ……！」

「はいはいツンデレツンデレ」

うぐつ……ちよつともうなんなんですかねこの人たち。

「てかさー、美耶が比企谷が大好きなのは分かつたけどさ」「だからそうじやないのよ？と何度も言えれば……」

「そんなにＬＯＶＥなのに友達でいいの？」

「……へ？」

「だつて、これから更に比企谷大好きつ娘たちが居る巣窟にお呼ばれなわけじやない？」

それ以上の関係になんないと心配じやん」

「い、いや……だからね」

「なんか今の美耶見てると、雪ノ下さん達にあてられて、今日あたり勢いで告つちやいそうに見えるんだよね」

「あー、それなんか分かるかも！二宮さんてシャイに見えて、結構行動的だつたりするもんね」

「だよねー」

なに勝手に話進めてんのよ。告るわけ無いじやない。だつてすでに玉碎済みなんだから。やだ目にゴミが。

「それはそれで由々しき事態なんだよね、あたしとしては。

ただでさえ友達として先越されてるのに、まさかの彼氏にでもなられたら超悔しいし！だつたらあたしが先に告つてみたいなー、みたいな？

ヤツバい超恥ずかしくて超熱くなつてきちゃつてるんですけど！
ウケる」

そう言つて、頬を染めてニシシと照れ笑いをする折本さん。あらやだちよつと可愛らしいじやない。

でもね？折本さん。それ今まさにクラスメイト達に聞かれてますからね？

あなたが一人で自爆するのは構わないけど、思いつきり私も巻き込

まれてるんですよ？

「べべべ別に私比企谷君の事なんてなんとも思つてないし！？」

告白なんかするわけ無いじゃん！・ただの友達だもんただの！」

「昨日カフェで比企谷に抱き付いてたくせに」

やめてえええ！

「ちよつと折本さん!? あれは引つ張たかれそうになつた比企谷君を庇おうとしただけでしょ!?」

「そのわりには比企谷に抱き付いたままなかなか離れなくなかつたー？ ウケる」

なんかによによと挑発してくる折本さん。

こいつマジ許すまじ。

「あ、あれは足が竦んじやつただけでしょお!? もうホントやだこの人！」

と、とにかく今日なんて比企谷君に告白なんてするわけ無いつての

！」

「どうだかねー」

「絶対しないもん！ するわけないもん！」

「絶対とかそんなの分かんないじゃーん。なんでそんなに言い切れんのー？」

なんだよ小学生かよこの女、しつっこいな。

そんなん絶対つて言い切れるに決まってんじやない。

「だつて私、昨日バツサリ振られたばつかだもん！」

……ふつ、どうよ。異議さえも認めない程のこの見事な論客つぶり。弾丸で論破しちゃつたよ。これ以上のQ·E·D証明終了とか無くない？…………つて、

「…………あ、」

Oh……やつちまつたああ……

恐る恐る折本さんを見ると、なんかすげえしてやつたり顔してますけど。

「やつぱりねー。なーんか隠してると思つたんだよねー。

てか美耶アクティブ過ぎウケる！」

「ウケねーよ！」

もうやだこいつー！なに私つてば無理やりハメられたの？

無理やりハメられたとかちよつぴり卑猥☆つてそんな場合じやねーよ。

目の前では、お腹を抱えて笑い転げてる折本さんの頭をスッパーンとはたいてる仲町さんといういつも通りの平和な光景。

「ちょ!? あんたやりすぎだよ…このばかおり！」

「痛つた!? 千佳それちよつと容赦無さすぎだから！」

うう……もうお嫁に行けないよう……

またしてもプルプルと顔を真っ赤にしている私に、はたかれた頭をさすりながらも折本さんはビシイツと指を差す。

「へへ～！ま、フラれちゃつたとは言えやるじやん美耶！さすがあたしの友達、超ウケる！

うつし。あの美耶がここまで頑張つてんなら負けてらんないよねー。

あたしもいつまでもウダウダやつてないでとつと比企谷に友達申請して、試しに告つてみよつかな？

ま、今日の呼び出しが無事に済んだらだけどねつ

そう言ってパチリとウインクする折本さんに、たぶん茹でダコみたいになつてているであろう私は、涙目を恨めしげに向けてこう言つてやつたのでした。

「……あんたなんか友達じゃないやい……！」

つづく

【後日談③】かしこまられる元ぼつち

「ねえねえかおりー、今度駅前に出来たばつかのクレープ屋さん行こうよー」

「それあるー！あたしもちよーとだけ気になつてたんだよねー」「だよねー」

…………。

「あ、そろそろ！駅前と言えばこないだ由香がさあ……」

「えー!? なにそれマジウケるんだけどー」

「でつしょお?」

…………。

「つてかさー、なんで美耶つてばさつきからずつと黙つてんの？ウケる」

「そうだよミヤミヤ～！ミヤミヤも交ざつてきなよー」

なんだよミヤミヤつて。あんたついさつきまで二宮さんて言つてたじやねーかよ、なんとか町さん。

…………いやいやそうじやなくつてさあ。あつれー？なんかおかしくなーい？私ついさつき絶縁宣言しませんでしたつけ？なんで普通に3人仲良く帰つてるんですかね。

「？…………てか美耶さつきからなんでぶすつとしてんの？」

「そこから!」

ちつきしょ！無視してたのに私のツツコミスキルがオートで発動しちやつたじやないか！

「やつと喋つた。ウケる」

「ウケねーよつ！」

…………あ、あのさ、私つい今しがたあなたに絶縁宣言しませんでしあつけ……？」

「絶縁宣言とかおつも！美耶面白すぎ！」

いやいや絶縁宣言に対して満面の笑顔でワインクにサムズアツ

普つておかしいでしょ。

「ミヤミヤつて唐突に意味分かんないこと言つて赤面するとか可愛いよねー」

「あなたも大概おかしいからね!? なんで二宮さんからいきなりミヤミヤになつちやつてんの!? 距離の詰め方おかしくない!?」

「ツツコミ冴え渡りすぎててちよおウケる」

「いやウケねーから!」

「なんなの? 私をツツコミマスターにでも育て上げたいの? 世界を獲らせたいの?」

「あ、そつかあーさつき比企谷に告つて振られたのが発覚しちゃつたんんですけど。現時点でもあなた達相手ならすでに結構イイ線行つちやいそ
うな

のが恥ずかしいのかー。もー、美耶つてば可愛いんだからー」

「発覚した事実じやなくつて、無理やり発覚させられた事実を問題視してんのよ!」

もうやだリア充つ……!

私のライフは対リア充耐性が無いから、ごりごりと削れるほど無いんですよ。こちとらリア充の弱パンチがかすつただけでKOなんすよ。Y o u L o s e ! O K ?

「ま、まあまあ、いーじやんいーじやーん。抜け駆けして友達にはなれただからさあー！」

てへつ、じやねーよ。てかあんたやっぱ根に持つてんديしょ。私を捨て駒に使つたくせに。

「だ、大体さあ……なんで着いてくんのよ。さつき教室で決別の挨拶したじやん……」

「決別とか重つ！ウケる」

ふええ……もうやだよう……！

「まあまあ、いいじやんミヤミヤー、友達なんだし。ちょっと駐輪場まで一緒に行くだけじやん」

「だからミヤミヤやめて！……そ、それに別に私、あなた達と友達になつた覚えなんて無いって…」

そこまで言うと、仲町さんは私の言葉を遮つてきた。ぐいぐい来るわね。

「だつてさつきミヤミヤさ、「二宮美耶復帰第一号の友達は比企谷君がいいの」つて言つてたでしょ？」

だつたらもう第一号が比企谷君で決定したんだから、友達未満？とかのわたし達が二号三号だつていいじゃーん

「ヤバい二号三号とか、あたしら美耶の愛人臭が漂つててウケる！」

うつせーわ。

「わたし、ミヤミヤの友達になりたいな……。ダメ、かな……？」

ちよつと仲町さん？潤々お目々で上目遣いとか、なんかあなた

ちよつとあざといんですけど。それズルくない？

「くくく！…………ま、まあ、し、仕方ないから…………と、友達になつてあげなくもなくもなくもない…………わよ…………？」

血を吸うわよ？

「きやー！ 真っ赤になつちゃつて超可愛いー！」

……ちよ、ちよつと抱きつかないでくれるかしら。柔らかい肉まんが二つ当たつてますんで。うん。Bの79。…………よしつ、ギリギリ勝つた……！

…………これが、私 二宮美耶もかなりの小ぶりサイズという事実が発覚した瞬間である。全米が泣いた。

「結局どつちなか良くなき分かんない上に超上から目線！ウケるつ」

ホントうつせーわ。健康的でハリのありそうな大きめの美乳は黙つて頂けませんかね。そしてあんたにや言つてねーよ。

「へへへ。よつし！じゃあ今度こそあたし達と美耶は友達つてことで！」

だからあんたには……

「ふふつ、よろしくね！ミヤミヤつ」

「…………だ、だからミヤミヤじゃないってばよ……」

べ、別に嬉しくなんかは全然無いんだけど、なんだか顔が熱くなつ

てきちやつて、俯いてセリフがゴニョゴニョしちやつた私の両脇を、ニヤニヤしながら肘でぐりぐりしてくる私の新しいお友達のお二方なのでした……。ええいつ！やめい！

※※※※※

「じゃーねー美耶ー！滅菌されちゃわないようになー」

「……ひどつ!?」

「へへつ、比企谷によろしくね！」

あ！あとさ、比企谷にいつ遊びに行けるのかちゃんと聞いといてねー。

出来れば二人がいいけど、比企谷が照れくさいって言うんなら美耶も一緒でいいからって言つといてー」

なんなの？私はオマケなの？絶対言つてやんない。てか滅菌つてホント酷すぎないかしら……。そ、そりや確かに比企谷ハーレムのあの子達にとつての私は間違いなくしつこいヨゴれなんですけどもね？

駐輪場にて解散かと思われた私達の軽快なガールズトーク（美耶は含まれず）なのだが、駐輪場で別れたのは仲町さんだけで、結局そのあとは一番うるさいのと二人で総武高校の近くまでの軽快なガールズトーク（美耶は含まれず）となりました。

すごいよね、自転車漕ぎながらずつと一人で喋つてましたよこの人。

元気に手をぶんぶん振りながらよろよろと去つていく折本さんを見送る私。……あー、ホントウザイ。付き合いきれないわよ、まつたく。

……とかなんとか言いながらも、あの子の背中を見送る目元と口元がついつい緩んじやつてる私つて、もしかしてツンデレつてやつなんですかね。言わせんな恥ずかしい。

そして私は一人キコキコ自転車漕いで、ついに魔王城の目前まで辿り着いたのです。

どうしよう。私まだ虹のしづく入手してないし、一旦聖なるほこら（愛しの我が家）に帰つてもいいですかね。私ドラクエ3好きすぎだろ。

「つはあくくく……」

眼前にそびえる総武の校舎を見上げて深々と溜め息を吐く私。つべー……夢じやなければ確か昨日も来たわよね、ここ……

しかもイケメンとか天然水に絡まれたり、比企谷君を大声で呼び止めて無視されたりと、総武生皆々様の痛々しい視線受けまくつて大恥かきまくつて、「二度と来るかあ！」と叫びかけたその翌日にまた来ちゃうとか、私つてどんだけドMなのん？実はお仕置きにハアハアと興奮しちゃうタイプなのん？

そしてそんな私の現状の表情は、二日連続でここに来てしまった後悔からくる引きつった表情と、今日も大好……友達の比企谷君に会える嬉しさからくる緩みきつた表情、そしてこれからハーレム女子に囲まれるであろう絶望からくる愕然とした表情がぐるぐるとローーーションを繰り返している。どうしよう、下校中の生徒さん達から見たら完全に変態さんじやないですかやだー。

これ比企谷君だつたら確実に通報されちやつてるところだよ。私可愛い女の子で良かつた！うふ。

さ、茶番はこれくらいにしといて、改めて校門の外から校内を見渡してみる。

——えと……こ、これどうすればいいの……？どこ行けばいいの……？来なさいとか言われたから仕方なく來たはいいものの、勝手に入つちやつてもいいのかな……？

——ちょっと!?入校許可をバンバン出すとか言つてた生徒会長さん!?まずあんたがココに居てくんないや、出すもんも出せないじやん！私、お恥ずかしながら比企谷君とまだ連絡先も交換していないんだよ？

……あ、比企谷君の連絡先超欲しい。じやなくつて！どうすりやい

いのよ。昨日に引き続き、さつきから超ジロジロ見られてますし私。

……これはあれだ。よし帰ろう。即断即決が大事よね。あーあ

……比企谷君に会いたかったなあ……

「あのく、海浜の生徒さんですよね？ウチになにか御用ですか？」

そんな時、比企谷君に後ろ髪を引かれながらも踵を返そうとした私は、とある一人の総武生からお声がかかつたのでした。

ん？なんだかこの娘、ちょっと折本さんに似てるわね……。

※※※※※

「あ、え、えつとー……」

突如声を掛けられてプチパニックな私。ぼつちはアドリブに弱いんです。

しつかし……総武ってレベル高くね……？

たまたま声を掛けてきただけのモブちゃんが折本さんクラスのリア充美人とか、一体どうなつてんのよこの学校。こんなに物語に都合のいい学校なんかあるかよ。ファイクションかよ。

……ふむ。しかしせつかく声を掛けてくれたわけだし、仕方ないからこのリア充オーラ溢れるモブちゃんに聞いてみますかね。ホントは帰りたかったのにちくちよう。

基本リア充なんかには関わりたくない私だけど、……うーん……なんでだろ。なんだかこの娘ならイケそうな気がするんだよね。どことなく折本さんに似てるから、かな？

「あの、ですねー。ちょっと生徒会長さんに呼ばれて來たんですけど、勝手に校内に入っちゃつていいものかどうか分かんないんですよー」
実際は生徒会長にじやなくて雪女に呼ばれたんですが。まあ、いろいろすちゃんにも来いやコラと言われたし間違つてはいないよね。こう言つた方が早いし。

「呼ばれ？……あ、じゃあやっぱ生徒会関係のお仕事かなんかで呼ばれて來たんですね。ちょっと待つてくださいねー」
にひとつそう言うと、モブちゃんはブレザーのポケットからスマホを取り出して、どこぞに電話を掛け始めた。

あ、確かに折本さんにも似てるけど、私の趣味的な見方でいくと、崖登りしたり吊橋渡つたりと熱いアイドル活動をしてる「おつかー！」でお馴染みのひなきちゃんに似てるかも。このにひつとした元気な笑顔とか。（注・崖登りも吊橋渡りもアイドル活動にはなんら必要なスキルです）

「…………あ、いろはー？…………あのさあ、海浜の生徒さんが校門まで来てるんだよねー。どうすればいいー？」

…………ん？ いろは……？

あ、ありや？ まさか私たまたまいろはすちゃんの友達にゲットされちゃつたの？

「…………んー、そorschう…………ボニテの可愛い…………ん？ はいはい…………裏口の？…………教員用の通用口…………あー、はいはいあそこねー…………つとお、そこまで連れてけばいい？」

なんか可愛いとか言われちゃつてますけど私つー！でもいろはすちゃんの友達なら私の方が先輩になるんだから、遠慮しないで美人のお姉さんとか綺麗なお姉さんとか言つてもいいのよ？

胸部は私の方が後輩みたいですけど。全米が泣いた。

「ほいほーい！…………かしこまつ☆」

「!?」

「…………はつ!？」

「」

…………ちよつとこの娘かしこまつ☆とか言いましたよ？そして引きつった顔して明らかに私から目を逸らしましたよ？

ああ……（察し）

「…………そそそれじゃ私に着いて来てくださいねっ…………な、なんか教員用通用口の前で待つててもらつてとか言われたんでっ……」

「…………あ、うん」

『ぼつちとぼつちは引かれ合う。それはもうニユータイプばりに』など過去の偉人（昨日の私）が言つてたこともあつたけど、この世にはそれと同様に、深層心理の奥深くで引かれ合うものが他にあるの

だ。

……この娘、こんなにリア充な見た目なのに残念なオタなのね……。だからか、私が初見からこの娘ならイケそうって感じたのは。そして私は『べ、別に私オタとかじやないんですけどもっ!?』と、白々しく背中で語る残念リア充かしこまつ娘ちゃんに連れられて、ついに総武高校の門をくぐるのでした。

……こいつオタはオタでも隠れるタイプか……。隠れてるつもりで全然隠れられてない辺りが、漂う残念さの所以か。

※※※※※

「あの～……」

駐輪場を借りて愛機を停めさせてもらい、教員用通用口とやらに向かう道すがら、引きつった顔に無理やり笑顔を貼り付けたかしこまつ娘ちゃんが、気まずさに耐えきれなくなつたのかなんか話し掛けてきた。

かしこま☆に反応した私もあなたと同類なのは分かつてんだろうし、無理に潜まなくてもいいのに。

「はい？」

「そりいえば今日はどのようなご用件でウチにいらっしゃつたのかなー?なんて

「……へ?ん、ん~と……」

どのようなご用件でと仰られましても、ハーレムの男に手を出したら女共に呼び出されちゃつて、てへつ。なんて答えられるわけないしなあ……

てかこの娘いろはすちゃんの友達ならハーレム事情くらい知つてんのかな。

「……や、やー……なんて言つたらいいのか……。あ、あれ!あれだ!ちゅ、中学の時の友達に会いに来た、みたいな?」
愛に来た、なんつって。

「中学の、友達……?それでなんでいろはに呼ばれたんだろ……?」

確か今日はH.R終わつたら猛ダツシユで奉仕部行つてたような

……

「奉仕部!?」

あ、やっぱこの娘奉仕部事情とか知つてんのね。

「あ、れ?……その中学のお友達というのは奉仕部の人なんですか……?」

あれ?なんか空気が変わつたぞ?

「……えと、その奉仕部というのはイマイチよく分からんんだけど、まあその関係者……かな」

「そ、そうなんですかー。……ゆ、雪ノ下先輩か、もしくは由比ヶ浜先輩、かなー……?」

「……あ、や……ひ、比企谷君……っていう男の子なんだけどー……」「ひ、ひきつ!」

はい。完全に事情通ですね。なんなら事情関係者だつたりして。せめて情事関係者じやないことを祈るばかり。

するとかしこまつ娘ちゃんは「……マ、マジかよあのスケコマンシ……まだこんな隠し球があんのかよつ……」などと、愕然とした様子でブツブツと呟いている模様です。

あのね?私難聴系じやないから、そのセリフ全部聞こえちゃつてるからね?

程なくして目的地へと到着した私達。

かしこまつ娘ちゃんは、警戒心からか口元をヒクヒクさせながらもなんとか笑顔で声を掛けてくれた。

「あ、あの、ここで待つてればいろは来ると思うんで……。じゃ、じゃあこれで失礼しまーすつ……」

「あ、えと……わざわざありがと……」

「いえいえー……」

なにか思うところがあるのか、フラフラとした足取りで去つていくかしこまつ娘ちゃんの背中を見つめながら私は思う。

——マ、マジかよつつ……!!なんのこの学校!?

たまたま声を掛けてくれた女の子までが比企谷ハーレムの一員なのつ!?やだなにそれ怖い！やつぱい！ちょっとこれ私の想像の範疇超えてんだけど!?

だって雪女（ツンデレ枠）でしょ？メロン団子（おっぱい枠）でしょ？暗黒天然水（あざと後輩枠）でしょ？……あとイケメン（やらないか枠）もか。

なんかそう考えると、この学校のどいつもこいつもがみんなハーレム要員に見えてきちゃったよ。

かしこまつ娘ちやんだけじゃなくて、さつきすれ違った時にガン付けられた長髪ボニー・テールの美女ヤンキーとか、すぐそこに舞い降りてる真っ最中のテニス部の美少女天使とか、みんなみんなハーレム要員に見えてきて困るんですけど。

さ、さすがにそんなわけ無い……よね？

そんな、困惑を隠せずにただ立ちすくむ事しか出来ずにいた私の肩がぽんつと優しく叩かれたのだった。

「お待たせしましたー！さ、もう尋問始まってるんでもちやちやつと行っちゃいましょうかー」

尋問、もう始まってるってよ。

つづく

【番外編3・5】元ぼつちにかしこまり【オマケ】

「じゃねー、また明日ー」

「じゃねー」「行つてらー」「ばいばーい」「また明日ねえ」

3月のとある日の放課後、今日も今日とて私の友達一色いろはが颯爽と教室を飛び出していった。

いつもと変わらないような光景に見えるが、ヤツの様子はいつもと若干の違いを感じないこともない。てか違う。違すぎるつ！十万石まんじゅう！

おつと、埼玉に魂を売つちやイカシよ。

「なんかいろいろはちゃんさあ、いつもと様子違く無かつたあ？」

「ねー。比企谷先輩んトコ行くにしたつて、楽しそうというよりは……なんかなんか機嫌斜め？」

「そーいや朝からなんかちよつとイライラしてたね。なんかあつたんかな、アイツ」

やつぱ違うと感じたのは私だけではないようだ。

……ケツ、なにがあつたか知んないけどさ、全速全力で比企谷先輩んどこに行けるだけで十分幸せじやねーかよ。ケツ。

「やべー、香織の顔が比企谷先輩の目みみたいに腐つてんだけど」

「うるさいよ！なんだよ目どころか顔腐つちやつたの!?私！」

「まあ仕方ないんじやない？ジエラジエラしちやうよねー、香織ー？」

とつと諦めて、とも君みたいな素敵な彼氏早く作つちやえればいいのにー。あ！とも君みたいな素敵なのはなかなか居ませんけどもお腹つ立つわー、そのツラ。早く別れちゃえればいいのに。

あ、でも別れたら別れたでアホみたいにめんどくさくなりそうだから、やつぱあんた達はそのまま永遠に結ばれちゃえればいいよ。

いやん香織つてばツンデレ可愛い☆

「でもその荒んだ表情は残念さが際立つちやうから気を付けた方がいいいいいい！」

流れに乗つてお前まで調子のんなよ？いやマジでなんであんたに残念呼ばわりされなきやなんないの？

お前よりは残念さが若干弱いってプライドがあるのよ私や。なにその可哀想なプライド！こういうのつて目糞鼻糞つていうのよねつ。やだ目にゴミが。

そして私は襟沢の顔をガツチリキヤツチでギリギリと締め上げながらスクツと立ち上がる！

この際だからあんたらにはつきり言つてやんよ！この熱い思つてヤツをさあ！

「べ、別に私 比企谷先輩のことなんて好きでもなんでもないんだからねつ！」

「はいはいツンデレツンデレ」「そーだねー、香織ー」「て、手をつ……手を離してつ……」

「

……ちよ、ちよつとそこの暖房さん!?今日はちよつとばかり効き過ぎじやないかしら？

……熱いよう……誰かそこの暖房を消してよう……！

——そしてとても大切で大好きな友人達との素敵なガールズトークを終えた私は、人知れず涙を拭きながら部室へと歩を進める。

……なんだよちくしょう……！みんなして私の可憐な乙女心を弄びやがつてよう……！

いまに見てろよ!?絶対幸せになつてやるんだからあ！

と、仄かな平塚フラグを立てながら部室の扉に手を掛けたのだが……あ、なんだよ今日部活休みかよ……

あつれー？そんな話あつたつけえ？ちゃんと連絡してくださいよ部長ー。

そして一応確認の為に取り出したスマホをチェックした私は、危うくスマホを床に叩きつける寸前になりました。

「部長

ごつめーん！今日デートの約束があるんだつたー！

てなわけで今日の部活動は休止としまーす☆

なんだよー、お前ら突然の休暇とか超ラツキージャーン！」

こんの糞アマ……

× × ×

てなわけでホントに予定外の時間が出来てしましました。
ふむ、とても大切で大好きな友人達（笑）はもう帰っちゃつただろ
うしなあ。

んー……よっしゃ！んじや千葉にでも遠征してラノベかマンガの
新刊漁りにでも行っちゃいますかねー。

んで楽しいの発見できたら、今度比企谷先輩と交換っこしつちや

おーつと♪ふひつ！

そんな淡い期待に胸躍らせて校門まで歩いて来たんだけど、そこで
私はいつもと違う風景を目撃したのでした。

「……ん？」

おやおや？なんか校門の前で他校の生徒が校内を覗きこんでるぞ
？

その子は、ちょっと小柄で——ちょうどウチのいるはくらいかな?
——なかなかに可愛い顔立ちをした、海浜総合高校の制服を身にま
とつたポニーテールの女の子だった。

ウチの男子とデートの待ち合わせとかかな？

……チツ、美少女が制服で他校の校門前で男待つてるとかどんな当
て付けだよ爆発すればいいのに。

と、また若干顔が腐りかけた私なのだが、……いやいやだから顔が
腐るってなんだよ。私って結構可愛いのよん？

……おや？女の子の様子が……

別にキングスライムに合体する前のスライム達ほど様子がおかし
いわけじゃないんだけど、どうやら誰かを待ってるって感じでも無い

みたい。

待つてるというよりは、どちらかというと校内に侵入したそな？でも帰りたそな？どつちだよ。

……うーん。海浜さんといえば、クリスマスやらバレンタインで、いろはが利用したり利用されたりとWINーWINなパートナーシップを築いて最大限のグループシナジー効果を生んだあの海浜さんよね。

もしかしてまたいろはにネゴシエーションしに来たのかな？ちゃんとアポイントは取つてあるのかしら？

……危うく意識を失いかけた私だけど、なんか困つてそなだし、それになんかよく分かんないけど私に似たモノを感じる気がするし（可愛い子だし、可憐な恋する乙女なトコとかが似ちやつたのかなつゞきやつ☆）、ちょっと声掛けてあげよつかな。

ふふ……たまたま生徒会長様のご友人様が通りかかつたことを神に感謝なさい？

「あの、海浜の生徒さんですよな？ウチになにか御用ですか？」

「あ、え、えつとー……」

するとその子は小動物みたいにビクツと震えると、不安げな眼差しを私に向けてきたのだつた。

× × ×

借りてきた猫のように、怯えるような瞳でおどおどと私を見つめるボニテ少女。

……ふ、ふへへ。ど、どうしたんやあ？おいやんに話してみいやあ？

……完全に変態である。（キートン感）

「あの、ですねー。ちょっと生徒会長さんに呼ばれて來たんですけど、勝手に校内に入つちやつていいものかどうか分かんないんですよー」「呼ばれ？……あ、じやあやっぱ生徒会関係のお仕事かなんかで呼ばば

れて来たんですかねつ。ちょっと待つてくださいねー』

ふむふむ。やっぱ生徒会関係者さんなのかな。ほいじやおいちやんがなんとかしてあげますかね。

そして私はまたもポケットからスマホを取り出すと、今ごろ比企谷先輩とキヤツキヤウフフしているであろうあの女に電話を掛けた（血涙）

『もしもし香織ー？どうしたのー？』

「あ、いろはー？あのさあ、海浜の生徒さんが校門まで来てるんだよねー。どうすればいいー？」

『……え!? マジで!? 来たの!? それって結構可愛い感じの女人人？……海浜つて、まさかろくろ回してる人じやないよね!?』

なんで校門前でろくろ回してんのよ。そんなのがもし居ても、私声かけねーよ。

「んー、そうそう。ボニテの可愛い子」

『可愛い子つて……那人一年生だかんね?』

「……え? 二年生なの! や、やつべ、先輩じやん……」

『まあそんのはどうでもいいけど……』

……そんなのつて。なんかいつにも増して辛辣だなこいつ。

「で? どうしよつか? 生徒会室に連れてけばい?」

『あ、じやあわたし迎えに行くからさ、裏口の方にある教員用の通用口の入り口つて分かるー?』

『ん? 裏口の?……教員用の通用口?……あー、はいはいあそこねー……つとお、そこまで連れてけばい?』

『うん。そこで入校許可証出さなきやだからさー』

「ほいほーい!」

『んじゃ悪いけどよろしくねー』

「かしこまつ☆」

よし。今日も1日1かしこま無事に消費完了つと!

そう私がスマホに向けて横ピースをしていると、なんだかとつても痛い痛い視線を感じるよ?

「?」

恐る恐る痛々しい視線の方へと目線を向けると、ポニテ先輩が驚愕の表情を私に向けていた。

「……はっ!?」

——し、しまったあああつ！素人さんの前でかしこまつちまたあああつ！

しかも私ってば横ピースしたままやんの（白目）

「」

ふ、ふええええ……視線が痛いよう……！

その瞳からは「こいつオタクじやね？」って意志をビンビンに感じるよう……！

わ、私オタクとかじやないんですけどっ！？

「……そそそそれじや私に着いて来てくださいねつ……！な、なんか教員用通用口の前で待つてもらつてとか言われたんでつ……」

「……あ、うん」

油断ダメ！絶対！

一般人にオタクって事がバレたら絶対ダメなんだからあ！
オタクつて自己申告しちやつてんよ。

× × ×

……いやいや待てよ？そもそも一般人の素人さんが、はたしてかしこま☆に反応するのだろうか……？

女子高生の单なる仲間内の可愛い挨拶みたいなもんつて思わない？普通……

なのにあそこまで過剰に反応するつてことは……まさかこいつもオタク……なのかな？

いやいや“こいつも”つて、私は違いますよ？

「あの……」

そんな心の葛藤と無言の気まずさに思わず声掛けちゃつたけど、私なにを語り掛けるつもりなのん？

「もしかしてあなたも玄人の方ですか……？」とでも語り掛けるつもりなん？

なにそれ怪しさ満点！

「はい？」

「これでもしもこの人がオタクじやなかつたとしたら、私の社会的地位が終了しちゃいそうよね……」

嗚呼つ……ここまで築き上げてきた清楚系美少女の地位がつ……誰が清楚系美少女だよぷつぶー（笑）とかつて天の声が聞こえるような気がするけど気にしない！

と、とりあえず当たり障りの無い質問でお茶を濁してみますかね。「そろいえば今日はどのようなご用件でウチにいらっしゃったのかなー？なんて」

「……へ？ ん、ん」と……」

するとこの推定オタク少女は、予想外にも答えに詰まる。

あれ？ 私てつきり「生徒会のお仕事なんですよー」とかつて迷い無く答えるもんかと思つてたよ。

ああ、あれか？ その普通の答えを、脳内で意識高い系ワードに変換しなきゃいけないのかな？

すげーキツい縛りだな。恐るべし！ 海浜総合生徒会役員共！

「……や、やー……なんて言つたらいいのか……。あ、あれ！ あれだ！ ちゅ、中学の時の友達に会いに来た、みたいな？」

……つへ？ なにそれ予想外！ 脳内変換に手間取つてたわけじやないのね。

「中学の、友達……？ それでなんでいろはに呼ばれたんだろ……？」

確か今日はHR終わつたら猛ダッシュで奉仕部行つてたような……」

そうなのだ。よくよく考えたらいろはのヤツ、今日は（今日も）生徒会じやなくつて奉仕部に入り浸つているはずなのだ。

そんないろはに呼び出されたつてウチに来た以上、どう考へても生徒会関係の仕事話なわけ無いのよね。

「奉仕部！？」

すると、この推定オタク少女はあろうことか奉仕部という名に食い

付いた。超食い付いた。

「あ、れ？……その中学のお友達というのは奉仕部の人なんですか……？」

なにそれもう嫌な予感しかしない。

「……えと、その奉仕部というのはイマイチよく分からんんだけど、まあその関係者……かな」

「そ、そ、うなんですかー。……ゆ、雪ノ下先輩か、もしくは由比ヶ浜先輩、かな…………？」

……などとなんとか誤魔化そうと必死にそちらへ誘導しようと藻搔く私なのだが、なんかもうそんなの絶対に有り得ない……

だつて、由比ヶ浜先輩の中学時代の友達にいろはがなんら興味なんかあるわきやないし、雪ノ下先輩に中学の友達なんて居るはず無いしそうつて私ヒドくね？

そんな私の当たつてほしくない予想通り、この推定オタク少女は、その瞬間リンゴのように真っ赤に頬を染め上げ、もじもじしつつ上目遣いでこう答えるのでした……

「……あ、や……ひ、比企谷君……っていう男の子なんだけどー……」「……ひ、ひきつ!?」

ぐへえつ！香織は白目を剥いた！

× × ×

……マ、マジかよあのスケコマシ……まだこんな隠し球があんのかよつ……」

マジでYΟU爆発しちゃいなYΟ！

てか、無意識にボソボソ呟いちゃつてた気がするんだけど、き、聞かれてないわよね……！?

ぐふつ……ちよ、ちょっとだけクラクラするわ？

マジなんなのよあんのスケコマ八幡があ！どこまで手え出しや気が済むのよつ！?

このもじもじ具合からして、完全に惚れられてんじやん！あんにや

ろう！

……愕然と放心しちゃつた私は、結局そのまま一切の言葉も発することも出来ずに、お通夜状態でお客人を目的地まで送り届けるのがやつとこさでした……

「あ、あの……」

お客様を通用口の前までお連れした私は、明らかに私に対して警戒心をあらわにしている彼女に対して、なんとか笑顔を貼りつけて最後のお持て成しをする。

「この人もしゃ……

「こ」で待つてればいろは来ると思うんで……。じゃ、じゃあこれで失礼しま／＼すつ……」

「あ、えと……わざわざありがと……」

や、やっぱこいつ……もしかして私の秘かな突撃でラブ的なハートに感付いてんじゃなかろうな……

「いえいえー……」

——仕事終えた私は、ふらふらとその場を去る……

千葉に遠征して、ラノベ漁りウキウキひやつほい♪比企谷先輩とイチヤラブ貸し借りうつひよー！とか、そんなこと考えていた時期が私にもありました。

比企谷先輩のことを中学の友達だと宣いながらも、頬を染めてもじもじしていた少女の表情を思い私は思う。

——ねえ……私つて何番目の女なのん……？

終わり☆

【後日談④】元ぼつちは残念吸引達人の称号を手に入れた

3月の冷え冷えする校舎内。そんな冷たい空気よりもさらに冷たく凍えそうな心には、借り物の上履きがリノリウムの床と触れ合った時に鳴らすキユツキユツという雜音が、さらに酷く心の冷え込みを感じさせる。

てかあれよね。なんか文学的にスタートさせてみたはいいものの、今私の現状つてそんな格好良いもんじゃないからね。

ハーレム王に手を出しちやつて、そのハーレムメンバーの女共に呼び出し食らつて連行中とか、それもう格好良いどころか最高に格好悪かつたですありがとうございました。

そもそもリノリウムの床つてなんだよ。廊下でいいじやん廊下で。とりあえずリノリウムつつとけばOKなんじゃね？つて風潮はいかがなもののかしらん。

と、各所に要らん誤解を招いてしまいそうな思考についつい浸つてしまふくらいに、これから訪れるであろう災厄に、私の魂は漆黒の闇に包まれようとしている。

文学風の次は中二満開でした。あらやだお忙しい。

……だつてさあ、あんなに笑顔（お面）で迎え入れてくれたいろはすちゃんが、まつたく笑つてない目のまま鼻歌まじりにずんずん進んでくんだもん恐いよ。

——ひ、比企谷君てば、昨日私が告つちゃつたこと吐いてないよね

……？

いやいやそれはない！だつて昨日きつちり口止めしたハズだもん！そもそもあの比企谷君があんな恥ずかしい大事件、口割るワケないし。

「あ、あの、いろはすちゃん…」

「は？なんですかいろいろはすちゃんて。わたし天然水じやないんですけど」

たまらず話しあげてみたら、とつても素敵な笑顔（お面）で即座に切り捨て御免。やだお侍様に無礼討ちにでもされちゃつた気分！切り捨てるならまずは戸部君とやらじやないの？私つてば彼のせいでいろいろはすちゃんて覚えちゃつたのよ？

「先にお伝えしますね。なんかー、雪ノ下先輩達は二宮先輩のことそれなりに認めてるみたいですがどー、言つときますけど、わたしは別に全然認めてないんで。

なんか昨日の盗み聞きによると、中学の時に先輩に酷いことしたみたいですしー？」

「うぐつ！」

それ言われちゃうとお姉さん何も言えないですー。だからずつと不機嫌なのねこの子……。でも笑顔は絶やさないんですよ？

まあいろいろはすちゃんも色んな勇者たちをそれ以上の酷い目に合わせてそうですがね。恐いからいいませんけど。ウフフ。

しかしここで朗報がひとつ！

なんと今回の主犯格で在らせられる雪ノ下さんは、どうやら私の事をそれなりに認めてくれてるみたいなのー！

乳ヶ浜さんは見るからに温厚そうだし、これは虐殺回避に夢見ちゃつてもいいのかも！乳ヶ浜さんて誰？

「まあ？ 二宮先輩の非道な行いによって今の捻くれてるけど意外と頼りになる先輩が出来上がつたっていうんなら、間接的には感謝ではありますけどね」

ひ、非道な行い……

でも、その言い方から察するに、やつぱりいろいろはすちゃんも比企谷君の捻くれた優しさに救われて心を動かされたクチなのかな。

にしても“意外と”頼りになるなんて言つちゃつてからにー！

「それにあの自称トップカースト女から、身を挺してバカな先輩を庇おうとしたのはポイント高いと言えば高いですし？」

「へつ？」

……ふつふつふー、やっぱなんだかんだ言つて実はいろはすちゃんも単なる捻^{ハシマラ}デレだつたりするの…

「まあ、抱きつきすぎでその僅かな収支も株価が大幅な値下がりに転じて最終利益はトントンですけどねー」

「……」

全然^{ハゼ}デレてなかつた。この子いつたいなんの話をしているのん？

「おや？ そちらは海浜総合の生徒かね？」

そんな、どうやら比企谷君だけじゃなくてマネーのお話も大好きそうないろはすちゃんのエセデイトレーダートークに苦笑いしていると、なんかこれまたすつごい美人さんに話し掛けられてしまひました。

マジこの学校どんだけ美男美女に溢れてんだよ。

※※※※※

「あ、平塚先生こんにちはです」

「ああ、こんにちは」

どうやら平塚というらしいこの美人教師。白衣を羽織つてるとこから見て理科系の教師なのかな？

乳ヶ浜さんをさらに上回る万乳引力の持ち主な上に、その立ち居振る舞いはまさにイケてるキャリアウーマンそのもの！

なんかもう美乳を見ちゃつただけでも爆ぜればいいのにつて思つちやう荒んだ殘念バストの私からすると、このさぞやおモテになるであろう美人教師はまさに敵そのもの。ちなみにいろはすちゃんはナカーマ！

「……あ、どうもこんにちは。海浜総合の二宮と申します」

「やあ、こんにちは。一色と一緒にいるところを見ると、生徒会関係かなにかなのかね？」

「あ”つ……そ、その……えと……」

よくよく考えたら、ハーレム王を囲む会・会員に呼び出されて他校の生徒が来たとか、教師になんて説明すんのよ……？

ちよつとコレドーすんの!? つて目でいろはすちゃんに助けを求める

ると、なんといろはすちゃんは事もなげにこう答えた。

「あ、こちらは生徒会関係じゃなくて奉仕部関係のお客さまなんですよー」

ほー、なんか奉仕部つて謎の組織みたいなもんのかと思つてたんだけど（なにせ高校の部活で奉仕部つてなんだよ？）、ちゃんと認知されてるんだ。

「奉仕部……？私はなにも聞いていないが、あいつらはいつから他校の相談まで受けるようになつたのだ……まったく……勝手なことをしあつて……」

そう言つてこめかみを押さえる美人教師。どうやら認知しているどころか内情も詳しいご様子。

「……あー、えとー、違くてですねー……ま、まあ奉仕部の呼び出しではあるんですけど、どちらかというと先輩のお客さまみたいな……？」

「は？比企谷……？君は比企谷の関係者かなにかなのかね？」

「あっ、いえ！はい！……か、関係者つていうか……ちゅ、中学の同級生つていうか……？」

いきなりL O V Eな相手の関係者？なんて聞かれたもんだから、ドキリと心臓がはね上がつて慌ててしまつた。

やばいやばい。ちょっと顔赤くなつてそうつ……

そんな赤面してもじもじしゃつた様子の私をシラうつとした目で見つめるいろはすちゃんと…………え？平塚先生も!？

「……ほう……比企谷の…………ふつ、比企谷のヤツめ……。ま、またまにはそういうのもよからう……」

えつと……なんでこの人、急にしゆんとなつちゃつたんですかね。

「……で、ではな。あんまり遅くなるんじゃないぞ」「は、はい」

「……ではでは失礼しまーす」

そう言つてフラフラと立ち去る女教師平塚。…………えつと……な、なに……？

そして彼女がボソリと一言。

「……チツ、爆発しろ……」

……えー……

スミマセン平塚先生、どうやら私は誤解してたようです。
やばいわこの学校。美男美女が揃い過ぎてマジどうなつてんの?
とか思つてたけど、なんやかんやでプラスマイナスつて取れてるもん
なんですね。

超美人（残虐）巨乳（おバカ）可愛い後輩（\$）可愛い後輩2（か
しこま）美人教師（やべえ）爽やかイケメン（ホモオ）

…………世の中つて良く出来てるもんだなあ（遠い目）

「?」

ちょ待てよ!……まさかあの残念女教師まで比企谷ハーレムメン
バーなんじやないでしようね!

あははへ……さ、さすがにそれはない……ですよねー?

※※※※※

比企谷君に対する新たな疑惑に、白目を剥いて意識を失いかけたま
までいた私は、ついに地獄の一丁目まで連行されたらしい。

辺りに人気の一切無い“そこ”は、どうやら総武高校の中でも特殊
な環境にあるみたい。

一度受験に来た時に校舎内に入つたことはあるんだけど、確かその
時はここと反対側の別の棟だつたよね。教室とかもあつち側っぽい
し、こつちはいわゆる部活棟つてところなのかな。

この人気の無さ。これなら多少の悲鳴や呻き声が辺りに響いても、
助けが来る事もなく速やかに対象を始末出来そうですね（白目）
「お客様をお連れしましたよー」

……つてちょっと!?

私が心の準備をする暇もなく、いろはすちゃんがガラリと扉を開い
て室内に入つていつてしまつた。あなたノックくらいしたらどうな
のかしら。

「……一色さん。あなたノックくらいしたらどうなのかしら」
まさかのシンクロ率である。もしかして雪ノ下さんと私つて気が

合うんじゃないかしら？あの子も私と同じく孤高の存在っぽいし。
すみません孤高の存在（笑）の私」ときが調子に乗っちゃいました。

「次からは気を付けまーす」

絶対に次からも気を付けないであろう決意のお返事を聞きながら
も、私は現在軽くパニくっている。だってまだ心の準備が！いきなり
すぎなんだもん！

ラストダンジョンはもつとこう色々と趣向を凝らしてくんないと
さつ……！私まだ主が不在の玉座の後ろとか調べてないのよ？玄関
開けたら2分で魔王☆みたいなもんじゃないのよコレ。

どどどどーしょー!?この扉をくぐると、その先にはいつたいなにが
待ってるの!?

……入室した途端に目に飛び込んできたのは、土下座姿の比企谷君
でした………とかいうオチだったら速攻でルーラ唱えなきや。
みやは、てんじょうにあたまをぶつけた！

「なにしてるんですかー？早く入ってください」

おいおい美耶ちゃんそこはルーラじやなくてリレミトだろっ（笑）
と、呪文の選択ミスを一人ツッコんでると、一度入室したいろはす
ちゃんが、中からぴょこん♪と顔を覗かせた。うん、実にあざとい。
「……ふうううう」

そして私は、目蓋を閉じて胸に手をあて、深く深く息を吐く。
なんか色々あつたけど、ここをくぐれば一日ぶりに比企谷君に会え
るんだつ。

えへへ……なんだかんだ言つても、やっぱ嬉しいもんは嬉しいや。
やー、ちょっとびり恥ずいですけどもお！
「し、失礼しまーす」

先ほどまでの決意の覚悟はどこへやら、ちょこつと頬を染めちょ
こつとドキドキ、私はついに奉仕部さんとやらに突撃するのであつ
た。

つづく

【後日談⑤】彼女（元ぼつち）が目指す先（椅子）は遙か彼方……

「し、失礼しまーす……」

ついに謎の秘境へと足を踏み入れた一宮隊員。その地に潜む未なる生物とは？

【恐怖！未開の教室の奥に潜む伝説の人喰い乳無し雪女は実在した！】

藤岡弘、さんかなんかが出てきそうな探検隊かよ。こんなこと考えてること雪ノ下さんにバレたら昇天しちやう！

だつてそれほどに未知のプレイスなんですもん、ここ。なんだよ奉仕つて。

さてと、いつまでも現実逃避してないで、そろそろ目の前の現実つてやつに目を向けてみましようかねと、私はこの怪しげな室内を見渡してみることにした。

まず真っ先に目に飛び込んで来たのはもちろん比企谷君つ！

ヤツは友達以上恋人未満なこの可愛い可愛い美耶ちゃんに対しても『うわ……』といつマジで来やがったよ……』つて顔を前面に押し出してきやがってるけど、そ、そんなの気にしないもんつ……泣いたりなんかしないんだからね！

てかもうちよい感情隠せよ。並みの乙女ならホント傷ついたらどうよ？ホントだよ？

まあ実際のところ友達以上恋人未満どころかまだまだ友達以下でしかなかつたですよねすみません。

とりあえず目の前に広がつた光景で胸を撫で下ろしたポイントと言えば、比企谷君が土下座させられてなかつたコトですかね。ちゃんと普通に椅子に座つているようです。

ところで「おやおや、随分と撫で下ろしやすそうなお胸ですねw」とか思つたやつ、あとで体育館裏…………で私泣いちやつてると思うか

ら、体育館裏には絶対に近づかないでね。

大丈夫よ私！雪ノ下さんよりはずつと育つてゐるんだから！

……さて、涙無しでは語れないバストな自虐はさておき、ふう……危ない危ない。マジで土下座スタイルだつたなら、危うく囚われのプリンセス（比企谷君）を目の前に逃げ出しちゃうとこだつたよ。

助け出しに来てくれた白馬の王子さまが目の前で即回れ右しちやつたら、お姫様もビックリしちゃう。百年の恋も一発で覚めちゃうわ。

やば！また恒例の脱線気味になつちやつた！まあ常に脱線しきてるし、もう脱線などなんのその、いつそレールなんか無視してそのまま突つ走つちやつた方がいいのかしらん？とか考えちゃうお年頃。

私、誰かに引かれたレールの上なんて走りたくないの！

…………こほん。さてさていい加減に話を元に戻すとしようかな。胸を撫で下ろすとは言うものの……ねえ。この席の配置がまたなんとも……

長机のど真ん中には乳無し雪女こと雪ノ下さんが堂々と鎮座し、その両脇をメロン団子と暗黒天然水がガツチリと固め、その三人の向かいに比企谷君がポツンと座つてゐるという、いわゆる裁判スタイル。あ、そつか！これがこの部活の日常的な席割りなのかな？んなわけないがな。常にこれだつたらさすがに居たたまれないわ。

そしてもうひとつ問題と思われるのが、そのポツンと座る比企谷君の隣には空席がひとつ用意されているということ。

……やだ！私つてば比企谷君と隣の席になつちやつたわ☆

とかつて喜べるような状況では決して無いですよねー。なんか胃がキリキリしてきました。この歳で胃潰瘍かしら？
「一宮さん、だつたかしら。ここにちは。わざわざご足労頂いてどうもありがとうございました。

よく昨日の状況を目の当たりにした上でここまで来られたものね。感心するわ」

やつたあ！雪ノ下さんに感心してもらえちやつたつ！

つて、んなわけあるか。あんたが来いつつーから嫌々ながら来たんでしようが。私だつて昨日の大虐殺劇目撃したあとでこんなトコ來たくないわよ。

あくまでも私の単なる良心で來たまでですよ。比企谷君一人を犠牲にするなんて、優しい優しい美耶ちゃんには到底容認出来なかつたつてだけの、そんなお話。

そう。これは私達二人で責めに責められ、その後傷付いた二人の間にはお互いを慈しむ謎の絆が芽生え、そしてまだ青く幼い蕾のような若い二人は仲良く手と手を取り合ひぐへへへへ。

良心どころか超やましかつたです。

だから私は言つてやつたのさ。

来いつつーから來てやつたのに、「よくもまあ來れたものね」的なニュアンスを含む第一声を、あまりにも素敵な笑顔で宣つた傍若無人な氷の美女に、この熱き思いの丈を！

「……え、えへへ……きよ、恐縮でくす……」

セリフも表情も卑屈すぎワロタ。

※※※※※

「ではとりあえずそちらに掛けて頂けるかしら」

「アツハイ」

そう雪ノ下さんに促され、私は比企谷君の隣の席へと向かう。「にのみんやつはろー」

席へと向かう長い長い道すがら、私は突然聞きなれない部族の謎の言語を浴びせられた。

え？ なんだつて？

んばばー、とかそういう類いのヤツかな。やはりここは未開の地だつたのか。奉仕部コワイ。

恐る恐るそちらに目を向けると、そこにはたぶん本日の唯一の良心であろう乳ヶ浜さんが、なんだかとつても苦笑氣味に手を振ってくれていた。

昨日のエンカウント時も確かに折本さんにやつはろーとか言つてた

から、たぶんやつはろーとは乳族に伝わる現地の挨拶であることはまず間違いないのだろう。

やつはろー!!やつはろー!!やつはろーーー!!

よつしやあ！これで私も今日から立派な乳族の一員だね！お願ひだから早く膨らんでよう……！

ハツ!?てかそれで膨らむくらいなら、雪ノ下さんといろはすちゃんもとつくな実戦して実装してるハズよね。ちくしょう！騙された！純粹な乙女の切なる願いを弄びやがつてえ！このおっぱい魔神めが！

「……や、やつはろー……」

ほんのわずかな巨乳への夢が脆くも崩れ去る中、それでも由比ヶ浜さんはとつてもいい人っぽいから、私の溢れ出る優しさで仕方なく挨拶を返してあげた。いや、別にほんのちょっぴりだけ期待して夢見ちゃつたりなんかしてないのよ？

……で、でもこれ、思いのほか恥ずかしいわね……コミュ障気味の私にはちょっと難易度高めの挨拶かも。

……にしても、てことはどうやら“にのみん”つてのは私の事らしい。

なんなんだろう、この壊滅的なあだ名センスは。まあこの子、比企谷君のことヒツキーとかって、いじめなの!?と思えるようなあだ名も満足気に命名してるようだし推して知るべしか。

今日はミヤミヤとか呼ばれたりにのみんとか呼ばれたりと、今までの私の人生で聞いたことない名前を呼ばれる日だなあ。

あなたが変なあだ名を受けたから、今日は変なあだ名記念日♪

記念日も無事に制定出来たところで、柄にもなく優しさでやつはろーなどと恥ずかしい挨拶をしてみた私は、ほんのりと頬を染めながら空席へとひた進む。

入室時は霞むほど遙か彼方にあつた席がようやく見えてくると、私

の到着を今か今かと待ち構える比企谷君とばつちり目が合つ
ちやつたつ！

一日ぶりの比企谷君との再会が嬉しくて、ついつい頬が緩んでも
まつた私は、そんな感情を隠そともせずに、えへへゝと全力ではに
かんで胸の高さでちよこちよこと手を振つてみた。やだなんかデー
トの待ち合わせみたい。

そんな私の笑顔に照れまくりの比企谷君は、うわあ……とうんざり
顔を浮かべてぷいっとそっぽを向く。うふふ、そんなに照れなくつて
もよからうもん！

あ、これ照れてるんじやなくて完全に嫌がつてました（白目）
ん？でもどうやらそっぽを向いてるが故に丸見えになつてお耳
は真つ赤つかですね。なんだよお、やっぱ照れてるんじやんよお。こ
のこのお！

捻くれながらもそんな風に照れてる比企谷君の気まずそうな表情
に胸がほわつと暖かくなつた私は、次の瞬間、左半身に絶対零度の冷
氣を浴びせられた。

ひいっ！とそちらをチラ見すると、美少女三人からの満面の笑顔を
頂きましたありがとうございます。

「……ととと隣失礼しまくしゅ……」

「お、おう、ど、どうじょ……」

すっかり忘れていた恐怖を再確認した私は、震える足を大地に打ち
建て、甘噛みし合いながらもついに比企谷君の隣へとちよこんと座つ
たのでした。

…………遠いなつ！椅子まで遠すぎだよ！

座るだけでどんだけ尺使つてんのよ。一体この教室東京ドーム何
個分なのん？

※※※※※

「改めましてようこそ奉仕部へ。私はこここの部長を務める雪ノ下雪乃
よ」

「やつはろー、あたしは由比ヶ浜結衣です！ゆきのんとヒツキーとあ

たしの三人でやつてる部活なんだー」

「どもですーーーご存知かとは思いますが、わたしは総武高の生徒会長
一色いろはです☆」

あざとさが中途半端。やり直し。

なんだつたら、学園のアイドルう！ いろはちやんだよーつ！ くらい
突き抜けちゃつた方が一部ではウケがいいわよ？

「……え、えと……わ、私は海浜総合の一宮美耶と申しますう……」

それに対しても、コミュ障女のこの切なさよ……昨日までは全く無関
係で無関心だつたことで、特に緊張なんかせず普通に話せてたつての
に、関係があるリア充共だと意識しちゃつた途端に心臓ばつくんばつ
くん！ ワキ汗とか超心配になつちゃうレベル。

まあ今さらそんなこと嘆いてたつてしゃーないよね。

とりあえず自己紹介が済んだ私は、ずうつと気になつてたことを聞
いてみることにした。ひそひそと隣の比企谷君に。

「……ね、ねえ比企谷君」

「……あ？ なんだよ」

耳元に手を当ててひそひそ話するもんだから、とにかく近い近い。
私つたらドツキドキ！

その近さに比企谷君も動搖が隠しきれないようで耳を真っ赤にし
ててなんか可愛い。やばいカプツとしたい。煩惱退散変態退散！

「……前から気になつてたんだけどさ…………そもそも奉仕部つて
……なに？」

そうなのだ。そもそも奉仕部つてなんだよ。

でも一番意味が分かんないのが……

「……なんで比企谷君がこんな怪しげな部活に入つてるの？」

一応折本さんからはふわつとした話は聞いたんだけどさ、奉仕とか
ウケる！ くらいしか情報入んなくて……」

それ実質情報ゼロです。

そーなんですよね。キングオブボーッチ自称するこのリア王が、わ
ざわざ自らこんなハーレムに足を踏み入れること 자체がおかしいの
だ。

だから私はカプツと甘噛みしてみたい欲望を抑えて、この際だから聞いてみた。でも尋ねるフリしてほんのちょっとだけフツと息を吹き掛けでみたら、ふるふるビクウツとしてとても可愛かつたです（小並感）

ハツ!?殺氣!?

「……ああ、奉仕部つてのはなんつーか……まあ早い話が悩める生徒のお悩み相談室つてところだな。で、場合によつては最小限の手助けをするつて感じか。あくまでも依頼者の自主性を促す程度にな」

ほうほう成る程成る程。そこまで聞いて理解できたことはひとつだけ。

いやいや高校の部活動にそんなもんねえよ普通。それ生徒の仕事じやないでしょ。生徒が生徒の自主性を促す為の手助けって……でもまああの雪ノ下さんが部長を務めるつて部活であればちよつとだけ納得。ノブレス・オブリージュ精神つてやつかな。なんなら彼女が立ち上げたのかも。

……だつたらさら不可解。自称ぼつちがノブレス・オブリージュつて……

「……で、まあ俺は……とある理由で残念女教師に強制的に入れられた」

残念女教師……？あつ（察し）

「……あなた達はなにをこそこそと話しているのかしら……

その……とても不快なのだけれど」

残念女教師で全てを察した私に、いきなり冷や水がぶっかけられた。

やつばい。ついつい比企谷君の真つ赤な耳に夢中になりすぎるあまりに（夢中になるポイントが違う件）、現状を忘れてました。

冷気を感じる方向へと目をやると、私は三人の美少女にゴミでも見るかのような視線を向けられていきました。

やだ、沸き上がる欲望が顔に出ちゃつてたのかしら。カプツとかフツじやねーよ私。よくこんな状況で欲情できるわね。

「ごめんなさいー！ちょ、ちょっと奉仕部つてのが一体なんなのか

なあ？と気になつちやいまして……え、えへへ……？」

相変わらずセリフと表情が卑屈である。

まさに貴族様と下民。私もノブレスにオブリージュされちゃおうかしら。

「「…………」」

どうやら私の言い訳は不発に終わつたようだ。

そりやね！だつて内心ではただの欲情色魔でしたもの。

まつたく……これだから長年ぼつちで恋愛に耐性の無い処じ…………どうしよう、実は私つて意外とむつりなのかしらん？……お、女の子だつて、男の子と同じようについついムラムラしちやうことだつてあるんだからね！？

自身の知られざる肉食系の血と性癖に軽い戦慄と興奮（？）を覚えていると、ついに雪ノ下さんの口が開き、この場を戦場……もとい首刈り場へと変貌させるこの言葉が発せられたのだつた。

「……まあいいでしよう。…………それでは、尋問を再開しましようか」

やつたね！どうやら尋問に間に合つたみたいだよつ？（遠い目）

つづく

【後日談⑥】元ぼつち達の青春ラブコメはこれからだ
!

「…………それでは、尋問を再開しましようか」

雪ノ下さんのその言葉と共に、ここ総武高奉仕部部室に試合開始のゴング（心音）が打ち鳴らされた。

さあ！ついに始まりました、この世紀の一戦！実況と解説は奉仕部の王子様（ほうプリ）でお馴染みの比企谷君の唯一の……ゆ、い、い、つの友達であるわたくし二宮美耶がお送りさせて頂きます！

なにせ私はこの場でたった一人の無関係な存在、そう。フリーだからね。

もうなんで呼ばれちゃつたのか分かんないくらい超フリー。スーザーフリー。

スーパーザーフリーはちょっとヤバいですね。ヤリサー、ノーセンキュー、ヤリサー、ドンタアツチミイイー。

そんなこんなでこの場に存在すること自体が不思議なくらいに無関係な私は、一切関わることなく、一切口を開くことなく、ただただ淡々と実況解説というお仕事に集中したいと思つてゐる所存であることをここに宣誓いたします。

「さて、それでは二宮さん。まずあなたにお聞きしたいのだけれど」
……瞬殺で宣誓を断念せざるを得ない模様です。

※※※※※

「は、はひ」

はひってなんですかね。逆に瞞みづらくないですかね。

そこはひやいとかはいいの方々がGoodなチョイスだつたんじゃないかしら。

「色々と聞きたいことはあるのだけれど、とりあえずまず聞かせて頂きたい事があるの。

あなたが来るまでにも散々この男を聞いただけれど、あまりにも有り得ない寝言しか言わないで困っていたのよ」「え、えと……有り得ない寝言とはいつたいなんなのでしょうか……？」

ハツ!? ま、まさか昨日私が告白しちゃったこと吐いちゃってないわよね比企谷君つ!?

振られたのにまだ未練たらたらのバレって、さらに先ほどの欲情つぶりを見られちゃってるとかマジヤバくなーい?

LOVE感情の有無が未確定ならいくらでも誤魔化しようはあつたけど、それバレちゃつてたらスマキにされて屋上から吊されちゃうじゃない。

でも比企谷君と二人でくんずほぐれつスマキにされるならそれはそれでアリかもじゅるる。

「あ、あのお……」

と、また危険な欲情に意識を支配されながらも、そこはリスクマネジメントをきつちりと行う私ですよ。

なにせ一昔前はそこのいろはすちゃんばりに計算高く生きてましたので。

確かに“有り得ない寝言”発言は気になつたんだけど、その前の“色々と”と言う部分もバリバリ気になつちやつてます私。

多分そこをスルーしちゃつたら、完全下校時刻とか一切関係なく骨の髄までしゃぶり尽くされて、しなつしなの干物みたいにされちゃいそうなんで、ここだけは事前に用意しといたセリフを言つて予防線を張つておこう。

「そ、その……うち、親が厳しくってえ……結構早い時間に門限とかあるんでえ……あ、あんまり遅くまでは居られないかな……なんて……?え、えへ?」

だからなんでいちいち卑屈な笑いが出ちゃうのよ。どんだけ下民なんだよ。

一応私はお客さまの立場でここまで来てやつたわけだしい?カスタマーサイドからのお客さま目線で物事を見て同意してもらえない

かしら的な？アグリーしてもらえないかしら的な？

おつとやべえ、ついクセでこないだの全校集会でのうちの会長のナンセンスな世迷事が。

「……あら、そうなの。それは非常に残念だわ。一応夜は自宅も時間も空けてあつたのだけれど。

まあこちらから一方的に招待してしまつたんだものね。それでは残念だけれど質問は最小限にとどめておくとして、早めに済ませましょうか」

……………あつぶな！……………いやいや超あつぶな……………！

夜は自宅と時間を空けてあつたんですね。いえいえお気遣いなく。なにさらつと「自宅監禁する気まんまんだつたのに残念ね」みたいに顔してんのこの人。危なすぎなんだけど。

やっぱ先を見越して早い段階からのホウレンソウ（報告連絡相談）つてカラダに大事！

「あれー？でも二宮先輩、昨日はまあまあ遅くまで先輩とお茶してた上に、そのあとさらに二人でしつぽりとどつかに消えて行きませんでしたつけー」

こつ、小娘ええ！

あんたなに余計なこと言つてくれちゃつてんのよ!?
せつかく逃げ道用意しといたのに！

「……あら、そういえばそうだつたわね。私としたことがついうつかりしていたわ。

どういうことか説明して頂けると助かるのだけれど」

O H……すんごい冷たい目……

なんかもう常時の比企谷君に向けられてる眼差しと大差ないんじやないかしら。

「……や、やー……昨日は朝から両親とも残業つて聞いてたから……だ、だからちようどいいから比企谷君に会いに来たつてゆーかー……！」

ね！ね！昨日比企谷君にもそう言つたよね!？」

唐突に話を振られた比企谷君は呆れた顔で私を一瞥する。

「あー、まあなんだ……」

裁判長達から見えない角度でばちこんばちこんとウインクして助けを求める。

てかこれって比企谷君の為でもあるんだからね!?こんな危険な裁判、早く済んだ方がいいでしょお!?

「そいやそんなことも言つてたな……。てか確か中学の頃からそう言つてたよな、お前」

ぐつじよぶ。比企谷君グツドなジョブだよ。

私たちしか知らない頃の話を持ち出されたら、検事も証拠の提出は出来ないもんね。

……あれ? そういえばこの裁判、弁護士居ないわね。弁護士ー? 仕事してー?

「そ、そ、そ、そ、そ、もう困っちゃうよねー、過保護過ぎちゃつてー」(棒)
「……だよなー」(棒)

弁護の無い私と比企谷君の、語尾の(棒)が可視化しちゃうくらいの見事な名演技により、裁判長と検事の目がさらに鋭さを増す。やだこれじや八方塞がりじやない。八幡だけに。

「あー、分かる! あたしんちは門限ないんだけど友達には何人か居たんだー。門限ある子つて超大変そうだよね」

弁護士はあなただつたのか!

さすがに懐が深いぜおっぱい弁護士、やつはろー!

「まあその子たちもよく怒られるの覚悟で遊んでたけどね。

なんか遅れるつて連絡する時、女の子の親が電話代われば結構許してくれたりねー」

でもこの弁護士は期待させといて後ろから刺すタイプの弁護士らしいです。

「でもゆきのん一人暮らしだから、親が代わるのは無理だよね」

お? ナイス弁護士?

自ら不利な状況を作り上げて、そこから大逆転で巻き返す敏腕さん

なのかな？

「あ、でもだつたらウチでも大丈夫だよ？ママ上手く電話してくれるとと思うし！」

「ならわたしの家でも余裕ですよー。よく友達泊めるんで
ふええ……アゲサゲ激しいよう……

一瞬だけ敏腕かと思われた弁護士とどす黒検事がまさかの結託である。刺すどころか前と後ろから口ケランぶっぱなレベル。

さあ、弁護の一切存在しないこの懸案の判決はいかに？

「……はあー、まあいいでしよう。懸念事項は多々あるとはいえ、無理に引き止めるのも酷というものだものね。

このままでは話も進まないし、とりあえずは二宮さんの発言を認めましよう」

やれやれと頭痛を押さえるかのようにこめかみに手を当てながらそう発言する裁判長の雪ノ下さん。

単に雪ノ下さんがとつとと話を進めたいだけの話だとはいえ、なんとまさかの勝訴である！勝訴って書かれた半紙を掲げて走りだしたい気分。そしてそのままどこか知らない国にフライアウェイ。

「それではいい加減に話を進めましようか」

……チツ、即国外逃亡は認められなかつたか。

でもまあとりあえず蜘蛛の糸は垂らされた。雪ノ下さんなら一度言つたことは曲げないだろうし、ヤバくなつたら速攻逃げたるぜ。

ヤバくなつたらもなにも、ヤバくない瞬間があるのかどうか疑問だけども。

とにかくこのプレッシャーの中で、質問は最小限で、帰宅は私の気持ち次第でという言質を取つた策士の美耶ちゃんは、今後孔明を名乗つてもいいかも知んない。

ふふふ、この調子でのらりくらりと躲してタイムオーバーにしてやるわよ？

「それではまずお聞きします」

そしてついに雪ノ下さんからの尋問スタート！
かかつてこいやあ！

「あなた、比企谷くんのなんのかしら」
策士、策に溺れて溺死しました。

Q. 我が名は神龍。どんな願いもひとつだけ叶えてやろう。

A. 願いごと無限にしておくれー！

……それはないぜウーロン……。せめてギャルのパンティーくらいにしておきなさいよ。

てかそれ、どこからどこまでなにからなにまで、なんて答えればいいの……？洗いざらい！

あまりの無慈悲な質問に魂が抜けかけていると、どうやらその質問の意図は私の想像とは違っていたようで、雪ノ下さんはその質問にこう付け足した。

「私たちがなにを聞いても『二宮はただの友達だ』などと寝言しか言わないのよ、この男は。

比企谷くんに友達なんて出来るわけもないのに、本当にこの男はいつたい何を言っているのかしらね。

結局話はそこまでで止まってしまうので困っていたのよ。……で、あなたは比企谷くんのなんのかしら？」

寝言つてそー！？

友達百人どころか一人出来たよ発言でさえ寝言と言われちやう比企谷君を守つてあげたいと思いました（小並感）

でも……へへ、ちやんとこの人たちに……へへへ、二宮は俺の友達だ！って言つてくれるのね……？えへへつ……

……やばい、ちょっと胸がぽかぽかするぞ？

昨日までは友達なんか一人も居なかつた私だけど、そんな私を、私が居ないとこでも友達だつて言つてくれるって、なんて幸せなことなんだろう。友達以上だつたらなお良しなんだけど、それはさすがに贅沢すぎだよね。

思わず隣の席に目頭が熱くなりかけちやつてる視線を向けると、そこには照れくさそうにそっぽを向く比企谷君。ふふつ、なんか嬉しい

なつ。

だつたら私は比企谷君のその想いに応える為に、声を大にして伝えてあげねばなるまいね。

この人たちに、そして比企谷君に。

あなたに届け！マイスウイートハート！

「寝言もなにも、私は比企谷君の友達だよ？

昨日、私たち友達になつたんだよねつ？比企谷君！」

「……ま、まあな」

ふふふ、隣で照れくさそうに悶えてる比企谷君にへへーつて笑いかけた時の雪ノ下さん達の表情を世界中に見せつけてやりたい！なかなか見られないよ？こんな美少女たちのあんな見事なぐぬぬ顔。

※※※※※

ざわざわと室内が騒めく。

まさかあの自らをキングオブボツチなどと宣う比企谷君が、自分から女の子を友達だと認めたなんていう事実が上手く飲み込めないんだろう。

「……にわかには信じられないのだけれど……」

「……あのヒツキーが自分で友達とか認めるとか信じらんないし……！」

「……ぐぬぬ……だから昨日葬つとけば良かつたんですけど……」

なにやらちよつぴり物騒な物言いも聞こえていますが、なんか優越感。

いやいやちよつぴりじやねーよ。葬られちゃうとこだつたのん？

友達だと言われて勝ち誇る私と、友達だと言われて悔しがる美少女3人。

でもちよつと待つてね。実はこれ、全部勝ち誇れないんだけど。

『マジで!? やたつ！で、イニシャルは？』

『……くつ……！ わ、YかI……？』

昨日のあの恥ずかしさ伝説級の告白劇。

あのとき比企谷君、好きな人のイニシャルをY=雪ノ下、由比ヶ浜。

I || いろはすつて答えたのよね。

……え？ なにこれ冷静に考えたら酷い拷問じゃない？

比企谷君が好きと挙げた女の子たちの前で「こいつ友達だから」と宣言されて勝ち誇ってる振られた女の構図。

やだ！ 今更ながらにめっちゃや慘め！

そんな、実は初めから己の一人負けだったことを今更ながらに思い知らせた私の心の慟哭など毛先ほども興味の無い雪ノ下さんが、突然私を死の淵に追いやる。

「……一宮さん。私にはどうしても理解出来ないのだけれど、あなたアレよね……？」

昨日のカフェでの話から察するに、中学生の頃にこれに告白されて散々な振り方をしたのよね？」

「ぐふつ……」

……今の私にそこ抉つてくるの？

死者が鞭打たれ過ぎて気持ち良くなつてきちゃうレベル。

いや、私こう見えてMつ毛はないですわよ？

「確かに以前に比企谷くんから聞いた話では、好きな子にアニメのラブソング集を渡して、それを校内放送で流されてオタ谷くんと呼ばれるようになつたとか、」

ぶわつ……！

突然のとんでもない黒歴史に涙が溢れちゃう！

「自分で結構な仲になつたつもりで何度もメールを送ったのに、返信はだいたい翌朝に『ごめん、寝てたー』しか返つてこない上に、ついには辛抱たまらず告白して振られ、翌朝にはクラス中に知れ渡つていたとか」

……あ、それたぶん折本さんです……

「あ、そーいえばクラス委員同士でプリント回収中にキモい告白して振られて、次の日からナルが谷つて呼ばれるようになったとかも聞いたよね！」

やだそれ私私！

ひいいく……やーめーてー！本人の前で言ーわーなーいーでえー！

「ちょ、ちょっと先輩！わたし初めて聞きましたけど、今はこんななのに中学の時はどんだけお盛んだつたんですか！」

……お盛んて……。でも確かにホントいま考えると、比企谷君つてお盛んだつたわよね。

思春期の男子中学生時代に、へこたれずにそこまで何度も何度も玉砕出来たとか、どんだけ強心臓だつたのよ。

てかこの人、なんで自分の黒歴史を全部語っちゃつてんのよ。実はあなたがMつ毛たつぱりなの？

呆れと、私の黒歴史も発表されちゃつた羞恥とで、少しだけ恨みがましく横を一瞥すると…………、大変！比企谷君がビクンビクンしちやつてるじゃないですか！

どうやらMつ毛はあんまり無かつたみたいです。安心安心。

…………もうやめてあげてっ！

「……たぶんあなたは、比企谷くんのこれら憐れでジメジメとした過去の陰鬱な経験のどれかに関わっているのよね？」

「……は、はひつ……」

大変！私もビクンビクンしてきました。

「……そんなあなたが、果たしてただお礼を言いたいということだけで、友達になりたいという程度の感情だけで、わざわざこの男に会いになど来るもののかしら」

「……だよねー」

「……ですよねー」

「……あんなにきつく抱きついてまで庇おうとするもののかしら」

「……ねー。そんな経験があるヒツキーに抱きつくなんて、普通だつたらキモいもんねー」

「……でですです」

やつぱり抱きついちゃつたこと怒つてらつしやるう！

どちらかと言えば擁護派だつた由比ヶ浜さんまで笑顔がヒクつい

ていらっしゃるだと!?

そ、そしてやはり……!

「……もしかしたらあなた……友情ではない何かの感情があるのではないかしら……?」

「……」

ひいっ! やつぱりそこを探ってるのね!? LOVEがはつきりした
ら除菌滅菌するつもりなのね!?

「……そそ、そんなこと無いでしゅよ……!? わ、私、しばらく友達居なかつたからつ……色々と助けてくれた比企谷君と友達になりたいなあ……つて……」

クツソ……! ホントは分かつてるくせにこいつらあ!!

こうやつて真綿で首を締めるように徐々に追い詰めていつて、言質
が取れた瞬間に始末するつもりなのね!?

「……そう。まああなたがそのつもりがないのならそれで構わないの
だけれど、一応私はこの男が所属する部の責任者。だからこの男を管
轄する義務があるの。

だからこれ以上部外に菌が撒き散らされるのを容認するわけには
いかないのよ」

これ以上比企谷君のフェロモンにまとわりつく羽虫は増えると面
倒だから、ぷちっと潰していきたいのだけれど、という翻訳かしら(白
目)

ちなみに“これ以上”の中にいろはすちゃんも含まれますか?
てかマジで何様のつもりなんですかね。別に比企谷君はあなたたちの所有物とかじやないのよ?

だから私は言つてやつたのさ。ちょっと美人だからって、この傍若
無人な振舞いをする雪女にハツキリとさあ!

「え、えへへ……? た、ただの友達でーすつ……!」

オチが読めすぎワロタ。

※※※※※

……ホントは私の気持ちをちゃんと確認した上で、私も比企谷コ

ミニユーティに引き入れたいのかもしんない。

さつきいろいろはすちゃん言つてたもんね。雪ノ下さんと由比ヶ浜さんは私の事それなりに認めてるつて。

まあ有難いお気持ちではあるけれど、たぶんそれやられちやうと私もこの子たちみたいに関係性に縛られて身動きが取れなくなつちゃいそうなのよね。

精神的なだけの問題じやなくつて、物理的にも盗聴器とか持たされそうで怖いし。

あははー、いくらなんでもそれはないよねー！……ない……よね……？

だから私は決して口を割つてはならない。この気持ちを……そして昨日告つちやつたことを……！ そう、絶対に！
はいはい、フラグ立て乙フラグ立て乙。

「……まあそうまく言うのならいいでしよう」

「ちょー雪ノ下先輩!? そんなの嘘に決まってるじやないですかー? 絶対この泥棒ね…」

「一色さん……？」

「ど、泥棒ね、姉さん……？」

泥棒姉さんつて誰だよ。

まあ仕方ないよね。泥棒のあとに猫つて付けると雪ノ下さんに目で殺されちゃうもんね。

「友達だからー、とか言つて、絶対色んなどこに連れ回す気まんまんですょ? この姉さん!」

姉さん気に入つちやつたの?

てかバレバレじゃないですかやだー。たぶんいろいろはすちゃんも似たような口実でさんざん連れ回したクチね。

「……確かにそれはあるかもしれないわね」

「ですです! で、絶対に行動に移しちゃいますよこの人」

「そう……ね。いざなつた時、体も心も軟弱なこの男が抗えるとは到底思えないわね……」

ちよつと!? 私が比企谷君襲つちやうみたいな言い方やめてくれな

い!?

……ハツ！さつき耳ふーふー見られてたんだつたあ！

ひいつ！なんか顔も頭も熱くなつてきちゃつたよう！

「ぜぜぜ絶対そんなことしないもん！」

「それはどうかしらね」

「二宮先輩は絶対にそういうタイプです。わたしが保証します」

それ自分のことでしょ!?

私、可愛いわ、た、し！全盛期でもあなたほどじや無かつたからね
!?

「まあまあ二人ともー……にのみんだつてああ言つてることだし
さー」

「結衣先輩は甘々すぎです！絶対ですよ絶対」

「……そうかなー？でも確かにそうだつたらやだかも！」

「間違いないです！野放しにすると超危険です！」

ねえ、私つてそんなにメスの顔した肉食獣に見えるの？発情しちやつた性欲旺盛娘なの？

……くつそー！ちょっと頭に血がのぼつてきちゃつたぞ？

「だからあああ!!私そんなことしないつてばああ!!てか出来るわけないつての!!…………だつてつ」

……あ、美耶ちゃん落ち着いて？これあかんヤツや。

「わ、私！昨日告つてバツサリ振られちやつたばっかりなんだからああ!!」

「「「…………」「」」

迅速丁寧なフラグ回収ありがとうございます。

美耶ちゃんたら煽り耐性無さすぎワロス。半年R.O.Mりたい。

……凍り付く室内。これは非常にヤバい。

なにがヤバいつて、振られた女が平気な顔して友達ヅラしてる辺り

がマジヤバい。

比企谷君は気付いてないかもしないけど、振られた直後に「友達でいいから！」とかつて関係を持とうと粘るのつて、それ、未練タラタラ隙あらばつて言つてるようなもんですから。

よし、逃げよう。もう門限の時間だよ？

しかしこの凍り付いた空気をなるべく保たねば、私はすぐさま背後からガツチリホールドされて囚われの姫と化すことでしょう。

だから私はここでこの閉じられたマジックカードを発動しよう。オープ! サクリフアイス八幡!

「……て、てゆーかあ、別に私が比企谷君と友達だろうとなんだろうと、ましてや告白しちゃったことなんて、あなたたちにひとつも関係なくないですかあ…………あれあれく? も、もしかして雪ノ下さん達も比企谷君のこと好きなんじやね…………？」

今更かよ。

……そう。確かに今更なのだが、この今更な現実こそがこのデュエル最強のカードなのだ。

『あんな素敵で可愛い娘たちをはべらせといて、リア充の意味が分からんとか、あなたちよつと世のぼつち達を敵に回すわよ？』

『あいつらはそんなんじやねえよ。单なる部活仲間つてだけの話だ』いくら比企谷君が他者からの好意に鈍感——鈍感という体で気付かないようにしてるだけ——とはいえ、あんなセリフを聞いてしまえば誰にだつて分かる。

この子たちは、ここまで明らかに好意を示していながら、未だ比企谷君には直接好意を伝えていない。

それはつまりどういうことか。

うん。言うまでもなくこの子たちも大概なのよ。この恥ずかしがり屋さんどもめ。

私の勝利の方程式通り、三人はぶるぶると震えながら真っ赤な顔でサクリフアイス（生け贊）を見て固まっている。

「……あ、いつけなーい……もう門限の時間だから、わ、私帰ります

……」

その隙を突いて即座に魔境からの脱出を成功させた私 二宮隊員は、告訴だのキモいだの無理です「ごめんなさいだの」という阿鼻叫喚を背中に浴びながらも、聞こえないフリをして廊下を華麗にダッシュ。

……ごめんね？比企谷君。

結局あなたひとりを犠牲にしてしまった弱い私を許してね？だつて恐いんだもんつ。

さらば魔境、さらば奉仕部。私は二度とここに訪れることは無いでしよう。

……ないよね？てかウチの校門前で待ち伏せからの拉致とかやめてね？

——さて、そんなこんなでついにこの物語のエンディングも近づいて参りました！

そして私は二宮美耶は、たぶんそのエンディングが盛大に執り行われるであろう場所へと颯爽と移動するのでありました。

※※※※※

……さつぶ……随分と陽が長くなつたとはいえ、やつぱり3月の川沿いの夕方は寒いなあ。

私は今、総武高校から私たちの地元方面へと続く川沿いのサイクリングロードで待ち人を待ちぼうけしている。

ま、その待ち人は桃色地獄を味わい尽くして息も絶え絶えかも知れなわけです。

途中で買ったミルクティーもすっかり温もりを無くした頃、ようやく待ちに待つたその待ち人が、死んだ魚みたいな目でママチャリをキコキコ漕いでくるのを視界に捉えることが出来た。

「おーい！」

色々な感情が交ざりあって、つい緩んでしまった自然な笑顔でブンブンと手を振ると、その男の子は腐らせた目をさらにどんよりさせて、心の底から嫌つそうな表情を浮かべながら私の前までやってきた。まったく、失礼しちゃうなー。

まあそりやそうでしようけども。

「……おい、門限はどうした……この裏切り者」

「……え、えへへ～」

「えへへじやねーよ……とんでもない爆弾投げつけて一人で逃げやがつて……」

「や、やー、『めん』『めん』……！ てか比企谷君が悪いんじやん！ いつまでも逃げてばっか居るんだからさー」

「……別に逃げてねえつつうの」

「ふふつ、はいはい、それでいいですよー」

「……チツ」

ま、今は逃げてくれてるほうが助かつちやうし、あれからあの部室内がどうなったか気にならないといえば嘘になるけども、今はまだそれでいいつか。

「てかお前なにしてんの？こんなところで」

「なにって、比企谷君待つてたんじやん。せつかく会いに来たのに、あの部室だけじゃ全然話せないしさ」

「……逃げたくせに……つーがなんで俺がここ通るの知つてんだよ」

「そりやね、あの学校からうちらの地元に帰るんなら、ここサイクリングコース一択でしょお。へへ～、一緒に帰ろつかな～って思つてさ」

さすがにもう校門前とかで待てるほどH P残つてないし。

「……さいですか」

ふふふ、照れてる照れてる。

まあ腐つても昔は惚れられてた女ですよ。ちょっと積極的になつてやれば、照れさせちゃうくらいならワケはないのです。

あ、腐つてと言つてもキマシタ方面の腐りでは無いので悪しからず。

それはそうと、コミュ症ばつちな私が、仮にも氣がある男子とこんなに自然に会話出来るつてのも不思議な話だよね。むしろ一番話しやすい間である。

確かにドキドキするし顔だつてニヤケちゃうけど、なーんか一番上に来る感情が“安心”なんだよね。

ふふつ、やっぱこれはぼつち根性同士のニュータイプな引かれ合い方なのかな？

むむ……これって恋愛感情としてはどうなんだろう？やっぱ友達感情なのかなあ。

まあ恋愛なんてしたこともなければ、気の置けない友達が出来たことも無い私にはまだよく分かんないや。

でもひとつだけハツキリしてることは、告白して振られちやつた昨日よりも、今日はもつと比企谷君のことが好きになつてきちゃつてるつてトコかな。

恋愛愛情友情どれにしたつて、やっぱ私は比企谷君と一緒に居たいんだなう……って強く思う。

だから私はその欲望に忠実に生きて行こうではないかね。だつて今のは青春リピート中なんだもの。

二人してママチャリを押しながら歩くサイクリングコース。私は隣を歩く比企谷君に話し掛ける。

「ねえねえ比企谷君つ

「……あん？」

「今度さつ、一緒にどつか遊びに行こうよ！

土日でもいいし、もうちよつとしたら春休みだから、そこでも遊べばいいし！」

「え？なんで？」

「いやいやちよつと、なんでもなにも私たち友達じやん。友達だつたら遊びに行くでしょ、普通」

「やだよ面倒くさい。友達つて休みに遊びに行かなきやいけない生き物なの？」

休日つて漢字分かるか？休む日つて書くんだぞ？休むどころか疲れに行つたら休日さんに失礼だろ」

「うつわ……想像以上にめんどくさ～……」

ま、ある程度予想はしてたけど、これは一筋縄じやいかないわね。

……とはいえ！

私の比企谷君との嬉し恥ずかし友達ライフは、こんなことで揺らぐわけがないのである。

奇跡的ではあるけれど、あの魔境を無事逃げ出すことが出来たこの私様を舐めないで頂きたいわね。

「……ふーん、まつ、いいけどねー。……あ、そうそう、折本さんから比企谷君に伝言があるんだつたー」

「いやいきなりだな……なんかあんまり聞きたくないんですけど」

「折本さんもさ、比企谷いつ遊びに行けるー？だつてさー。

出来れば二人がいいけど、比企谷が照れくさいって言うんなら私と三人でもいいからつてさ」

折本さんからの伝言に顔をしかめる比企谷君。

「……は？ なにそれ、いつからそんな話になつてんの？」

「昨日カフェで去りぎわに言つてたじやん。『今度どつか遊びに行こうよ、んじや約束ね！』つて」

「いやあれ断つたろ」

「ふふつ、残念ながら折本さんの中では約束取れちゃつてるみたいよ～？」

だ、か、らつ……」

そこまで言うと含みをもたせるかのようにじっくりと蓄めて、ウシシと悪顔で比企谷君に迫る。

「……もしも比企谷君が私の誘いを断るようなら、折本さんに『比企谷君、家に来てくれつてさー』つて嘘ついて、二人で比企谷君ちに押し掛けちやおつかなく……？」

たぶん超大変だと思うよ～？ 折本さんに押し掛けられたら

「…………お前さつきといい今といい、ホント最悪な……」

呆れ果てた顔で見られちゃつたけど、そんなの気にしませんよ？

だつて、あの子たちと比企谷君が足を踏み出し切れずにまごついてるうちに、その隙について私は比企谷君との確固たる友情（やらなんやら色んな情をね♪）を結ばなきやなんないんだからつ。

「比企谷君が私の召集に大人しく応じてくれるんなら、折本さんには

上手く言つといてあげるよー?」

とはいっても三人で遊ぶのもなかなか楽しそうだし、いざれは秘密裏に実現させちゃうかもだけどね。

「……くつそ……マジで面倒くせえな……」

ホント強情だなあ……こんな可愛い女の子と一人で遊べるのがそんなんに嫌なのかい? ちょっと傷ついちやうよ?

ふつふつふ、でもあと一押しかな。

「いいじyan! 私と一人だつたら絶対樂しいつてばー。……ほら、例えれば大友な比企谷君じや一人では絶対に観に行けないプリキュアの映画だつて、私と一緒だつたら観に行きやすいよ?」

「?」

「別にプリキュアじやなくとも、スーパーヒーロータイム劇場版でもプリパラ劇場版でもなんでも守備範囲だしさ」

まあプリパラは他にも観に行きたい子が居そうだけ……

「ぐぬぬ……」

よし、かなりグラついてるご様子。これはもらつた。

「それにほら、別に映画じやなくともさ、それこそ比企谷君ちでも私んちでもいいし!

友達とマリカーとかスマブラとか出来たら超樂しそうじyan! 友達と対戦ゲームした経験が無いぼつちゲーマーとしてはさー

「それはいいや、なんか襲われそうだし」

「襲うかバカあ!!」

——未だ二人のお出掛けを済る比企谷君ではあるけれど、私たちの地元まではまだまだあるし、辿り着いちゃうまでには落としてみせようぞ!

二宮美耶17歳。

あんなライバルこんなライバル数多く、敗色濃厚ではございますが、ただいま絶賛まちがつてしまつた青春ラブコメを取り戻し中です

!

終
わ
り

【特別編】メリークリスマス with 元ぼつちーズ☆

街に響くよジンゴーベツ。街を彩るイルミネイツション。街が煌めくサイレンナイト。

——あの自爆告白から幾年月（九ヶ月ですがなにか）、ついにこんな元ぼつちな私にも、この聖なる夜なホーリナイトがやつてきたのです。

『ねえねえ美耶ー』

『……な、なんでしよう』

『クリスマスってどするー?』

『……は？ いやいや私たち受験生なんですけど……』

『なーに固いこと言つてつかなー。高校生活最後のクリスマスくらい、ぱあくつとやろーゼー！』

『そーだよミヤミヤー！ ぱあくつとやろうよぱあくつと！』

『だからミヤミヤ言うな。……い、いや、私ちよつと……』

『…………あ、まさか比企谷と約束あるとかぬかす気……？』

『つ……ナ、ナンノコトデシヨーカ？』

『はあ？ ちよつと信じらんない！？ 美耶さつき私たち受験生なんですけどとか言つたよね!?』

『……』

『うつわ超うらぎりー！ ミヤミヤのうーらーぎーりーもーのー』

『もうあつたまきたー。……うん、あたしもそれ一緒に行くわ。あたしも久しぶりに比企谷と遊びたいし』

『……は？ いやいやちよつとマジでやめてね!? 私がどんだけ苦労してクリスマス勝ち取つたと思つてんの!? やめてえー！ 私のサインナイを邪魔しないでえー！』

『あ！ 逃げた！ 千佳捕まえろお！』

『いやなんですよ、あんたが行けよ』

と、山あり谷ありな終業式を二日前に乗り越えて、私は今、とある場所で比企谷君を待つてゐるのである。

てかホントあぶなかつたよ。おかしいな、あんなにすぐバレるなんて。ロイヤルストレートフラッシュ並みの私のポーカーフエイスはどこ行つちゃつたんだよ。

……フツ、私もいつの間にか世間のぬるま湯に飼い馴らされたもんだぜ……（もともとすぐ顔に出やすい、嘘の吐けない素直な女の子でした、てへ）

まあそれはそうと、そう何度も折本さんに足引つ張られてたまるかよ。

マジ私がどんな苦労してこの日をゲツツしたと思つてんのよ。もう半べそかきながら土下座する勢いで拌み倒したんだからね……？なんならリアルに膝まで付いて、必死で止められたまである。私必死すぎだろ。

いやいやだつてさ、こちとら中二の夏前くらいからは、友人関係つてヤツに対して軽く病み始めましたんで、友達と過ごすクリスマスなんて実に五年ぶりなんですよ。そりや必死にもなりますつてば。え？ ジやあ今までクリスマスはどう過ごしてたかつて？ ウフフ、そんなの愛しのカレと過ごしてたに決まってるじゃないですか。ちゃんと録画しといた当時の俺の媚を、ツリーのライトだけがキラキラ光る薄暗い部屋で一時停止させて、一人で話し掛けたり一人でケーキ食べたりと、二人つきりの素敵な夜を過ごしましたとも！

……しくしく……痛いようイタいよう……

酷いよつ……！ こんな日に思い出さないでよ私つ……！

なんなの？ 勇者なの？ 自殺志願者なの？ （白目）

——しかし彼と再会してから、そんな黒歴史……いやさ闇歴史など、とつくに追憶の彼方へと飛んでつちやつたのさ。……思えばこの九ヶ月、比企谷君とは本当に色々あつたなー……

奇跡の再会（痴漢被害）から始まり、今や思い出すだけでも血反吐を吐ける自爆告白。

そして初めて二人で遊びに行つた春休み（劇場版プリキュア）では酷い目に合い、比企谷君の誕生日では酷い目に合い、ついにあと一步で比企谷君を押し倒せるんじゃね？ ハアハア。……と思えた初めてのマイルームお招き回では、突如折本さん達が部屋に乱入してきて酷い目に合い。

こうして考えると酷い目にしか合つてなかつた。

そんな私が、ついについにこの良き日を迎えたのである。勝つたなガハハ！

今日だけは誰にも邪魔されたくない。なにせどつかの邪魔者どもに先を越される前に、九月にはこの日の予約入れといたからね。

三ヶ月前に予約しないと無理とか、あんたどここの予約の取れないレストランだよ。美味しく頂いちやつていいのかな？ むしろ美耶ちゃんを美味しく召し上がれ☆ ハアハア。

そんな、モザイクがかかる」と必至な脳内妄想に今日も黙々と悶々と励んでいると……

「……おう、待たせちまつたか。悪いな」

おつと、ちょっと飛びすぎてたよ。いつの間にか待ち人のご到着である。ヨダレヨダレ。

「んーん？ 私もいま来たトコだよつ

やだなにこの模範回答。よくできました。

デートに小慣れしてるイケてる女感でまくつちゃつたかしら？

これはもうハナマル貰つちゃうしかないつしょ。ちなみに私にとつてのハナマルは、比企谷君の頭なでなでだゾ！

「そうか。んじや行くか」

「お、おう……」

とまあこうして普通に頭なでなでなどして貰えるワケもなく、それどころか普段よりもずつとお洒落にキメている私に目もくれず、とつ

とと夢の国に向かつて歩き始めるいけずな比企谷君まじクール。

ちよつと？ いつもはなんの変哲もないリボンで適当に結んでるボニテだつて、今日はクリスマス仕様のモコモコなシユシユに変えたりしてんのよ？ 美耶ちゃんちよつと可愛く仕上がつてない？ ね、ねえホントにそのまま行つちやうのん？ ……うん、ですよねー。さてと、軽く涙拭いてつと。

ま、比企谷君が私の私服姿に触れてこないのなんていつもの事だし、実はこつそりと私をチラチラ盗み見して惚けてるのも知つてたりするから、この件は不間に処すとしよう。この照れ屋さんめ。

それよりも、軽く流しちやうトコだつたけど、もう一度言おう。比企谷君は夢の国に向かいました。

そう、私達が待ち合わせしていたのは舞浜駅改札前。そしてこれら向かうはリア充女子（笑）がクリスマスに彼氏と過ごしたい率N.O.1（当社比）のあの夢の国。そう、ディスティニーランドなのです！ ホントはランドじゃなくて、もつと大人／＼ない雰囲気になれるアツチが良かつたんだけど、なぜかそつちは私の担当じやない気がしたのよね。担当つてなんだよ。

そんなこんなでついに！ 私 二宮美耶とそのお友達の比企谷八幡君との、ドキッ！ 初めてのクリスマスデート♪ がスタートするのであつた！ ポロリもあるよ☆

※※※※※

「うつわあ……私これ初めて見たよ……！ すつごいね」

十八年もの長い間、千葉で立派に育つてきたというのに、なんとクリスマスのディスティニーランドが初体験な私は、初めて見るディスティニーの巨大なクリスマスツリーに感動していた。

十八年間立派に育つてきたわりに、胸部の辺りはあんまり育つていのね、つてうるさいわ。

「だな」

どうしよう。胸部問題を即答で肯定されちゃつたわ？

いやいや、今の「だな」は、ツリーがすごいという意見に対しての同意だからツ（涙目）

「えつと、比企谷君もディスティニークリスマスは初めて？」

「いや、クリスマス当日は初めてではあるが、当日じゃなければ去年來たな」

「……ふ、ふーん」

誰よ!? どこの誰と来たのよお!?

と、ホントは気が気でない私ではありますけれども、そこはほら、あんまり束縛が強いとウザがられちゃいますから？ そもそもまだ恋人でもなんでもねーし。

だから私は全然気になりませんけど？ と、得意のポーカーフェイスを駆使してこの場をやりすごすのである。

「……どうかしたか二宮。なんかすげー面白い顔してつけど」

「なんでもにやいから！ ……てか面白い顔ってどんな!?」

私どんだけ顔に出やすいんですかね。

そしてつい出来ちやつたナチュラルな顔がすげー面白い顔って……

でもでも私は負けないので。どうせアレでしょ？ 去年の合同クリパ関係で雪女達と来たとかそんな感じなんでしょう？

ウチの前生徒会長がさんざん迷惑かけたらしこうて折本さんから聞いてるよ？

だから私はそんなの気にせずに、むんずつと比企谷君の手を握つて引つ張りはじめるのだ。

「てかいつまでもこんな無駄な時間過ごしてたら勿体ないってば！ ほら早く行こ」

「ちよ、お、おい」

——ぶつちやけ、私の比企谷ハーレム内カーストは最下層である。まあそりやそうよね。めちゃくちや出遅れてるくせに、学校違うから一緒に居られる時間も短いんだから。

ちなみに華やかさでも連中に勝ち目の無いどうも二宮と申します。でもそんな私にも、の方たちに唯一勝っているポイントがある。

それはこれ。

「……なあ、手え離してくんない……？ 恥ずかしいんだけど」

「えへへえ、いーじやん友達なんだもん！ 友達つてのは手を繋いで歩くもんでしょ？」

「……それはガキの頃限定だろうが。あと女子同士。なんで女子同士つて恥ずかしげもなく手を繋いで街を歩けんの？ 男友達同士でアレやつたら阿鼻叫喚だぞ」

「大丈夫だよ。一部には涙と鼻血流して喜ぶ層もいるから」

「全然大丈夫じやなかつた……」

そう。友達という便利なワードを笠に着て、恥ずかしげもなく手とか繫げちゃうと。

なにせ私、比企谷君に対して散々醜態晒しちゃってるんで、比企谷君相手だとこーゆー恥ずかしい事も、あんま照れずにガンガン攻めてけるのよね。

友達友達言いながら、好き好きアピールも超しちゃってるし。

これはあのいかがわしい奉仕部関係各所の、恥ずかしがり屋さんでツンデレな面倒くさい方々には無理な所業なのである。

さらに私には、このまま仲良しのお友達で居られれば、もう少しで他のライバルに大幅に差を付けられるあの作戦が待っているのだからはははは。

てなわけで、せつかくのクリスマスだし今日でキメちゃうぜ！ なんて無理に焦らずに、今日も今日とて仲良く手を繋ぎつつ、少しずつ追い上げて追い越してみせようぞ。

まあさすがに照れが限界だつたのか、しばらく歩いてたらペシつと引き剥がされちゃつたけどね。

そして私達はキラキラなクリスマス色の夢の国へと、不思議の国のアリスのようにワクワクドキドキで迷い込んでいくのであった。

よつしや、たっぷり楽しんじゃいましょー！

※※※※※

ブロロロロ……

各地を転々と遊び回ってきた私達。辺りはすっかりとクリスマスなイルミネーションでキラキラと輝いている。

え!? もう!? もう夜なの!?

え、ちょ、おかしくない? な、なんかさあ、もつとこう、色んなアトラクション巡つたり、チュロスとか食べたりレストランで語り合つたりみたいな、アハハウフフでイチャイチャちゅつちゅな物語が繰り広げられるものなんじやないの?

ブロロロロ……

だがしかし、そんなイチャイチャちゅつちゅなストーリーを語る事も許されず、現在私は比企谷君の運転するゴーカートに乗っている。ディステイニーでゴーカートつて……しかも遅つ! 尋常じやなく遅いわエンジン音うるさいわで、夢の国の面影皆無ですわコレ。数あるアトラクションの中で、唯一語られるチヨイスがコレって、ちよつと渋すぎやしませんかね。

一瞬で夜になっちゃつてるとかアトラクションがゴーカートとか、二宮美耶の物語だからと言つて、軽く手を抜いてません?

これはクリスマスディステイニーデートの詳細なイチャイチャ内容を、大幅加筆修正希望待つたなしですわ。

「どうした、なにぶつぶつ言つてんの?」

「……お、お気になさらずに」

どうやらメタ過ぎな脳内思考がダダ漏れだつた模様です。

……でもね? ディステイニーでゴーカートだからといつて馬鹿にしちゃいけないのよ?

夢の国に存在するには現実的過ぎてシユール過ぎるこのゴーカート、なんと来年の一月にはついに閉鎖されちゃうみたいで、「だったら今のうちに!」と、ディステイニーファンの間で地味に盛り上がりてるらしい、こう見えて今大人気のアトラクションなのである。

ブロロロロ……

と、とはいえたムードのかけらも無いわね、このうつさい音

⋮⋮⋮

いや、まあいいじゃないですか。比企谷君が運転する助手席に乗つてるなんて、なんか将来の予行練習みたいだし。

それに、昼間に乗ると「あれ？ 私どこに遊びに来たんだつけ？」と、思わずディスティニーに遊びに来た事を忘れさせてくれること請け合いな、場違い感溢れるこのゴーカートも、夜であればなかなかのムードなのよね。

ディスティニーの光り輝く夜景を見ながらの素敵なドライブ。うん、なかなか女の子の夢が溢れてるじゃない。

ブロロロロ⋮⋮⋮

「⋮⋮⋮」

「⋮⋮⋮」

だ、だめだ……いくらポジティブに考えようとしても、どうしてもこの音とスピードが思考を現実に引き戻させやがる……なぜ乗つたし。

「……寒み一わ遲せ一わうるせ一わで、なんかつまんねえな、これ」「やめて！ 今回のディスティニー回での唯一の見せ場なんだからディスらないで！」

「⋮⋮⋮？」

とつても訝しげな視線をぶつけてくる比企谷君は全力でスルーして、せつかくのドライブデートなんだし、ここは楽しいトーキングタイムと洒落込む事にしようかな？

「ねえねえ比企谷君つ」

「ん？ どうした」

「勉強はどう？ 順調に進んでる？」

「おう、まあな」

「えへへ、そつか……！ 楽しみだね、キャンバスライフ」

「……まあ、その……なんだ。大して楽しみってワケでは無いが……悪くも、無いな……」

「ふふつ」

——悪くもない。

自称ぼっちな比企谷君が、来たるキャンパスライフに向けての思いを、なぜ私にそう語るのか。

それは！ 私と比企谷君が、来年から同じ大学に通うからなのである！

そう、これこそが並み居るライバル達を置き去りに出来る可能性を秘めた私の作戦なのだ！

「しかしながら、楽しみもなにも、お前ギリギリであぶないレベルだろうが」

「ぐはッ」

通うからなのである！ ジャンキー。単なる希望的観測だった。「本気であそこ狙つてんなら、お前の学力じゃ貴重な一日をこんな風に遊び惚けてる場合じやなくない？」

「ううう……いいんだもん！ 人生には程よい息抜きだって必要なんだもん！」

「……お、おう」

あまりにも必死なサボり宣言に超引かれました。

でもこれホント。あの日比企谷君とクリスマスデートに行けたら……あそこで心身ともにリフレッシュ出来たから、私志望校受かったんだよ？ って、言える日が絶対来る気がする。たぶん。恐らく。来るといいな。

とにかく勉強し過ぎて煮詰まっちゃってた頭には、たまにはこんな幸せな休息が大事なのです。

おつと危ない危ない。受験生とした事が、煮詰まるを誤用つてたよ。ふふふ、ここテストに出るよつ？

しかしそんな私の想いとは裏腹に、未だに引き気味の比企谷君はなんと意地悪なのだろうか。

だから私はちよつぴり唇を尖らせて、拗ね気味にこう言つてやつた

のさ。

「……じゃあ、さ？ ……比企谷君は……今日一日楽しくなかつた……？ 勉強疲れの頭と身体をリフレッシュ出来なかつた……？ 私は超楽しかつたし、よーし！ 明日からもつと頑張るぞー！ つていう活力湧いて来たんだけどなー……」

フツ、そしてそこからの、不安げな潤々上目遣いのコンボでトドメですよ。

なんか最近、比企谷君がどのレベルだとあざといと感じるのか、もしくは照れるのかが分かつてきただのよね。八幡検定一級ちようだい。「……や、別に……なんだ。……まあそれなりに楽し……そんな感じつちやそんな感じだし、いい息抜きには……なつたな」

ぷつ、チヨロつ。チヨロ過ぎるぜ比企谷君。私の計算どおり、真っ赤になつてそっぽ向いてるじやない。

一応いま運転中ですよ？

「ふ、ふふ、ふーん……つ。……そそ、そつか」

いやだわ、私も超チヨロかつたみたい。

何だかんだ言つて、私とのディステイニーデートが楽しかつたと言つて照れちゃつてる比企谷君に『デレデレになつて、赤いほつペを人差し指でかりこり搔いてるどうもチヨロインです。

そんなちよつぴり幸せ桃色空間になつちやつた車内だけれど、残念ながらそろそろゴーカートのゴールが目前のご様子。

さんざんケチ付けたこのアトラクションではあつたけど、比企谷君とのドライブデート、なかなか楽しんじやいました！

「お、もう到着するみたいだし、比企谷君が『デレ』たところでそろそろ次いきますかー！」

「……『デレ』てねーよ」

それはない。

「……？ おかえりなさーい！」

この寒いのに、なぜか手でぱたぱた顔を扇ぎながら帰つてきた比企谷君を見て、不思議そうな顔をしながらも笑顔でお出迎えしてくれる

女性キヤストさん（可愛い）に見守られて、このシュールなドライブデートも終了です。

「よいしょっ」と先にゴーカートから降りた比企谷君に、私はそつと手を伸ばす。私の手を引いてゴーカートから引っ張り上げてね！

という意思表示である。

もちろん他意はない。ただこのゴーカートって乗り物、普通の車と違つて車高が低すぎて乗り降りしづらいのだ。

だからあくまでも立ち上るのが大変だからなのであって、そうやつてまた自然と手を繋いでやろうとか、そういう他意は一切ないのである。無いつたら無いやい。

「……はあ、ほれ」

そして、やはり比企谷君はなかなかのジエントルマンであるから、こうやつて面倒くさそうに溜め息を吐いても、恥ずかしそうに手を貸してくれる。萌えるぜ。

「えへへ、ありがと。んしょつと」

そんな捻くれ王子様に手を引かれて白馬から降りるプリンセスな私。

まあいかんせん馬じやなくてゴーカートだから絵面は相変わらずシユールではあるんだけど、私はいつだつてLOVEフィルター越しで見られるから平気だゾ！

が！

「……あ」

「……あ」

「……もう一度言おう。このゴーカートという乗り物、乗り降りがしづらいのだ、と。

慣れない位置から慣れない立ち上がり方をしたもんだから、その、なんつーの？ 足がさ、ちよつと……てかだいぶ？ 開いちやつたんですよ。これがまたパツカリと。

私が今日気合い入れてミニスカートなんて履いてきちゃったもんだから、私を引っ張り上げようとしてくれてる比企谷君からは、うん……開いた足と捲れ上がったミニから、ね。うん。丸見え？　的な？　もうね、チラリズムとかそういうレベルを逸脱しちゃってました。

私の勝負パンツ（桃色）が。

「……Oh」

なにが恥ずかしいって、比企谷君から丸見えになっちゃった状態を女性キャストさん（可愛い）もバツチリ見ちゃって、もんのすごく気まずそうに苦笑いしてる辺りがマジ恥ずい。

よし、ポジティブに考えよう。キャストさんが女性で良かつたね♪

「……えっち」

「……すまん」

えつちもなにも私がからご開帳しちゃったんですけどね！

でもこういう場合、例え女の子が加害者としても、容易に被害者になれるって超ラッキー。まあ比企谷君もラッキースケベをじつくり堪能できたわけだし、これはまさにWin-Winな関係ってヤツですね。それアグリー！

——こうして、残り少ないクリスマスデイステイニーは、加害者兼被害者の強い要望で、この後は問答無用で手を繋いだまま行動する事が決定したのです。それある！

ただ、お互い真っ赤な顔して手を繋いでアトラクションを去つていく時の、女性キャストさん（可愛い）からの怨念めいた生ぬるい視線がかなり痛かったです。

だつたらクリスマスに仕事なんて入れなきやいいのに。

でも社会人はそういうわけには行かないんだよね。やはり嫁ぐのがジャステイス。誰かさんに養つてもらわねば。

あ、でもどうしてもつて言うなら、私が養つてあげるからね♪

※※※※※

「あく、やっぱーい！　超楽しかったあ」

あのラッキースケベのあと……違つた、ゴーカートのあと、クリス

マスバージョンなエレクトリックパレードも夜空を彩る花火も思いつきり堪能し、私は満面の笑みを浮かべて舞浜駅へと歩いている。もちろん手はずつと繋ぎっぱなしである。

……なんかクリスマス記念にしては尺短くない？ まあ、超樂しかったからひとまず良しとしようか。求ム、大幅加筆修正。

「へつへく、すづくいい息抜きになつたよねー！ これでお互い受験戦争に勝つたなガハハ！」

「まあたぶん俺だけ受かつてお前は落ちると思うけどな」

「ガハツ！」

美耶知ってるよ？ そんなのただの照れ隠しだつて事くらい。

……ね、ねえ、单なる照れ隠しだよね……？ （涙目）

「クツ……まつたく、比企谷君は意地悪だなあ……ホントは一緒の大学行きたいクセにー」

「別にそれはない」

ぬう！ なんたる強情な！

あまりの素直じやなさにギロリと睨めつけてやると……比企谷君はすでにそっぽを向いていた。

「……だが、まああれだ」

そしてそっぽを向いたまま、比企谷君は照れくさそうに頭をがしがしと搔き始める。

みなさん準備はいいですか？ これ、捻^ダテレが始まるサインですよ？

「……知り合いがいた方が、便利つちや便利かもな」

はいっ、安定の捻^ダテレいたときました！

「ふふつ、この捻^ダテレー」

「でれてねえよ……」

どこがだよ。

「じゃあ仕方ありませんねー。そーんな捻^ダテレ比企谷君の為にも、頑張つて一緒に合格しちゃいますかー」

「……さいですか」

……ああ、幸せだなあ。こんな幸せ、いつまでも続けばいいのに
なあ。

でも幸せってのは誰かに与えてもらうものじやないのよね。だか
らその為にも、明日から超超がんばらんば！

「あ、ねえ比企谷君つ」

だから明日からの勉強漬けの毎日に備えて、比企谷成分をもうひと
充電しとこつかな。

「ん」

「さつきさ、ゴーカートで比企谷君の助手席に乗つてるとき思つたん
だよね、また乗りたいなつて」

「……え、お前またアレに乗りたいの……？」

「アレにじやないわよ！」

「だ、大丈夫……？ 私達ちょっとあのゴーカートをデイスリ過ぎ
じやないかしら……？」

ま、まあもう少しで閉鎖しちゃうから大丈夫よね……？

「……そうじゃなくつてさあ、その……比企谷君の運転する車の助手
席について事」

「…………」

それを聞いて真っ赤になる比企谷君。

「ね！ 私、実は結構恥ずかしいこと言つてね？ あなたの助手席に
乗りたいとか、なんかもうアレな感じじやないですかやだー。」

「……よし、一旦話を逸らそうか。」

「じゅ、受験終わつたら、比企谷君免許とか取りに行つたりしないの
…………？」

「……いや、まだ考えてないな。都会に居る分には車なんて無くたつ
て困らねーし」

「……え、でも比企谷君ずっと千葉に居るつもりなんですよ？」

「ばつか、だからそう言つてんだろ。千葉超都会だろうが！」

なんかすつづくキレられちゃいました。どうやら見解に相違があ
る模様ですね。

「う、うん、まあ千葉が都会かどうかは置いといてさ、免許つてあつても困んないじやない？」

「……取つても車ねーし。買うつもりも今んとこねーしなあ……」

「あ、じやあウチの車使えばいーじやん！ ウチの両親に挨拶にきなよー」

「……おい、なんか別の意味に聞こえるんだが……」

「ハツ!?」

あつぶね！ 油断してたらプロポーズしてたよ私。

「たたた他意はないから！ そういうんじや無いからね！」

まあ心のどこかに他意はあつたんだと思ひますけれどもね！

「……なんか、ね、比企谷君とドライブとか行けたら、楽しいかなーって……」

ど？ とでも言わんばかりに上目遣いでチラチラと熱視線を送つてみると……

「……ま、考えとくわ」

と、耳まで赤くしてどうやらまんざらでもない様子。勝ったなガハハ。しつこいですね、ハイ。

「えへへ～」

よつしや充電完了つと。これで勝つる！

女の子はいつだつて、好きな男の子の助手席を自分専用のベストプロイスクにしたいものなのですよ。

その上しばらく先の約束までしつかり取り付けちゃう狡猾さ！ さすが元計算高いリア充な私。

ん、そろそろ駅に到着しちゃう。これでこのクリスマスデートもお仕舞いかあ……

「んじやあさ！ 免許取つたらまずは近場つて事で、またディスティニー来ようよ！」

「……おい、考えとくつて言つただけで、まだ取りに行くとは言つてねえだろ……」

「またまたあ、もう約束したからねつ」

「だから」

「パンツ、ガン見してたよね♪」

「……善処します」

「ふつふつふ」

——でもね……あれだけ楽しみにしていたクリスマスデートがもうそろそろ終わってしまうというのに、私の心は沈むどころかどこまでも跳ね回る。

なぜなら、一度終わりかけた私の青春は、まだまだリスタートしたばかりなのだから。

……それにこのあと満員電車に揺られて、合法的に比企谷君に抱き付けるお楽しみも残ってるしね、じゅるる。

だからこのクリスマスデートは、ギャルゲーで言えばまだほんのひといベントを消化したに過ぎないのである。まあすでに美耶ルートには突入しちゃつてますけども！

だからこれからも、こうしてゆつくりと、でも確実に……私の青春を取り戻して行こうと思う。出来れば、ずっと比企谷君の隣で……

「あ」

そうそう。私とした事がすっかり忘れてたよ。

私、今日という良き日を迎えて、まだ比企谷君に大事なことを言つてないじゃん。

「ねえ、比企谷君！　すっかり忘れてたんだけどさつ……」

だから言おう。ちょっとだけ遅くなっちゃつたけど。

今日一日の幸せをいっぱい込めた…………んーん？　再会してか

らの九ヶ月間の幸せをいっぱい込めた、最つ高の美耶スマイルで……

「めりー、ぐりすまーーーすっ♪」

終わり☆